

矢出川遺跡群

矢出川第Ⅷ遺跡

南佐久郡南牧村

YADEGAWA

矢出川遺跡群

YADEGAWA

矢出川第Ⅷ遺跡

県営畑地帯総合土地改良事業南牧地区農道6号改修工事埋蔵文化財発掘調査報告書

県営畑地帯総合土地改良事業南牧地区
農道6号改修工事埋蔵文化財発掘調査報告書

長野県佐久地方事務所
長野県埋蔵文化財センター

2017.3

長野県佐久地方事務所
長野県埋蔵文化財センター

南佐久郡南牧村

YADEGAWA

矢出川遺跡群

YADEGAWA

矢出川第Ⅷ遺跡

県営畑地帯総合土地改良事業南牧地区農道6号改修工事埋蔵文化財発掘調査報告書

2017.3

長野県佐久地方事務所
長野県埋蔵文化財センター

はじめに

野辺山高原は千曲川の最上流部、八ヶ岳東麓の標高 1300m を超すなだらかな火山性扇状地にあります。国内で北海道よりも寒い最低気温を何日か記録することもあるこの寒冷な土地での農業は難しく、第二次世界大戦終了までは広大な原野が広がっていました。

戦後の混乱期の深刻な食糧不足と、離職者・復員者の就労確保のための国策として、野辺山高原でも開拓が行われます。寒冷な地における安定した農業生産と厳冬期の生活は困難を極めたことでしょう。開拓が進む 1953 年、地元の考古学研究者の由井茂也らにより日本最初の細石刃が矢出川遺跡で発見されます。その後、開拓は進み、日本を代表する高原野菜の産地として発展しますが、並行して遺跡の調査研究も進み、矢出川遺跡は 1995 年に国指定の史跡となりました。

戦後開拓は現在の農政に引き継がれていきますが、その流れをくむ県営畑地帯総合土地改良事業により、本書で報告する矢出川第Ⅷ遺跡の発掘調査が行われました。調査により、黒曜石や水晶で作られた石器 177 点が発見されました。出土した地層や石器の形から、約 3 万年前に作られたものと考えられます。これまで野辺山高原最古の年代、約 2 万年前を 1 万年遡る遺跡を確認したこととなり、野辺山高原史の冒頭に新たなページを加えることができる成果となりました。

今回の調査成果が考古学研究だけではなく、農業と共に歩んできた地域の歴史研究の中で、地元への誇りと愛着を深める重要な役割を果たすことを期待しています。

最後になりましたが、発掘作業から整理作業、報告書の刊行に至るまで深い御理解と御協力をいただきました地元地権者や区長の皆様、南牧村平沢・野辺山地区の方がた、南牧村教育委員会、長野県教育委員会文化財・生涯学習課や長野県立歴史館ほか、発掘・整理作業にご協力いただいた方がたに心から敬意と感謝を表す次第です。

例 言

1. 本書は県営畑地帯総合土地改良事業南牧地区農道6号改修工事に関わる長野県南佐久郡南牧村大字野辺山字二ツ山に所在する矢出川遺跡群矢出川第Ⅷ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、長野県佐久地方事務所の委託を受けた（一財）長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センターが実施した。
3. これまで発掘・整理作業の概要は『長野県埋蔵文化財センター年報』30、現地説明会、速報展資料等で紹介してきたが、本書をもって最終報告書とする。内容に相違がある場合は本書をもって訂正する。
4. 本書で使用した地図は国土交通省国土地理院発行の1:50,000『蓼科山』・『十国峠』・『八ヶ岳』・『金峰山』である。
5. 発掘調査において以下の機関に業務委託、又は協力依頼をした。
放射性炭素年代測定・樹種同定：パリノ・サーヴェイ株式会社
火山灰分析：株式会社パレオ・ラボ
黒曜石原産地推定：株式会社パレオ・ラボ
石器展開写真撮影：株式会社アルケアーリサーチ
6. 発掘調査において以下の方がたに、ご指導、ご教示をいただいた。記して感謝の意を表します。
会田 進、安蒜政雄、飯田茂雄、島田和高、須藤隆司、堤 隆、中川 清、中島芳栄、平出一治
南牧村教育委員会
7. 発掘・整理作業の担当者及び作業員は第1章第1節第3表に記載した。
8. 本報告書は谷 和隆が執筆し、調査部長平林 彰、調査第2課長町田勝則が校閲した。
9. 註および引用参考文献は各章の末尾に記載した。
10. 調査資料及び遺物は南牧村教育委員会へ移管予定である。

凡 例

1. 遺物分布図・遺構図等に示した国家座標は世界測地系の値である。
2. 遺物番号は本文、挿表、図版、添付 DVD 内データ、注記番号のすべてに共通する。
3. 基本土層・埋土の色調の記録は『新版 標準土色帖』による。
4. 本報告書掲載図の縮尺は原則として以下のとおりである。

(遺構実測図)

全体図・遺構配置図 (1:400) ブロック (1:80) 陥し穴 (1:40)

(遺物実測図)

石器 (3:4)

5. 石器実測図に付した番号・記号は、以下の意味を示す。

(添付例)

(内容)

135

ナイフ形石器
黒曜石 (諏訪星ヶ台群)
V層上部 2.06g BL2

遺物番号

器種
石材 (黒曜石産地・判別群)
出土層位 重量 出土遺構

目 次

はじめに	
例言	
凡例	
目次	
挿図目次	
挿表目次	
図版目次	

第1章 調査の経緯と方法

第1節 発掘調査の経緯と作業経過	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 発掘作業と整理作業の経過	1
3. 調査日誌抄	3
第2節 発掘作業と整理作業の方法	6
1. 発掘作業の方法	6
2. 整理作業の方法	8
3. 遺物と記録の収納	9
第3節 遺跡・遺物の公開方法	9

第2章 遺跡の環境と概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境	12
第2節 周辺の遺跡と歴史的環境	12
1. 研究史	12
2. 歴史的環境	14
第3節 矢出川第Ⅷ遺跡の概観	18
1. 遺跡の範囲	18
2. 発掘調査歴	19
第4節 調査成果の概要と基本層序	19
1. 調査成果の概要	19
2. 基本層序	21

第3章 旧石器時代の遺構と遺物

第1節 概 要	24
第2節 遺構と遺物	26
1. 遺 構	26
2. 遺 物	30
3. 接合資料と個体別資料	32

第4章 縄文時代の遺構と遺物	
第1節 概 要	37
第2節 遺 物	37
第5章 中世の遺構と遺物	
第1節 概 要	38
第2節 遺 構	38
第6章 自然科学分析	
第1節 実施した自然科学分析	39
第2節 火山灰分析	39
1. 分析の目的	39
2. 分析成果の概要	39
第3節 黒曜石原産地推定分析	40
1. 分析の目的	40
2. 分析成果の概要	40
第4節 放射性炭素年代測定・樹種同定	41
1. 分析の目的	41
2. 分析成果の概要	41
第7章 総 括	
第1節 旧石器時代の石器群について	43
1. 石器群の時期について	43
2. 石器の石材について	46
第2節 中世の陥し穴について	46
1. 陥し穴の特徴	46
2. 放射性炭素年代測定値と陥し穴の年代について	47
3. 中世の陥し穴とは何か	47
図版	49
報告書抄録	71
添付 DVD	
遺物観察表	挿表データ
自然科学分析報告書	調査写真
台帳データ	

挿図目次

第 1 図	遺跡範囲	2	第 9 図	旧石器時代の石材・黒曜石産地別分布	28
第 2 図	テストピット配置	7	第10図	鉱物組成と火山ガラスの分布	40
第 3 図	矢出川第Ⅷ遺跡の位置	13	第11図	大久保南 I b 石器文化の石器	44
第 4 図	野辺山編年	17	第12図	広原Ⅱ遺跡 4 層石器群の石器	44
第 5 図	矢出川第Ⅷ遺跡の調査区と過去の掘削トレンチ	20	第13図	A T 降灰以前の可能性が考えられる矢出川第Ⅷ遺跡採集のナイフ形石器	45
第 6 図	テストピットの配置と層序	22	第14図	矢出川第Ⅰ遺跡 C-3 グリッドのナイフ形石器と遺物分布	45
第 7 図	旧石器時代の遺構・遺物分布	25			
第 8 図	旧石器時代の器種別遺物分布	27			

挿表目次

第 1 表	文化財保護法に関わる諸届	1	第 9 表	黒曜石産地組成	26
第 2 表	受・委託契約一覧	1	第10表	水洗選別土壌量と検出碎片数量	26
第 3 表	調査体制	3	第11表	石器個体分類表	33
第 4 表	野辺山高原周辺旧石器時代遺跡一覧	15	第12表	石器観察表（旧石器時代）	34
第 5 表	南牧村縄文時代～中世遺跡一覧	16	第13表	石器観察表（縄文時代）	37
第 6 表	出土層位別遺物数	24	第14表	実施した自然科学分析	39
第 7 表	器種組成	24	第15表	層位・器種別の産地推定結果	40
第 8 表	石材組成	24	第16表	放射性炭素年代測定及び暦年校正結果	42

図版目次

図版 1	遺跡遠景・層序	50	図版12	旧石器時代の遺物 5（石核）	61
図版 2	南牧村遺跡地図	51	図版13	旧石器時代の遺物 6（石核）	62
図版 3	BL1・2 遺物分布図	52	図版14	旧石器時代の遺物 7（石核）	63
図版 4	BL1・2 出土石器・位置図・掘削風景	53	図版15	旧石器時代の遺物 8（石核）	64
図版 5	BL1・2 遺物出土状況	54	図版16	旧石器時代の遺物 9（剝片）	65
図版 6	BL3 遺物分布図・出土石器	55	図版17	旧石器時代の遺物 10（剝片）・打面に残された打撃痕	66
図版 7	BL3 遺物出土状況	56	図版18	縄文時代の遺物・遺物出土状況	67
図版 8	旧石器時代の遺物 1（ナイフ形石器）	57	図版19	SK1 図面・セクション写真	68
図版 9	旧石器時代の遺物 2（貝殻状刃器・石刃）	58	図版20	SK1 調査状況	69
図版10	旧石器時代の遺物 3（石刃・石核）	59			
図版11	旧石器時代の遺物 4（石核）	60			

第1章 調査の経緯と方法

第1節 発掘調査の経緯と作業経過

1. 調査に至る経緯

八ヶ岳高原地域は戦後の開拓に始まり、県営パイロット事業や第二次農業構造改善事業、野菜指定産地事業等の実施により、白菜・キャベツ・レタスなど高原野菜の国内有数の生産地となった。

長野県佐久地方事務所（以下「佐久地方事務所」という。）は生産の安定と更なる発展のため、昭和61年度（1986年度）から県営畑地帯総合土地改良事業を始め、野辺山地区の農道や畑地かんがい施設の整備を進めてきた。この開発にあたっては佐久地方事務所、長野県教育委員会文化財・生涯学習課（以下「県教委」という。）、南牧村教育委員会（以下「村教委」という。）の三者による周知の埋蔵文化財包蔵地の保護協議が行われ、平成10年度（1998年度）に県教委による試掘調査（註1）、平成11年度から平成15年度に長野県埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）による発掘調査・試掘調査・工事立会（註2）、平成17年度に埋文センターによる発掘調査（註3）が実施された。

平成24年度には県営畑地帯総合土地改良事業南牧地区による整備が始まり、周知の埋蔵文化財包蔵地矢出川第Ⅷ遺跡及び平沢パイロット遺跡内もしくは隣接地に所在する農道5号・6号・7号の拡幅工事が計画され、佐久地方事務所、県教委、村教委の三者協議により、同年に村教委が試掘調査を実施した。その結果、農道6号工事予定地から旧石器時代の石器が発見され、平成25年度に埋文センターが発掘調査を実施することが決まった。

2. 発掘作業と整理作業の経過

(1) 発掘作業

調査対象範囲は農道6号の農道7号との接続地点から南に150m、東西幅4mの範囲となる。調査前の状況は幅約3mの舗装された農道であった。

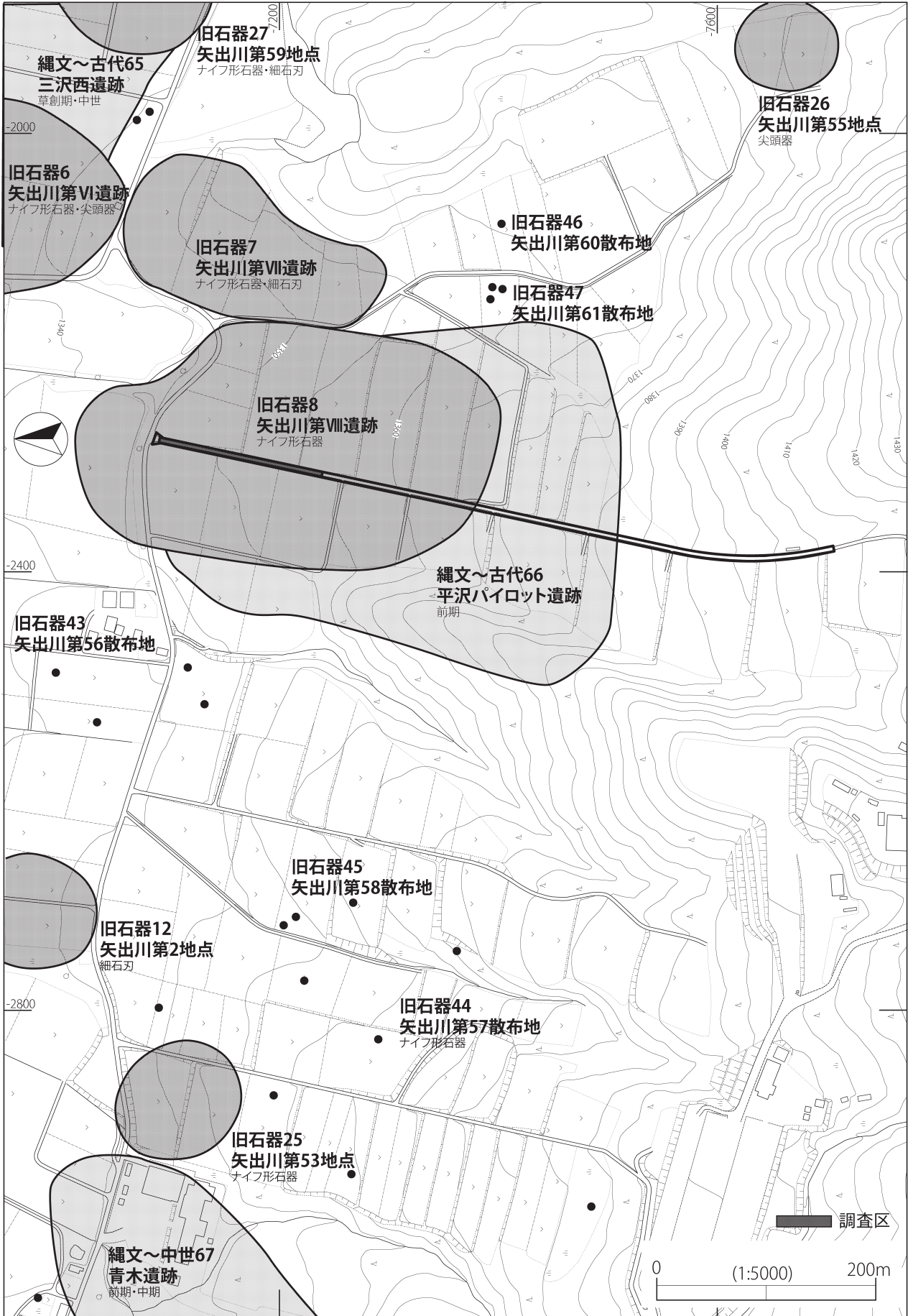
埋文センターの調査前に佐久地方事務所によってアスファルト舗装とその下の路盤碎石上部のはぎ取りが行われた。その後、埋文センターが借り上げた重機を使って路盤下部の掘削を行い、ローム層以下は手掘りで旧石器時代の調査を実施した。発掘作業期間は平成25年（2013年）10月1日～平成25年12月4日、調査面積は600㎡であった。

第1表 文化財保護法に関わる諸届

発掘届 (法92条1項)		発掘許可通知 (法92条2項)		発掘終了報告		埋蔵物発見届 (遺失物法)		埋蔵文化財保管証		文化財認定 (法102条)	
日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号	日付	文書番号
H25.8.29	25長埋 第1-9号	H25.9.10	25教文 第6-12号	H25.12.5	25長埋 第4-7号	H25.12.5	25長埋 第2-7号	H25.12.5	25長埋 第2-7号	H25.12.24	25教文 第20-90号

第2表 受・委託契約一覧

年度	埋蔵文化財発掘調査業務名	契約期間	契約額(円)	作業内容
H25	県営畑地帯総合土地改良事業 南牧地区	H25.9.13～H26.3.10	10,143,000	発掘作業 基礎整理作業
H28	県営畑地帯総合土地改良事業 南牧地区	H28.4.28～H29.3.24	9,200,000	本格整理作業・報告書刊行



第1図 遺跡範囲

(2) 整理作業

平成 25 年度は出土した石器について超音波洗浄機で洗浄を実施した。また、遺物台帳を作成し注記を行った。現場で作成した遺構図などの図面については内容を点検・修正後、台帳を作成した。また、調査時に作成した各遺構の調査所見についても、内容を点検し整理した。調査時に撮影した写真類は写真台帳作成後、フィルム・データとの照合を行い、アルバムに収納した。委託業務として、火山灰分析、黒曜石産地推定分析、年代測定などを実施した。

平成 28 年度は石器の分類、計測、詳細観察、実測、トレース、接合作業を行った。また、発掘作業時サンプリングしたブロック周辺土壌の水洗選別を行い、微細遺物を抽出した。遺構・遺物の図版組み、原稿執筆、報告書の印刷製本を行った。

第3表 調査体制

年度	所長	調査部長	担当課長	本書関連作業の埋文センター担当調査研究員
平成 25 年	窪田久雄	大竹憲昭	岡村秀雄	谷 和隆 前田一也
平成 28 年	会津敏男	平林 彰	町田勝則	谷 和隆
平成 25 年度 発掘作業員 三石房子 猿谷弘迪 吉澤順子 山本美香 吉澤美秋 薩田三奈				
平成 28 年度 整理作業員 中村智恵子 小林秀樹				

3. 調査日誌抄

(1) 発掘作業（平成 25 年度）

- 10 月 1 日 舗装撤去立ち会い開始、機材搬入
- 10 月 3 日 舗装撤去完了
- 10 月 7 日 作業員開始式
重機による表土はぎ及び作業員による表面精査開始、測量杭の設置
- 10 月 8 日 村教委試掘トレンチ跡を確認、重機による 1 次表土はぎ終了
- 10 月 9 日 村教委試掘トレンチ 13 跡内及び近くのローム層より黒曜石製石器 4 点を検出
- 10 月 10 日 テストピット (TP) 12 か所及び石器検出地点周辺に TP13 拡張区・TP14 拡張区を設定
- 10 月 11 日 TP13 拡張区掘り下げ、9 点の遺物の検出により、ブロック (石器集中) の存在を確認、路盤直下地形面測量



舗装撤去 (2013/10/2)



調査前の状況 (2013/9/30)



試掘トレンチ 13 跡内から出土した石器 (2013/10/9)

- 10月22日 TP14 拡張区南半部の掘り下げ開始、TP13 拡張区からのブロック範囲がTP14 拡張区内に拡大することを確認、遺物数65点となる
- 10月31日 TP13 拡張区・TP14 拡張区からの遺物検出数が減る、遺物密度のピークとなる層を越えた模様
- 11月1日 TP1～12 掘り下げ開始、遺構・遺物の検出はない
- 11月6日 TP1～12の掘り下げを一時中断(11/21再開)、TP14 拡張区以南の重機による表土はぎを実施、TP15～19を設定し掘り下げを開始、南牧村長・村議会議員ら発掘作業現場を視察
- 11月12日 須藤隆司、堤隆による調査指導を受けるTP16から水晶製石核2点検出、TP14 拡張区より南にブロックが存在する可能性が高まる
- 11月13日 TP14 拡張区～TP17間の表面精査、TP14 拡張区北半部より複数の石器を検出、これまでのブロックに隣接する新たなブロックを確認
- 11月14日 TP14 北半部掘り下げ、複数の石器を検出し、TP14 北半部から調査区西外側に広がる新たなブロックを確認、TP16及びTP17を南に2m 拡張、掘り下げ
- 11月18日 TP14 拡張区南半部掘り下げ、ナイフ形石器を検出、TP16 拡張区・TP17 拡張区を設定、掘り下げ、TP16 拡張区より水晶製石核1点検出
- 11月19日 TP16 拡張区より、水晶の剥片・碎片を複数検出し、水晶を主体とするブロックを確認
- 11月20日 TP13 拡張区、TP14 拡張区、TP16 拡張区に分布する3か所のブロックの掘り下げ完了、遺物分布状況の写真を撮影、測量
- 11月21日 TP2～12の掘り下げ再開、TP2・3から1～2点の石器を検出、周辺を拡張する
- 11月25日 TP3周辺を拡張、2点の石器を検出したが、他にないことを確認。TP2北側に長さ3m以上の細長い穴を検出、掘り下げ開始、深さ1mに達しても底は見え、TP1～12の掘り下げ、写真撮影、測量を終える。遺物は出土せず。(株)パレオ・ラボによる火山灰分析のための土壌採取を実施
- 11月26日 TP2北側穴の底に逆茂木痕を検出、陥し穴であることが判明し、SK1と命名
- 11月28日 SK1掘り下げ完了、写真撮影を実施。ダメ押しのためTP1～12の間に9か所の新たなTPを設置、掘り下げ開始
- 11月29日 SK1測量、TPの掘り下げすべて終了、新たな遺物の検出はなかった。作業員による作業

終了

- 12月2日 SK1測量終了し、発掘現場での作業を終える
- 12月3日 機材を搬出しすべての発掘作業を終える
- 12月4日 トイレ汲み取り
- 12月6日 ユニットハウス撤去

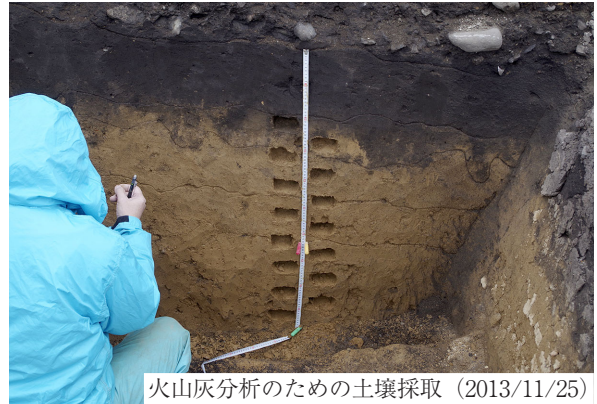


(2) 基礎整理作業（平成25年度）

- 12月5日 基礎整理開始。機材収納、終了関係書類作成
- 12月9日 普及公開事業用に出土遺物の写真撮影を実施
- 12月11日 遺物台帳作成を始める
- 12月18日 放射性炭素年代測定試料の委託準備
- 12月24日 遺構測量支援システム測量データ整理開始
- 12月26日 放射性炭素年代測定・樹種同定分析試料委託業者へ引き渡し
- 1月8日 石器器種判別・簡易計測開始
- 1月14日 遺構所見カード作成開始、黒曜石産地分析試料委託業者へ引き渡し
- 1月20日 年報原稿執筆
- 1月22日 発掘成果及び遺跡報告会の実施について報道公開
- 1月24日 南牧南小学校総合学習授業「遺跡体験」の実施
- 1月25日 南牧村中央公民館にて遺跡報告会を実施
- 1月27日 明治大学博物館にて資料調査を実施
- 1月30日 実績報告書の作成、火山灰分析及び黒曜石産地推定委託業務成果品納品
- 2月3日 展開写真撮影委託資料委託業者へ引き渡し
- 2月14日 展開写真撮影委託業務中間検査
- 2月27日 展開写真撮影委託業務成果品納品
- 3月14日 放射性炭素年代測定・樹種同定分析委託業務成果品納品

12月20日 第7章まで原稿執筆を完了

- 1月13日 所内校正終了、印刷業者に原稿入稿
- 3月3日 印刷完了、納品



火山灰分析のための土壌採取（2013/11/25）



SK1 の写真撮影の準備（2013/11/28）

(3) 本格整理作業（平成28年度）

- 8月1日 本格整理作業開始、遺構図編集開始（～9/2）
- 9月5日 遺構一覧表の作成開始（～9/9）
- 9月12日 遺構写真編集開始（～9/29）
- 10月3日 遺物観察・選別開始（～10/14）
- 10月5日 報告書原稿執筆開始（～12/20）
- 10月17日 遺物一覧表作成開始（～10/28）
- 10月25日 石器接合開始（～10/28）
- 11月1日 遺物図版組開始（～11/11）
- 11月14日 遺物写真図版組開始（～11/29）
- 11月29日 遺物写真図版完成し、すべての図版が完成
- 12月8日 第4章まで原稿執筆が完了。所内校正開始



明治大学博物館資料調査（2014/1/27）



遺物分布状況写真撮影の準備（2013/11/20）



遺物観察・選別（2016/10/12）

第2節 発掘作業と整理作業の方法

1. 発掘作業の方法

(1) 遺跡記号と遺構記号

遺跡記号：矢出川遺跡群の遺跡記号は「DYA」(YADEGAWA)である。埋文センターでは記録の便宜を図るため、遺跡名をアルファベット3文字で示す遺跡記号を用いている。1文字目は長野県を9分割した地区記号で、佐久地域を示す「D」、2文字目及び3文字目は遺跡名のローマ字表記2文字を選択したものである。

本遺跡は矢出川遺跡群に属す矢出川第Ⅷ遺跡のため、「DYA」に次いで「8」を、更に農道6号改修事業が調査原因となるので、「N6」を付した。過去の矢出川遺跡群の調査資料と区別を図るため、遺物注記等には6文字の遺跡記号「DYA8N6」と表記した。

遺構記号：発掘調査では埋文センターで定める以下の遺構記号にアラビア数字を付して遺構名とした。

BL：旧石器時代の石器集中出土範囲。ブロック

SK：単独、もしくは他の掘り込みとの関係が認められない直径2m以下の掘り込み。土坑・陥し穴

(2) 調査グリッドの設定と呼称

埋文センターの発掘調査は国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基点(X=0.0000、Y=0.0000)に、200の倍数値を選んで東西方向・南北方向の測量基準線を設けた。これを元に、調査対象範囲をカバーするようにグリッドを設定している。しかし、今回は調査区の幅が4mと狭く、通常の8m間隔でグリッド杭を打設する調査は非効率であることと、光波測量器とパソコンを連動させて測量を行うシステム(以下「遺構測量支援システム」という。)で実施するため、グリッドを方眼杭等を設定せずに調査を行った。

図面等で示す座標値は国土地理院の平面直角座標系第Ⅷ系の原点を基点とする。

(3) 調査区の設定と遺構の発掘

調査区の設定と掘削：調査前の調査区は幅約3m、長さ150mの農道であった。発掘調査の前にアスファルト舗装とその下の路盤碎石上部のはぎ取りが佐久地方事務所により行われ、埋文センターが立ち会った。アスファルトの厚みは5cm程度、路盤碎石の厚さは約50cmであった。遺構面保護のため佐久地方事務所によるはぎ取りは路盤碎石の下面を残す深さまでとした。

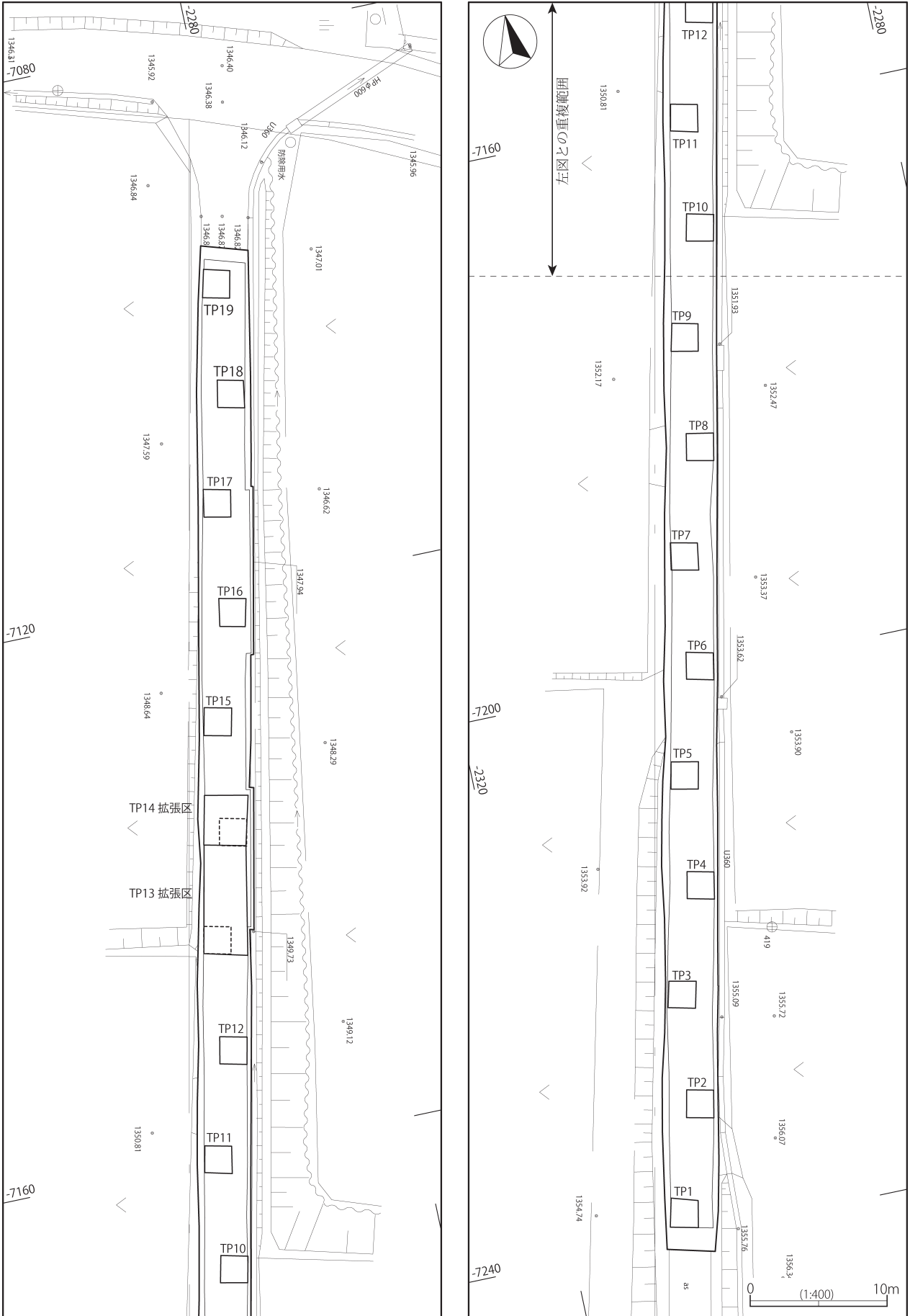
路盤碎石下面以下については、埋文センターが借り上げた重機で表土はぎを行った。当初は路盤碎石と自然堆積のローム層がまだらに残る状況であったが、路盤碎石がほぼなくなるまで、平爪を装着したバケットサイズ0.25㎡の重機で数cmずつ慎重に掘り下げ、合間にジョレンや両刃鎌等の人力による表面精査も行った。はいだ土は2tダンプで調査区外に搬出した。路盤碎石下面以下の重機による掘削深度は10～20cmであった。

これにより後世のかく乱が除去され、自然堆積の黄褐色のハードローム層が顔を出した。

調査区南端から約110mの区間の表土をはぎ、残り40mの区間は1次的な土置き場として利用した。

調査区内に2m×2mのテストピット(以下TPと記す。)14か所を6m間隔で設定した(第2図)。TP13及びTP14周辺は前年の村教委による試掘で複数の石器がみつかったことから、石器が出土することを前提として、TP13以南からTP14までをTP13拡張区、TP14以南からTP15までをTP14拡張区と命名し、全面の調査を実施した。

冬へと向かう季節から、石器が出土する場所を気候の良い時期に掘削できるように優先し、TP13拡張区・TP14拡張区の掘り下げから着手した。掘り下げは両刃鎌あるいは移植ごての小さな掘削具を用いて行っ



第2図 テストピット配置

た。その結果、100点以上の石器が出土した。石器の垂直分布はV層上面から10～20cmの深さで最も多く、20cmを超すと数が減り、30cm以上深いとなくなる。

石器が出土した場所の隣接地は平面的な拡張を行った。結果としてTP13拡張区32㎡とTP14拡張区32㎡、合わせて64㎡の区間について掘り下げることとなった。

TP13拡張区・TP14拡張区の掘り下げ終盤には、TP14拡張区以南の残り40mについて重機による表土はぎを行った。そこにTP15～TP19をこれまでと同一の間隔で設定し、掘り下げを行った。TP16から石器が見つかったため周辺を拡げ（TP16拡張区・TP17拡張区）、複数の水晶製の石器を検出した。

TP1～12も同様の掘り下げを実施した。TP2とTP3で1～2点ずつの石器が出土したため隣接地を拡張したが、それ以上の遺物はみつからなかった。TP4～12では遺物が出土しなかった。

この際、TP2の北に隣接する拡張部分で、長さ約3.7m、幅約1mの黒褐色土の落ち込みを検出した。落ち込んでいる土が新しそうであったことと、土坑にしては大きく細長すぎるため、遺構とかく乱の両方の可能性を考えながら掘り下げを実施した。その結果、深さ約1.2mの底に逆茂木痕を検出し、陥し穴と判断し遺構としての調査を進めた。

最後にTP13拡張区・TP14拡張区・TP16拡張区・TP17拡張区を、U字側溝又は調査区ぎりぎりまで拡張し、複数の石器を検出した。更に、それぞれの拡張区間を10～20cm掘り下げたが、石器は出土しなかった。また、TP3～12の間に1か所ずつ新たなTPを設定し、10～20cmの掘り下げも行ったが、こちらの作業でも遺物は出土しなかった。

遺物の取り上げ及び遺構の記録：佐久地方事務所が道路改修のために設定した基準点305（X=-7081.312,Y=-2289.749,Z=1346.304）、306（X=-7397.363,Y=-2359.027,Z=1370.237）、419（X=-7219.096,Y=-2300.662,Z=1355.497）、420（X=-7317.203,Y=-2333.695,Z=1361.045）の4点を用いて測量を実施した。

遺構測量支援システムで、遺構・調査区・トレンチの範囲等の平面測量を実施したが、断面測量はレベル測定器を用いるアナログ測量で図面用紙に1/20の縮尺で記録し、遺構測量支援システムで測量したセクションポイントと照合した。

遺物は調査区全体で1から通しの番号を付けて、遺構測量支援システムで出土地点の記録を取って取り上げた。その際、遺物の種別及び出土層位を記録するために、次の5列の文字列を用いて記録を行った。1文字目＝遺物の種別（1：土器、2：木製品・木器、3：石器、7：金属器、8：礫）、2文字目＝出土層位（1：I層、2：II層、3：III層上部、4：III層中部、5：III層下部、6：IV層上面、7：IV層上部、8：IV層中部、9：IV層下部、a：V層上面、b：V層上部、c：V層中部、d：V層下部、e：VI層上面、f：VI層上部、g：VI層中部、h：VI層下部、z：かく乱）、3～5文字目＝遺物番号。例えば、V層上部から出土した遺物番号5の石器の5列の文字列は「3b005」となる。

写真記録は6×7リバーサル・モノクロフィルム、一眼レフデジタルカメラを用いた。デジタル写真はファイル名は使用したカメラにより自動的に付される「_IGP」と台帳登録した連番「0001」～「0931」を組み合わせたものとし（_IGP0001、_IGP0002）、LAWデータとJPG形式のデータを保存した。

2. 整理作業の方法

(1) 遺物の注記と遺物管理番号

石器は1cm角以下程度の微細な資料を除きすべてに注記をした。最初に矢出川遺跡群を示す3文字のアルファベット「DYA」、続けて第Ⅷ遺跡農道6号改修地点を示す3文字のアルファベットと数字「8N6」、最後に遺物の取り上げ番号を示した。

(例)「DYA8N6 55」（意味）矢出川第Ⅷ遺跡出土の55番の遺物

なお、注記された遺物番号は取り上げ番号と一致しており、本文・図版中で用いた遺物番号及び添付DVDに収録した遺物台帳の遺物番号と1対1で対応する。

(2) 遺物の整理について

すべての石器は超音波洗浄機（アイワ医科工業社製 AU-12C）を用いて洗浄を行った。

土器・金属器は出土していない。

石器は器種分類した後、石器類、石核、剥片、碎片の法量と重量の計測を行った。剥片石器については、石材別に個体分類を行い、調査区全体を対象に接合作業を実施した。しかし、接合する石器は得られなかった。

(3) 遺構図の整理

遺構図は遺構測量支援システムを用いて測量した平面図と、測量基準点を基に設定したレベル測定器で計測した標高値と、遺構測量支援システムで測量したセクションポイントを基に図面用紙に1/20の縮尺で測量した断面図がある。図面用紙に記録した断面図は、スキャナでスキャンして、Adobe社製IllustratorCS6を用いてデジタルトレースを行った。

(4) 写真記録の整理

フィルム写真はアルバムに収納し、撮影内容を注記した。デジタル写真は、ハードディスクとDVDに記録し、_IGP0001～_IGP0931の通し番号をファイル名とし、ファイル名と撮影内容を記入した台帳を作成した。

3. 遺物と記録の収納

遺物は、材質・種類別に報告書掲載遺物（管理番号を付した参考資料を含む）と非掲載遺物に分けてテンバコに収納し、遺物収納台帳を作成した。

遺構平面図、断面図等の実測図面は通し番号（図面番号）を付けて図面台帳に登録し、図面ファイルに収納した。

写真は、発掘作業で撮影した遺構関係写真と、整理作業で撮影した遺物写真とに分けて写真台帳に登録し、アルバムに収納した。デジタル写真データは撮影内容をファイル名とし、DVD及びポータブルハードディスクに記録した。

第3節 遺跡・遺物の公開方法

埋文センターが行う埋蔵文化財の公開は、発掘作業時に行うもの、整理等作業時に行うもの、報告書刊行後に行うものなど、3つの段階がある。本書では、前2者の段階について扱う。

(1) ホームページでの公開、「発掘だより」の配布

発掘調査の情報を迅速に、そして的確に公開することは、発掘調査の透明性確保という観点において重要である。埋文センターでは、月に1回程度、公式ホームページに調査情報を開示するとともに、来跡者のみならず遺跡周辺の住民に対し「発掘だより」を配布して、情報の早期公開・共有化を図るよう努めている。矢出川第Ⅷ遺跡では、平成25年度に5回、調査状況をホームページに掲載した。また「発掘だより」は平成25年度に1回配布した。

(2) 遺跡報告会の開催

埋文センターでは、年に1回～2回程度、発掘調査の進行状況に応じ現地説明会を実施するようにして

いるが、矢出川第Ⅷ遺跡の場合、発掘調査期間が短期間であったこと、発掘調査区の面積が狭かったこと、季節が晩秋から初冬の冷涼な気候であったこと、来場者駐車場の確保が難しかったことなどから、現地説明会を開催することができなかった。

しかし、地元での教育普及活動は、身近にある遺跡の埋蔵文化財保護思想の普及啓発だけではなく、発掘作業、整理作業への理解を得て、事業を円滑に進めるために必要であるので、発掘調査終了後の平成26年1月25日（土）に南牧村中央公民館において遺跡報告会を実施した。遺跡報告会では矢出川第Ⅷ遺跡の調査成果を中心に報告を実施した。

「遺跡報告会」や「展示会」は、遺跡の所在する地域と、より広い地域を対象に、それぞれの場所を選定し以下のとおり開催している。

遺跡報告会

実施日	場 所	内 容
平成26年1月25日(土)	南牧村中央公民館	平成25年度調査概要
平成26年2月6日(木)	長野県埋蔵文化財センター	平成25年度調査概要
平成26年7月13日(日)	浅間縄文ミュージアム	平成25年度調査概要

展示会

実施日	場 所	内 容
平成26年2月24日(月)～2月27日(木)	長野県佐久合同庁舎	発掘調査パネル展
平成26年3月21日(土)～6月1日(日)	長野県立歴史館	「長野県の遺跡発掘2014」
平成26年7月19日(土)～8月24日(日)	長野県伊那文化会館	「長野県の遺跡発掘2014」

(3) 発掘体験や遺跡体験による文化財保護思想の深化

遺跡の発掘現場は、住民が地域の歴史に対して興味と関心を持ち、埋蔵文化財保護行政に対する理解を深めるうえで、たいへん重要な場である。この意味で発掘現場を公開することは、目的をよく理解し、適切な手法(現地説明会・現地公開など)を選択することで、大きな効果を期待できる。

矢出川第Ⅷ遺跡では遺跡周辺の環境条件等により、「遺跡報告会」のスタイルを選択したが、文化庁が保存と活用を進めるための具体的な施策(註4)として挙げる「(2)地域づくりにむけての諸施策の実施」、「(エ)国民・地域住民のニーズに応じた公開・活用事業の実施」事例として、地元小学校とともに、遺跡の発掘調査を通じて以下の活動を実施した。

通学区に発掘現場を含む南牧村南小学校の依頼により、3・4年生49名、5・6年生24名を対象とした総合学習授業を実施した。内容を以下に記す。

総合学習授業「遺跡体験」

実施日	タイトル	内 容
平成26年1月24日(金)	旧石器時代の野辺山高原 矢出川第Ⅷ遺跡の発掘調査	スライドショーによる遺跡・発掘調査の説明
	石器を触ろう	出土遺物の見学と実際に触れてもらう
	黒曜石ってどんな石？	石器づくりに先立って材料である黒曜石の学習
	石器を作ってみよう	黒曜石を使った石器づくり体験

註

- 1) 長野県教育委員会 2000 『大規模開発事業地内遺跡－遺跡詳細分布調査報告書－』
- 2) 長野県埋蔵文化財センター 2004 『県営畑地帯総合整備事業野辺山地区埋蔵文化財発掘調査報告書－長野県南牧村内－矢出川遺跡群－』
- 3) 長野県埋蔵文化財センター 2005 『県営畑地帯総合整備事業野辺山地区埋蔵文化財発掘調査報告書2－長野県南牧村内その2－矢出川遺跡群－』
- 4) 文化庁 2007 『埋蔵文化財の保存と活用(報告)－地域づくり・ひとづくりをめざす埋蔵文化財保護行政』18頁参照



遺跡報告会 (2014/1/25)



南牧南小遺跡体験スライドショー (2014/1/24)



南牧南小遺跡体験「石器を触ろう」 (2014/1/24)



南牧南小遺跡体験「黒曜石ってどんな石？」 (2014/1/24)



佐久合同庁舎パネル展 (2014/2/24)



長野県の遺跡発掘 2014 内覧会 (2014/3/20)

第2章 遺跡の環境と概要

第1節 遺跡の位置と地理的環境

矢出川第Ⅷ遺跡は南佐久郡南牧村大字野辺山字二ツ山に所在する。J R小海線野辺山駅から約2.2km南にある(第3図)。

千曲川は長野・埼玉・山梨県境に位置する甲武信ヶ岳(標高2160m)を源流とし、佐久盆地、長野盆地等を経て、丘陵と山間地を抜けて新潟県に入り、信濃川と名前を変えて日本海に流れ込む全長367kmに及ぶ日本最長の河川である。

矢出川は八ヶ岳東の山腹を水源とし、遺跡の北約300mを東に流れる。ここから約1.5km下流で三沢川と合流し北に向きを変える。更に八ヶ岳東麓から流れる複数の川と合流しながら北東に流れ、三沢川合流点から約6km下流の川上村御所平付近で東から流れて来る千曲川に合流し北流する。この合流点は千曲川源流からおおよそ25km下流に位置する。

遺跡の西北西約2.2kmには、標高1375mのJ R鉄道最高地点があるが、ここがJ R小海線と太平洋側と日本海側を分ける中央分水嶺が交差している。分水嶺の北東側の雨水は矢出川、千曲川、信濃川を経て日本海に注ぎ、南西側の雨水は大門川、釜無川、富士川を経て太平洋に注ぐ。周辺の中央分水嶺を西から東にたどると、八ヶ岳連峰最高峰の赤岳(標高2899m)から県境尾根を東南東に下る。標高1600m付近から、なだらかな火山麓扇状地となり南東に向きを変え、奥秩父山塊にぶつかる。その先は東に向かい飯盛山、横尾山を通過して甲武信ヶ岳に至る。J R鉄道最高地点は火山麓扇状地の末端と秩父山塊の境付近に位置しており、峠を越えないなだらかな地形を経て太平洋に注ぐ河川の水系から日本海に注ぐ河川の水系へと抜けられる場所となっている。

八ヶ岳東麓に広がるなだらかな火山麓扇状地一帯は野辺山原(通称:野辺山高原)と呼ばれている。その範囲はおおよそ南北4km、東西4kmに及び、旧石器時代から縄文時代の遺跡が多く分布している。

野辺山の1981～2010年の年平均気温は6.9℃で、東京の16.3℃と比較すると10℃近く低い(註1)。夏には冷涼な気候を利用した高原野菜の栽培が大規模に行われており、一帯には見渡す限りの高原野菜の畑が広がる。一方、冬は雪は少ないが、-10℃を下回る非常に寒い日が続く。

第2節 周辺の遺跡と歴史的環境

1. 研究史

国指定史跡「矢出川遺跡」は日本列島に細石刃石器群が存在することを最初に確認した遺跡として知られている。「矢出川第Ⅰ遺跡」として南牧村の遺跡地図に登録されており、約1.5km南西には本書が報告する矢出川第Ⅷ遺跡がある。

「矢出川遺跡」の発見は、日本列島初の旧石器時代遺跡の発掘調査となった群馬県岩宿遺跡の調査から



第3図 矢出川第八遺跡の位置

わずか4年後のことであった(芹沢1963)。この発見の前月には東に隣接する川上村の馬場平遺跡の発掘調査が芹沢長介らにより行われ、ローム層から出土する槍先形尖頭器石器群の存在が確認されている(芹沢1955)。現在、細石刃石器群と槍先形尖頭器石器群は南西諸島を除く日本列島のほぼ全域に存在することが明らかとなっているが、両石器群が日本列島に存在することを立証するための旧石器時代研究黎明期のフィールドは八ヶ岳東麓に集まっていた。これらの成果は、野辺山高原周辺の数多くの考古資料を採集した地元研究者の由井茂也と、その資料の重要性を確信し、発掘調査を実施した芹沢の功績が大きい。

1974年～1978年には京都女子大学考古学研究会による分布調査が行われた(京都女子大学考古学研究会1978・1979)。野辺山高原周辺の旧石器時代から縄文時代を中心とする74遺跡の存在が示された。1979年～1981年には明治大学考古学研究室による矢出川遺跡群総合調査が実施された。詳細な分布調査により、矢出川流域のおよそ3km四方のひろがりを持つ矢出川遺跡群に旧石器時代の11の遺跡、77の分布地点、92の散布地があることが明らかとなった(明治大学考古学研究室1980・1981・1982)。

1990年代に入ると、堤隆を中心とする八ヶ岳旧石器研究グループの活動が活発になる。1990年に中ッ原第5遺跡B地点(堤編1991)、1992・1995年には中ッ原第1遺跡G地点で発掘調査が行われ(堤編1995・1996)、いずれも細石刃石器群が検出されている。シンポジウムも盛んで、1993年「細石刃文化研究の新たなる展開」(堤編1993)、2000年「人類の適応行動と認知構造」(堤編2000)、2003年「日本の細石刃文化」(堤編2003)、2012年「細石刃石器群研究へのアプローチ」(堤編2012)、2013年「日本列島における細石刃石器群の起源」(堤編2013)が実施されている。その対象は日本列島に細石刃文化が存在することを証明した野辺山高原から日本列島全体へと拡大している。

1999～2005年に県営畑地帯総合土地改良事業に伴う、工事立会いや小規模な発掘調査が埋文センターにより実施され、2005年の調査においてまとまった石器群が検出されている(長野県埋蔵文化財センター2004・2005)。

1992～1993年に土屋忠芳ら地元の研究者によって南牧村遺跡詳細分布調査が実施された(南牧村教育委員会1993)。前記した京都女子大学の分布調査結果と合わせて、縄文時代から中世の81か所の遺跡が南牧村の遺跡地図に掲載されたが、旧石器時代遺跡は別の分布調査報告書が必要とされた。

2004年に堤隆は明治大学考古学研究室、京都女子大学考古学研究会、八ヶ岳旧石器研究グループ及び地元研究者の従前の分布調査を集成し、野辺山地区の96か所を旧石器時代の遺跡とした(南牧村教育委員会2004)。

2. 歴史的環境

前記した縄文時代～中世と旧石器時代の2つの遺跡地図に掲載された遺跡が現在の南牧村の遺跡地図となる。図版2に両者を合わせた野辺山原中心の遺跡地図を、第4表に旧石器時代の遺跡一覧を、第5表に縄文時代～中世の遺跡一覧を示す。以下、野辺山原周辺の遺跡を時代ごとに概観する。

旧石器時代:南牧村野辺山地区には矢出川遺跡群(1～73)、中ッ原遺跡群(74～85)、ハケ遺跡群(86～95)と3か所の旧石器時代遺跡群が存在する。また、東接する川上村にも馬場平遺跡群、柏垂遺跡群、横尾遺跡群の3か所の遺跡群があり、両村合わせて旧石器時代遺跡の密集地域として知られている(註2)。

堤隆はこの地域の旧石器時代～縄文時代草創期の編年となる「野辺山編年」を示している(堤1993)(第4図)。以下、野辺山編年に沿って旧石器時代を概観する。

野辺山第I期:「横斜ぎ技法による切出形ナイフ形石器や基部調整形ナイフ形石器、角錐状石器などが特徴的に認められる時期」とされ、始良丹沢火山灰(以下、「AT」という。)降灰後、相模野段階V(諏訪間1988)に並行する。矢出川第19地点(15)付近の野辺山B5地点(佐藤1970)や矢出川第I遺跡(1)(戸

第4表 野辺山高原周辺旧石器時代遺跡一覧 (南牧村教育委員会 2004 から抜粋)

番号	遺跡名	ナイフ形石器	尖頭器	細石刃	細石核	その他
1	矢出川第Ⅰ遺跡	5	2	5000	644	○
2	矢出川第Ⅱ遺跡	1		4		278
3	矢出川第Ⅲ遺跡	1			1	47
4	矢出川第Ⅳ遺跡	7		159	68	172
5	矢出川第Ⅴ遺跡					14
6	矢出川第Ⅵ遺跡	2	1			37
7	矢出川第Ⅶ遺跡	2			1	35
8	矢出川第Ⅷ遺跡	7				108
9	矢出川第Ⅸ遺跡					104
10	矢出川第Ⅹ遺跡		1	2	1	57
11	矢出川第Ⅺ遺跡	1				43
12	矢出川第2地点			1		18
13	矢出川第15地点					7
14	矢出川第18地点					7
15	矢出川第19地点			1		2
16	矢出川第21地点					4
17	矢出川第22地点					9
18	矢出川第23地点	1				6
19	矢出川第29地点					3
20	矢出川第38地点					15
21	矢出川第39地点					14
22	矢出川第47地点	1				21
23	矢出川第49地点	1				28
24	矢出川第52地点	1				12
25	矢出川第53地点	1				13
26	矢出川第55地点		2			34
27	矢出川第59地点	1		2		55
28	矢出川第64地点			1		88
29	矢出川第65地点			1		23
30	矢出川第67地点		1	3	1	52
31	矢出川第1散布地					1
32	矢出川第20散布地					2
33	矢出川第24散布地					1
34	矢出川第27散布地					2
35	矢出川第28散布地					2
36	矢出川第31散布地					4
37	矢出川第32散布地			1		1
38	矢出川第33散布地					○
39	矢出川第42散布地					4
40	矢出川第45散布地					4
41	矢出川第48散布地					1
42	矢出川第50散布地					6
43	矢出川第56散布地					5
44	矢出川第57散布地	1				2
45	矢出川第58散布地					5
46	矢出川第60散布地					2
47	矢出川第61散布地					1
48	矢出川第62散布地	1				
49	矢出川第63散布地					○
50	矢出川第68散布地					3
51	矢出川第69散布地					5
52	矢出川第70散布地					4
53	矢出川第71散布地					1
54	矢出川第72散布地					3
55	矢出川第73散布地					○
56	矢出川第74散布地					3
57	矢出川第75散布地					4
58	矢出川第76散布地					10
59	矢出川第78散布地					2
60	矢出川第79散布地					2
61	矢出川第80散布地					2
62	矢出川第81散布地					1
63	矢出川第82散布地					○
64	矢出川第83散布地					1
65	矢出川第84散布地					2
66	矢出川第85散布地					○
67	矢出川第86散布地					2
68	矢出川第87散布地					1
69	矢出川第88散布地					7
70	矢出川第89散布地	1				1
71	矢出川第90散布地					○
72	矢出川第91散布地					6
73	矢出川第92散布地	1				1
74	中つ原第1遺跡A地点	○				○
75	中つ原第1遺跡D地点	1	1			○
76	中つ原第1遺跡B地点	○	○			○
77	中つ原第1遺跡C地点	70				○
78	中つ原第1遺跡E地点	1				○
79	中つ原第1遺跡F地点	1				○
80	中つ原第1遺跡G地点			177	9	○
81	中つ原第5遺跡B地点			160	4	○
82	中つ原第6遺跡	1				○
83	中つ原第4遺跡A地点		2			○
84	中つ原第3遺跡B地点					○
85	中つ原第3遺跡A地点					○
86	ハケ第1地点	2	1			○
87	ハケ第2地点	1				○
88	ハケ第3地点	1	1			○
89	ハケ第4地点	1				○
90	立石15-3					1 ○
91	立石15-5	1				○
92	立石17-6		1			○
93	立石18-14					○
94	夫婦石1-2	1				○
95	夫婦石4-2	1				○
96	未命名					○
川22	切草	35	10			12
川23	西の腰A(北側)		○	○		○
川23	西の腰B(南側)	9	35			12
川24	柏垂	22	25			22
川41	三沢遺跡	8				11
川42	大平		○	○	○	
川43	日影					
川44	坂上	○	○			
川45	立石		11			5
川46	久保		○			○

※ 31～73の散布地は点のみで、範囲が示されていないため、
図版2での表記は省略した。

※ 番号のみの番号は南牧村の遺跡番号に対応する。

※ 頭に川が付く番号は川上村の遺跡番号に対応する。

第5表 南牧村縄文時代～中世遺跡一覧 (南牧村教育委員会 1993 から抜粋)

番号	遺跡名	縄文	弥生	古墳	奈良 ～ 平安	中世
1	北坂上					○
2	清水原				○	
3	樽ノ原	○				
4	海ノ口城山	○			○	
5	志なの入	○				
6	古屋敷					○
7	高見沢入口	○			○	
8	海ノ口西原	○				
9	西部別荘地内	○				
10	市場	○			○	
11	二手	○				
12	上ノ平	○				○
13	川平北	○			○	
14	上ノ畑	○				
15	広瀬新田	○				
16	自張平	○				
17	志ほり沢	○				
18	広瀬狐原	○				
19	広瀬東原	○				
20	大原	○				
21	夫婦石西	○				
22	干草場	○				
23	板橋	○	○			
24	西手原	○				
25	西手原南	○				
26	茶せき A	○				
27	茶せき B	○				
28	赤土	○				
29	板橋牧場	○				
30	横堰	○				
31	まきば	○			○	
32	板橋開拓碑下	○				
33	小板橋	○				
34	黒沢	○				
35	上ノたい	○				
36	立石西				○	
37	茶堰	○	○			
38	ノミンドウ	○	○			
39	たけ	○				
40	夫婦石	○				
41	ざっこの沢	○	○			
42	梨ノ木平第1	○			○	
43	梨ノ木平第2	○				
44	梨ノ木平第3	○				
45	梨ノ木平第4	○			○	
46	梨ノ木平第5	○			○	○
47	梨ノ木平第6	○	○		○	
48	梨ノ木平第7	○				
49	中ッ原	○	○		○	
50	中ッ原北	○			○	
51	中ノ沢	○				
52	葎ノ頭	○				
53	野辺山駅北	○	○		○	
54	喜峯ヶ丘	○				
55	七軒家	○				
56	喜峯ヶ丘南	○				
57	ニッ山北	○	○			
58	ニッ山	○	○			
59	ニッ山西	○				
60	ニッ山南	○	○			
61	野辺山駅南	○				
62	矢出川北	○	○			
63	矢出川南	○	○	○		
64	片桐牧場上	○				
65	三沢西	○				○
66	平沢パイロット	○				
67	青木	○				
68	三軒家	○			○	
69	矢出原南	○				○
70	矢出原	○				○
71	矢出原北	○				○
72	豊ノ原	○	○			○
73	野辺山駅前	○				
74	広原					○
75	出口	○				○
76	馬越	○			○	
77	西小倉	○				
78	小倉					○
79	海尻城跡					○
80	海ノ口城跡					○
81	平沢城跡					○
川22	切草	○	○		○	
川23	西の腰	○				
川24	柏垂	○				
川41	三沢	○				
川42	大平	○				
川43	日影	○			○	
川44	坂上	○				
川45	立石	○	○		○	
川46	久保	○	○		○	

※番号のみの番号は南牧村の遺跡番号に対応する。
 ※頭に川が付く番号は川上村の遺跡番号に対応する。

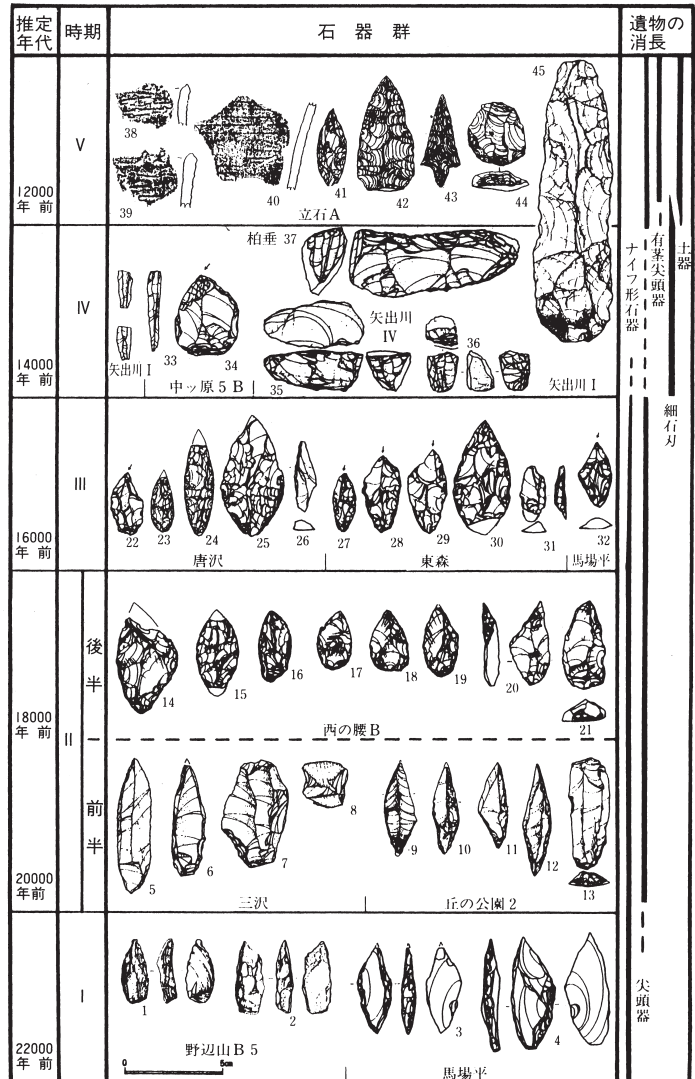
沢1964)、馬場平遺跡(地図外)(芹沢1955、芹沢・柳沢1982)の一部の石器群が該当するとされている。埋文センターが調査した矢出川遺跡群矢出川第59地点(27)に近接する地点で検出した角錐状石器を組成するブロックはこの時期に属すと考えられる(長野県埋蔵文化財センター2005)。冷涼な気候の地として知られる野辺山高原に最終氷期の最寒冷期に人類が活動していたこととなる。なお、野辺山第I期以前について堤は「とりあえずAT降灰をさかのぼるものはなさそうだ」としている。

野辺山第II期前半:「発達した石刃技法と、その石刃を素材とした優美な二側縁加工のナイフ形石器で特徴づけられる時期」とされ、相模野段階VIに並行する。三沢遺跡(川41)(三沢遺跡発掘調査団編1987)と北杜市清里の丘の公園第2遺跡(地図外)(山梨県教育委員会1989)が該当するとされている。丘の公園第2遺跡は、矢出川遺跡群の南西約5kmに位置し、規格性の高い石刃を素材とする2側縁加工のナイフ形石器を特徴とする。南関東では槍先形尖頭器を組成する遺跡が多くみられるが、野辺山原周辺での槍先形尖頭器の組成は未確認である。三沢遺跡と丘の公園第2遺跡の出土層位はATより上位との火山灰分析結果がある。

野辺山第II期後半:「小形化・幾何形化したナイフ形石器が特徴的に認められる時期であり、また小形尖頭器もみられる」とされ、相模野段階VIIに対比される。該当するとされる西の腰B遺跡(川23)は、小型で基部が丸い涙形のナイフ形石器と、同様の平面形を呈する槍先形尖頭器が組成する。柏垂遺跡(川24)の一部にも当該期の石器群の存在が指摘されているが、いずれも採集資料であり、層位的な裏付けや詳細は定かではない。

野辺山第III期:「ナイフ形石器にかわり尖頭器が組成の主体をなす尖頭器文化期」とされる。柏垂遺跡(芹沢・柳沢1982)、中ッ原第1遺跡B地点(76)(麻生1955)、唐沢遺跡(地図外)、東森遺跡(地図外)の槍先形尖頭器石器群が該当する。相模野段階VIIIに対比される。小型で細身の両面加工の槍先形尖頭器や小形で槌状剝離を有する槍先形尖頭器が特徴的に存在する。黒曜石以外の石材が多用されることもこの時期の特徴といえよう。

野辺山第IV期:「細石刃文化期」とされる。矢出川第I遺跡、矢出川第IV遺跡(4)、矢出川第X遺跡(10)、中ッ原第5遺跡B地点(81)(八ヶ岳旧石器研究グループ1991)、中ッ原第1遺跡G地点(80)(八ヶ岳旧石器研究グループ1995)、柏垂遺跡等の細石刃石器群が該当する。相模野段階IX・Xに対比される。矢出川遺跡群と中ッ原遺跡群はこの時期の遺跡が中心となる。両遺跡群には本州最大級の遺跡があり、遺跡



第4図 野辺山編年(堤1993)

密度も最高級であることから、細石刃文化期の野辺山高原周辺は本州で最も多くの人を訪れた地域であったと考えられる。

野辺山第Ⅴ期：「大形尖頭器や刃部磨製石斧など種子柴系石器群の波及が認められ、最古の土器がくわわる段階」「細石刃石器群が消滅し大形木葉形尖頭器や柳葉形尖頭器・有茎尖頭器などを含む尖頭器石器群と無文土器や隆起線文土器群が出土する時期」とされる。相模野段階Ⅺ以降に相当する。柏垂遺跡や馬場平遺跡の槍先形尖頭器石器群の一部、北杜市清里の丘の公園14番ホール遺跡（地図外）（山梨県教育委員会1985）などの槍先形尖頭器石器群が該当するとされる。丘の公園14番ホール遺跡は丘の公園第2遺跡に近く、矢出川遺跡群の南西約5kmに位置する。土器が出現している時期のため、縄文時代草創期に位置づけられるため、土器を伴わない石器群については野辺山第Ⅳ期に属す可能性も考えるべきだろう。

縄文時代：第5表に掲載した90遺跡中81遺跡が縄文時代の遺跡とされている。旧石器時代と重複する遺跡が目立つが、面的な発掘調査事例はほとんどない。

立石遺跡（川45）では試掘調査が行われ、草創期の微隆起線文土器片・表裏縄文土器片と有茎尖頭器、種子柴型石斧が検出されている。

前期になると遺跡が急増する。葎ノ頭遺跡（52）では諸磯A・B・C式土器と共に石鏃3000点、石匙250点、球状耳飾等大量の遺物が採集されており、大規模遺跡の存在が予測されている。

三沢遺跡（川41）では土坑墓6基が調査され、中期初頭の土器が多量に検出されている。

葎の頭遺跡の北東に隣接する中ノ沢遺跡では、後期～晩期の土器や土製耳飾などの良好な資料が出土している（向坂1951）。

弥生時代：弥生時代は16遺跡と数が少なく、断片的な資料が多い。

矢出川南遺跡（63）では前期末の条痕文の甕と、赤彩された後期の土器が採集されている。

その他、磨製石鏃等が点々と採集されている。

古墳時代：矢出川南遺跡で前期の土師器が採集されているのみで、ほとんど遺跡がない状態である。

奈良・平安時代：奈良・平安時代は20遺跡が確認されている。集落等は確認されていないが、かつても道があったと想定される現国道141号線周辺で点々と土師器等が採集されている。

中世・近世：中世は15遺跡が確認されている。矢出原南遺跡（69）、矢出原遺跡（70）、矢出原北遺跡（71）で鉄鏃が採集されている。この一帯で鉄鏃が多く採集されたことが「矢出原」の地名の由来と考えられるという（菊地1986）。土屋忠芳によると分布は野辺山原のほぼ全域に及び、鉄鏃96、刀6、古銭60が確認されている（土屋1983b）。

第3節 矢出川第Ⅷ遺跡の概観

1. 遺跡の範囲

矢出川第Ⅷ遺跡の範囲は、村教委が作成した旧石器時代の遺跡地図に示されている（図版2、8）（長野県南牧村教育委員会2004）。一方、縄文時代～中世の遺跡地図で縄文時代の遺跡として示されている平沢パイロット遺跡は大部分が矢出川第Ⅷ遺跡と重なっている（図版2、66）（南牧村教育委員会1993）。時代の違いにより2つの名称が与えられているものの、同一空間に存在する旧石器時代と縄文時代の重層遺跡と解釈できる（第1図・図版2）。

矢出川第Ⅷ遺跡は飯盛山の裾のなだらかな斜面に立地しており、北は矢出川、南は飯盛山の山腹、東西は矢出川に向かって北流する2本の沢に囲まれた、南北約400m、東西約200mの範囲を持つ。

今回の調査区（第5図）は遺跡のほぼ中央を南北に貫く幅4m強の農道開発に伴うもので、遺構・遺物の分布はその北半に集中していた。

2. 発掘調査歴

土屋忠芳が野辺山原で採集した資料を紹介した『矢出川 水晶考古学』（中村龍雄編 1983）では、矢出川第Ⅷ遺跡は「平沢パイロット」として紹介されている。「昭和42年（1967年）、由井茂也と私に調査するよう（県教委から）連絡があり、両人で1か月に亘り調査したのであったが、このときは遺跡発見に成果が少なかった。これより数年後、この地帯が傾斜地であるため、土の流失を防ぎ、また、大型農耕機械導入の目的でブルドーザーによって耕進改善を行った。ときに、大集中豪雨に見舞われ、大被害を蒙ったのであったがその跡地から、石器が発見されて順次に、総量100kgほどの多量の石器が採集された」との記述がある。1970年前後に行われた農地造成事業により旧石器時代遺物の包含層の一部が掘削され地表に現れたものと考えられる。また、この本では「平沢パイロット」採集品として400点の水晶製石器の他、槍先形尖頭器を中心とした旧石器時代の石器が紹介されている。

土屋忠芳・由井茂也採集資料については、1979年の野辺山シンポジウムでも地点名「矢出川13」として槍先形尖頭器83点、ナイフ形石器17点、削器11点、2次加工のある剥片6点、使用痕ある剥片1点、石核59点、石核調整剥片7点、刃器状剥片1点、剥片434点、原石21点の器種組成が報告されている（明治大学考古学研究室1980）（註3）。

1980年に実施された明治大学考古学研究室による矢出川遺跡群の分布調査で、ナイフ形石器7点、石核5点、剥片・碎片103点が採集され、「矢出川第Ⅷ遺跡」として位置づけられた（矢島1981）。また、試掘調査も行われ、2m×2mのピット9か所が掘削され、その内6か所から、ナイフ形石器4点、槍先形尖頭器1点、搔器4点、削器1点、剥片22点、碎片8点、石核1点、石鏃1点が検出された（辻本・桑野1981）。報告に掲載された「発掘グリッド概念図」及び「第Ⅷ遺跡の発掘」写真とセクション図等の標高記録から推定すると、石器が検出された6か所の試掘ピットは、今回の調査区に隣接している（第5図）。

2012年10月に農道6号建設計画に先立つ、矢出川第Ⅷ遺跡周辺の試掘調査が村教委によって実施された（註4）。東西に走る農道7号線から分岐する農道6号北端から約500mの範囲に、幅1.45～1.95m、長さ2.97～11.9m、深さ0.6～1.9mのトレンチ13か所の掘削を行い、北端とその隣のトレンチ（トレンチ13・12）のローム層から黒曜石製の石器が検出された。また、北から3番目のトレンチ（トレンチ11）では黒曜石製の石鏃が検出されたため、発掘調査による記録保存が必要な範囲は北端から150mの範囲と判断された。農道6号の東側100～150mに並走する農道5号の試掘調査も同時に行われたが、遺構・遺物は検出されなかった。

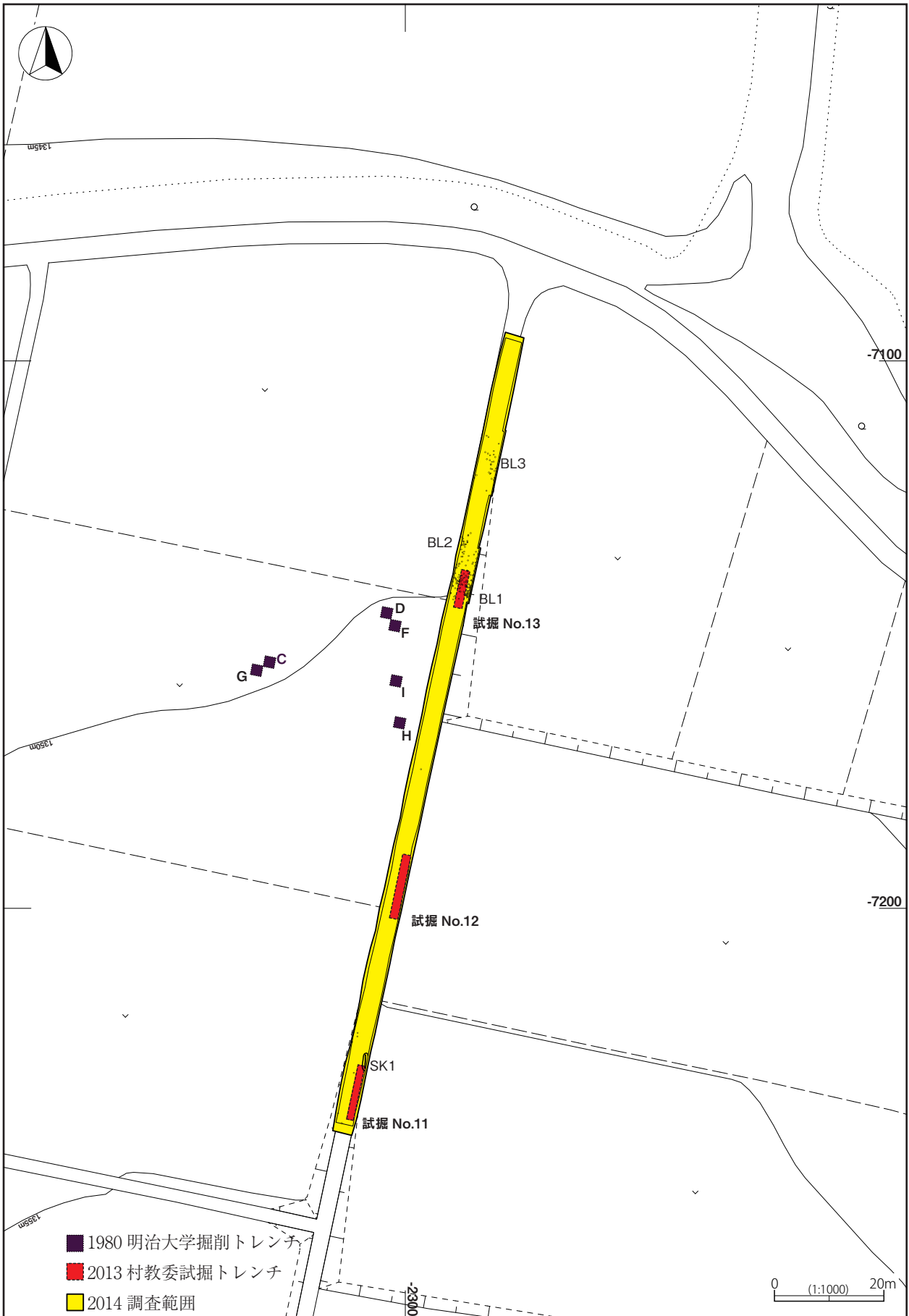
第4節 調査成果の概要と基本層序

1. 調査成果の概要

県営畑地帯総合土地改良事業南牧地区農道6号改修工事に伴う発掘調査は、平成25年度（2013年度）に実施した。

検出した遺構・遺物は、旧石器時代、縄文時代、中世に属する。

旧石器時代では、AT降灰以前のブロック3か所から、ナイフ形石器4点、貝殻状刃器2点、石刃5点、剥片114点、碎片43点、石核9点、合計177点の石器が出土した。石材の内訳は黒曜石153点、水晶23点、



第5図 矢出川第Ⅶ遺跡の調査区と過去の掘削トレンチ

C・D・F～Iはシンポジウム報告より推定（辻本・桑野 1981）、試掘No.11～13は2012年調査時に確認したトレンチ跡の位置

頁岩1点である。

縄文時代の遺構は出土しなかったが、石鏃1点が検出されている。その他、黒曜石と水晶の剥片各1点が調査区南端付近の黒色土から出土した。

中世は陥し穴1基を検出したが、遺物はなかった。

2. 基本層序 (第6図、図版1-2～7)

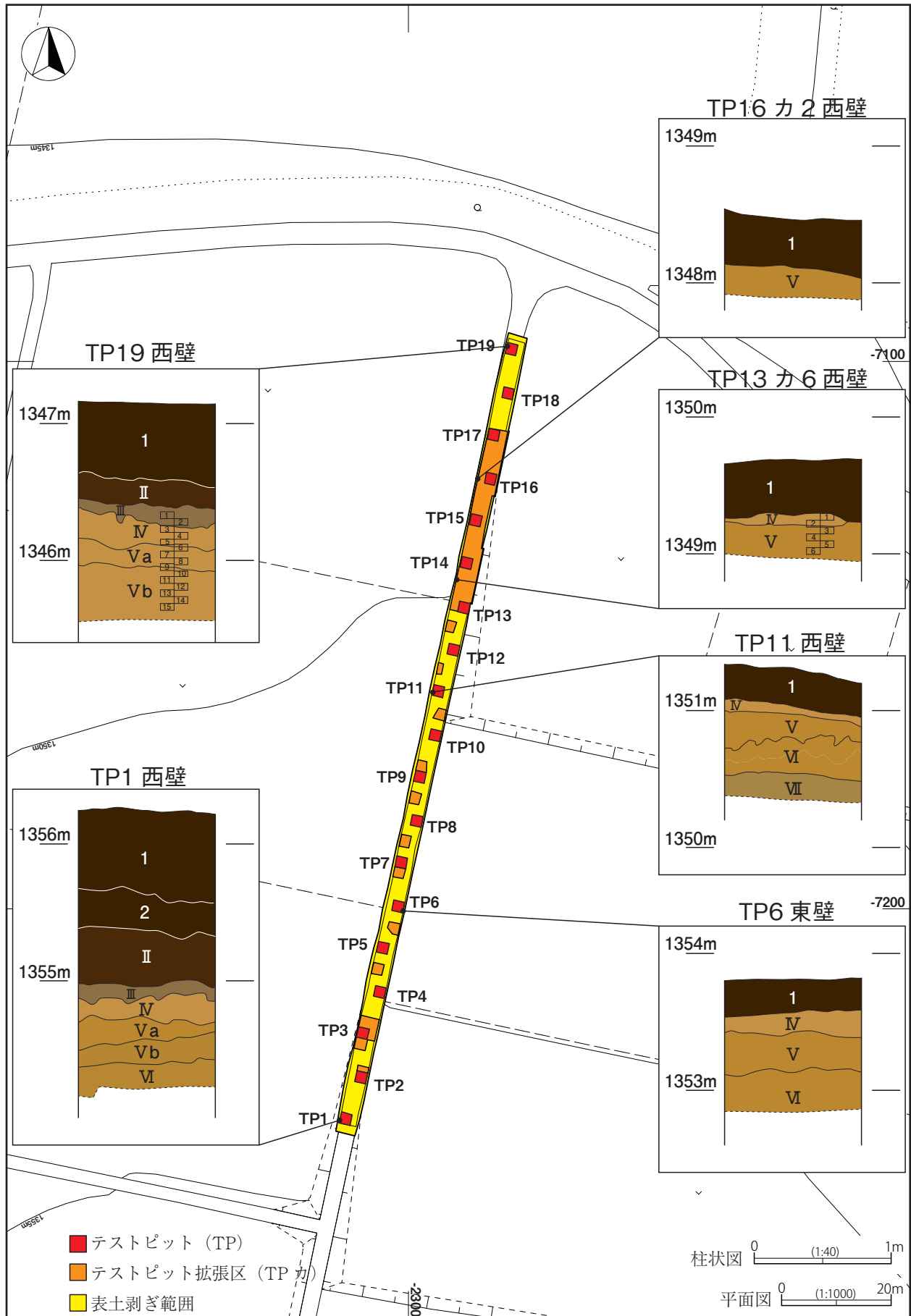
I～VII層までの基本層序を定めた。I層は黒褐色の耕作土を想定したが、道路路盤整備等によりすべて削平を受けており、調査区内で確認することはできなかった。II層は黒褐色の腐植土で自然堆積層。縄文時代の遺物が含まれる。III層はローム層への漸移層で矢出川遺跡群内で細石刃石器群が検出される層となる。IV層は黄褐色のソフトローム層。調査区内の大部分を占める旧農道の路盤整備のために大部分が削平されており、路肩のわずかな部分に残っていたのみである。火山灰分析によりIV層中にAT降灰層準がある可能性が指摘されたが、明らかなピークが確認できず、断定には至らなかった。V層は黄褐色のハードローム層。路盤整備の削平はV層上部まで及んでおり、上面は大部分が失われている。今回検出された石器群はV層上部からの出土数が最も多く、水晶製石核など大型石器もV層上部から検出されることから、生活面も同層にあると考えられる。小礫やスコリアの入り方でa・bに区分した場所が部分的に存在するが、その差は漸移的で明瞭ではない。VI層は黄褐色のハードローム層。V層との色調差はほとんどなく、境界は漸移的で不明瞭だが、V層より更に固く締まる。VII層は黄褐色のハードローム層で、VI層よりやや黄色味が強い。

註

- 1) 国土交通省気象庁ホームページホーム > 各種データ・資料 > 過去の気象データ検索 > 平年値 (年・月ごとの値)・各種データ資料より、1981年～2010年のデータ、野辺山及び東京を抜粋。
- 2) 各遺跡群には複数の遺跡、複数の時期が存在する。詳細は参考文献、堤隆・八ヶ岳旧石器研究グループ2015を参照。
- 3) 『矢出川 水晶考古学』に掲載された「平沢パイロット」採集資料とかなりの部分重複しているものと思われる。
- 4) 平成24年10月31日付で南牧村教育委員会が長野県教育委員会教育長あてに報告した矢出川遺跡群の発掘調査終了報告書(24南牧教第32号)より。

参考文献

- 麻生優 1955 「信濃中ッ原の無土器文化」『石器時代』第2号 石器時代研究会
 菊池清人 1986 「室町時代・安土桃山時代」『南牧村誌』南牧村誌刊行会
 京都女子大学考古学研究会 1978 「信濃野辺山原の分布調査」『長野県考古学会誌』31 長野県考古学会
 京都女子大学考古学研究会 1979 「信濃野辺山原の分布調査Ⅱ」
 佐藤達夫 1970 「長野県南佐久郡野辺山B5地点の石器 - ナイフ形石器編年研究に関する覚書 -」『信濃』第22巻第4号 信濃史学会
 諏訪間順 1988 「相模野台地における石器群の変遷について」『神奈川考古』24
 芹沢長介 1955 「長野県馬場平遺跡略報」『石器時代』第1号 石器時代研究会
 芹沢長介 1963 「氷河とともに消えた古い時代」『太陽』9月号 No.3 平凡社
 芹沢長介・柳沢和明 1982 「馬場平遺跡」『長野県史 考古資料編第1巻2 長野県史刊行会
 芹沢長介・柳沢和明 1982 「柏垂遺跡」『長野県史 考古資料編第1巻2 長野県史刊行会
 土屋忠芳 1983a 「はじめに」『矢出川 水晶考古学』中村龍雄
 土屋忠芳 1983b 「歴史時代 野辺山原出土の鉄矢じり」『矢出川 水晶考古学』中村龍雄
 辻本崇夫・桑野一幸 1981 「矢出川第Ⅵ・Ⅷ遺跡の試掘調査」『報告・野辺山シンポジウム1979』明治大学考古学研究室
 堤隆 1993 『遠き狩人たちの八ヶ岳』
 堤隆編 1991 『中ッ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ
 堤隆編 1993 『細石刃文化研究の新たなる展開』八ヶ岳旧石器研究グループ



第6図 テストピットの配置と層序

- 堤隆編 1995 『中ッ原第1遺跡G地点の研究』Ⅰ 八ヶ岳旧石器研究グループ
 堤隆編 1996 『中ッ原第1遺跡G地点の研究』Ⅱ 八ヶ岳旧石器研究グループ
 堤隆編 2000 『野辺山シンポジウム2000 人類の適応行動と認知構造』 八ヶ岳旧石器研究グループ
 堤隆編 2003 『日本の細石刃文化』 八ヶ岳旧石器研究グループ
 堤隆編 2012 『戸沢充則先生追悼シンポジウム 細石刃石器群研究へのアプローチ』 八ヶ岳旧石器研究グループ
 堤隆編 2013 『シンポジウム日本列島における細石刃石器群の起源』 八ヶ岳旧石器研究グループ
 堤隆編 2015 『矢出川 日本列島で最初に発見された細石刃石器群の研究』 八ヶ岳旧石器研究グループ 信毎書籍出版センター
- 戸沢充則 1964 『矢出川遺跡』『考古学集刊』第2巻第3号 東京考古学会
 中村龍雄 1983 『矢出川 水晶考古学』
 長野県埋蔵文化財センター 2004 『県営畑地帯総合整備事業野辺山地区埋蔵文化財発掘調査報告書 長野県南牧村 矢出川遺跡群』
 長野県埋蔵文化財センター 2005 『県営畑地帯総合整備事業野辺山地区埋蔵文化財発掘調査報告書2 長野県南牧村その2 矢出川遺跡群』
- 三沢遺跡発掘調査団編 1987 『三沢遺跡』 長野県南佐久郡川上村教育委員会
 南牧村教育委員会 1993 『南牧村遺跡詳細分布調査報告書 - 縄文時代～中世 -』
 南牧村教育委員会 2004 『南牧村 旧石器時代遺跡地図 - 野辺山原編 -』
 向坂鋼二 1951 『長野県中ノ沢出土の土器と土製耳飾り』『第四紀研究』第2巻第1号
 明治大学考古学研究室 1980 『報告・野辺山シンポジウム1979』
 明治大学考古学研究室 1981 『報告・野辺山シンポジウム1980』
 明治大学考古学研究室 1982 『報告・野辺山シンポジウム1981』
 矢島國雄 1981 『矢出川遺跡群の分布調査』『報告・野辺山シンポジウム1980』 明治大学考古学研究室
 山梨県教育委員会 1985 『丘の公園14番ホール遺跡範囲確認調査報告書』
 山梨県教育委員会 1989 『丘の公園第2遺跡発掘調査報告書』



平面直角座標系 第八系原点 (2013/9/25)



国史跡 矢出川遺跡看板 (2013/9/30)



B L 1・2 清掃風景 (2013/11/20)



S K 1 清掃風景 (2013/11/28)

第3章 旧石器時代の遺構と遺物

第1節 概要

(1) ブロックの設定

出土した旧石器時代の遺物 177 点はすべて石器である。遺構及び遺物の分布を第7図に示す。調査区の北半に偏って分布するが、密度の高い北半南側と密度の低い北半部北側に細分できる。北半部南側の最も密度が高い南側を第1号ブロック (BL1)、やや密度が高い北東側を第2号ブロック (BL2) とした。また、北半部北側の分布を第3号ブロック (BL3) とした。BL1～3は近接し、遺物出土層位の共通性が高いことから、同時期に残されたものと考えられる。

(2) ブロック外の遺物

調査区中央付近に1点、調査区南部に3点存在する。これらについては、BL1～3に関連する可能性と、Ⅲ～Ⅳ層に生活面を持つ石器群に属す可能性が考えられる。Ⅲ～Ⅳ層は過去の踏査等で多数の槍先形尖頭器、ナイフ形石器が出土している層準で、調査区内の大部分で削平されていた地層である。

(3) 遺物の出土層位

出土層位別の遺物数を第6表に示す。

最も多くの遺物を検出したのはⅤ層の上部で、177点中107点あった。Ⅳ層から9点の石器が出土したが、Ⅳ層が削平されずにすべて残っていれば、もっと数が多く出土したと考えられる。この9点は農道路面部より削平が浅かった路肩部から出土した。

旧石器時代のブロックは、一般的に上下のレベル差を持って出土する。石器が置き去られた時には同一平面にあったはずが、石器群は氷期の寒冷な気候の中で凍結、融解を繰り返しながら埋没し、結果としてレベル差を持ったものと考えられている。最も遺物密度が高いレベルから、そのやや下位の礫群の礫などの重量のある大型遺物が集中するレベルにかけて、本来、石器群が残された生活面があると考えられてい

第6表 出土層位別遺物数

遺構	Ⅳ層上部	Ⅳ層中部	Ⅳ層下部	Ⅴ層上面	Ⅴ層上部	Ⅴ層中部	かく乱	合計
BL1	1	1	4	4	67	25	12	114
BL2			3		16	8	4	31
BL3					21	4	3	28
BL外					3		1	4
合計	1	1	7	4	107	37	20	177

第7表 器種組成

遺構	ナイフ形石器	貝殻状刃器	石刃	石核	剥片	碎片	合計
BL1	3		4	4	73	30	114
BL2	1	1	1	1	22	5	31
BL3		1		4	16	7	28
BL外					3	1	4
合計	4	2	5	9	114	43	177

第8表 石材組成

遺構	黒曜石	水晶	頁岩	合計
BL1	114			114
BL2	30		1	31
BL3	5	23		28
BL外	4			4
合計	153	23	1	177



第7図 旧石器時代の遺構・遺物分布

る（矢島・鈴木 1976）。一般的に上下のレベル差は生活面の上より下の方が小さい。IV層はほとんど失われていたが、V層上部に遺物が多く、石核等の大型遺物が分布すること、また、V層中部の遺物数が一定量あることから、BL1～3の生活面はV層上部にあったと考えられる。

(4) 器種組成

器種組成を第7表に示す。

ナイフ形石器4点、貝殻状刃器2点、石刃5点、石核9点、剥片114点、碎片43点であった。搔器や彫器、削器といった加工具はなかった。器種別の遺物分布を第8図に示す。

(5) 石材組成

石材組成を第8表に、石材・黒曜石の産地別の遺物分布を第9図に示す。

黒曜石153点、水晶23点、頁岩1点となり、黒曜石が主体を占める。

分析可能な法量を持つ黒曜石80点について、蛍光エックス線分析装置を用いた産地推定を実施した（註1）。黒曜石産地組成を第9表に示す。冷山（茅野市）や

第9表 黒曜石産地組成

第9表 黒曜石産地組成
 表 遺構 蓼科冷山群 諏訪星ヶ台群 和田鷹山群 天城柏峠群 合計
 BL1 45 12 1 58
 BL2 10 1 4 16
 BL3 5 5
 BL外 1 1
 合計 61 13 5 1 80

茅草峠（茅野市・佐久穂町）で採取される黒曜石と成分が共通する蓼科冷山群が61点と最も多く、星ヶ塔・星ヶ台（下諏訪町）と共通する諏訪星ヶ台群が13点、和田峠・星糞峠（長和町）と共通する和田鷹山群が5点、柏峠（静岡県伊豆市・伊東市）と共通する天城柏峠群が1点であった。

遺構	蓼科冷山群	諏訪星ヶ台群	和田鷹山群	天城柏峠群	合計
BL1	45	12	1		58
BL2	10	1	4	1	16
BL3	5				5
BL外	1				1
合計	61	13	5	1	80

第2節 遺構と遺物

1. 遺 構

(1) ブロック

BL1（図版3・図版5-1）

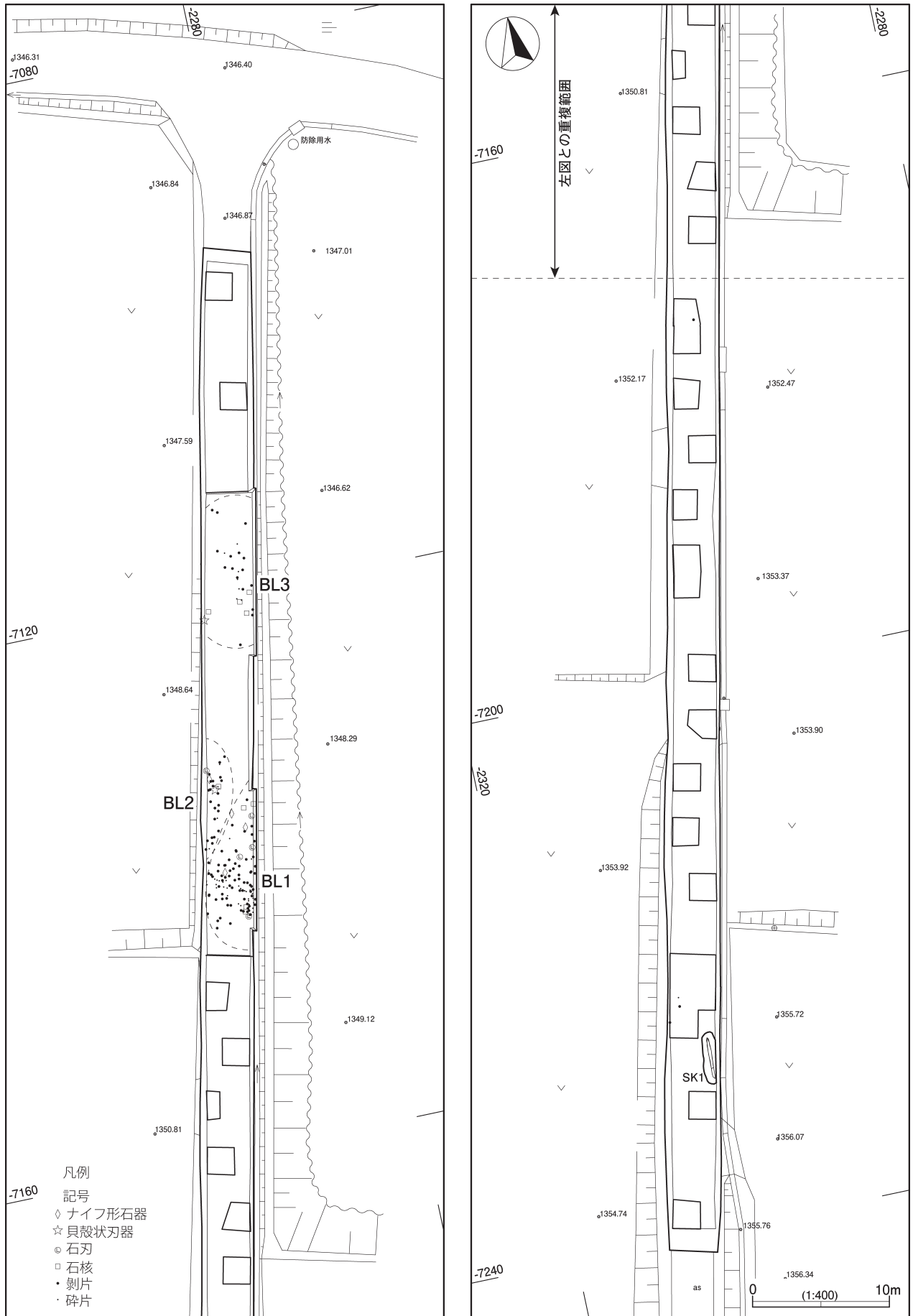
X=-7140,Y=-2288 座標付近を中心として南北約12m、東西3m以上の広がりを持つ。標高は1349.2m前後に分布する。ブロックの南北西側は、ブロック中央から外側にかけて漸移的に遺物密度が低くなるため、ブロックの範囲はほぼ調査区内に収まっていると考えられる。しかし、ブロックの東側は調査区際まで遺物密度が高いため、ブロックの範囲は調査区外に大きく広がると予想される。北西にBL2が位置し、その境界に遺物空白域はない。

IV層から出土した石器が9点あったが、いずれも路肩の削平が浅かった部分で、域内の大部分ではIV層が削平されていた。V層上部から半数以上の石器が出土し、高密度に分布する部分も認められる。V層中部になると遺物数は減り、密度が低くなるため、生活面はV層上部にあったと考えられる。

ナイフ形石器3点、石刃4点、石核4点、剥片73点、碎片30点、合計114点の石器が出土した。ブロック南部と西部の2か所に剥片・碎片が集中する範囲が認められる。この部分についてより細かい碎片的の有無を調べるため、土壌を採取し水洗選別を実施した。土壌採取は調査区軸に並行して設定したおよそ2m×2mのグリッドのTP13カ3、TP13カ5、TP13カ6の3か所について実施した。それぞれのグリッドの位置を図版4-2に、採土量及び検出碎片数量を第10表に示した。碎片はすべて黒曜石で、通常掘削の

第10表 水洗選別土壌量と検出碎片数量

グリッド	袋数	点数	重量 g
TP13カ3	27	76	3.63
TP13カ5	26	81	3.21
TP13カ6	25	152	6.57



第8図 旧石器時代の器種別遺物分布



第9図 旧石器時代の石材・黒曜石産地別分布

出土数を大きく上回る。これら多数の碎片が集中する地点は、石器製作が行われた地点、あるいは集められた石器製作の残渣が廃棄された地点を示すと考えられる。いずれにしろ、この地点周辺で石器製作が行われていたことを示す結果といえよう。一方、ブロック北側は密度は低いものの、ナイフ形石器や石刃、石核など製品の比率が高く碎片がない。製品や製品の素材が集められた空間となろうか。

石材はすべて黒曜石で、蓼科冷山群 45 点、諏訪星ヶ台群が 12 点、和田鷹山群が 1 点の産地が推定されている。蓼科冷山群の分布は碎片集中部分と重なる。一方、諏訪星ヶ台群の分布は碎片集中部分とは無関係でブロック全体に散在している。この状況から、碎片の多くは蓼科冷山群と予想され、遺跡内で蓼科冷山群の黒曜石による石器製作が行われていたことが推測できる。

No.1 の石核は 2012 年度の試掘調査の No.13 トレンチで出土した石器だが、本調査に備えて土嚢で保護され埋め戻されていた。図版 5-2 は No.13 トレンチ埋土底の土嚢をはずして石器が姿を現した状況である。

No.4 の石刃は打面を上にして立った状態で出土している。図版 5-3 は V 層上部に刺さった状態の石器が、ローム層と黒褐色土がブロック状に混在し、踏み締められたかく乱層最下底から V 層上部へ刺さるように立って出土した状態である。黒褐色土とローム層ブロックのかく乱層は農道建設時の削平後に整地のための踏み締めを行った痕跡と考えられる。

No.81 のナイフ形石器は V 層中部から出土した。図版 5-4 は石器を外した直後に、石器とインプリント(imprint: 跡) (註 2) を撮影したものである。石器腹面のインプリントが確認できる。

No.25 の石核は V 層上部から出土した (図版 5-5)。No.81 同様にインプリントを確認した (図版 5-6)。

BL 2 (図版 3・図版 5-1)

X=-7133,Y=-2290 座標付近を中心として南北約 8m 以上、東西 2m 以上の広がりを持つ。標高は 1348.7m 前後に分布する。ブロックの東側は漸移的に密度が低くなるため、ブロック範囲は調査区内に収まっているようだが、西側は調査区際まで密度が高いため、調査区外に広がると予想される。南東に BL1 が位置し、その境界に遺物空白域はない。

IV 層から出土した石器が 3 点あったが、いずれも路肩の削平が浅かった部分で、域内の大部分では IV 層が削平されていた。V 層上部から半数強の石器が出土し、V 層中部になると遺物数は減るが、一定数が保たれる。生活面は BL1 同様に V 層上部にあったと考えられる。

ナイフ形石器 1 点、貝殻状刃器 1 点、石刃 1 点、石核 1 点、剥片 22 点、碎片 5 点、合計 31 点の石器が出土した。全体的に散漫なあり方で、ブロックの中央付近にナイフ形石器や貝殻状刃器等の製品が分布する BL1 北側と似た様相を示す。碎片が少なく集中する地点がない。

石材は頁岩が 1 点、他はすべて黒曜石で、蓼科冷山群 10 点、諏訪星ヶ台群が 1 点、和田鷹山群が 4 点、天城柏峠が 1 点の産地が推定されている。和田鷹山群の存在が、本ブロックの特徴の 1 つといえよう。No.135 のナイフ形石器はブロックの中央付近の V 層上部で出土した (図版 5-7)。明瞭なインプリントが確認できた (図版 5-8)。

BL 3 (図版 6-1・図版 7-1)

X=-7119,Y=-2285 座標付近を中心として南北 10m、東西 4m 以上の広がりを持つ。標高は 1347.8m 前後に分布する。ブロックの南北縁辺は調査区内に収まっているようだが、東西は両側とも調査区外に分布域が広がると予想される。BL2 の北約 8m に位置し、両ブロックの間には明確な遺物空白域が確認できる。

IV 層から出土した石器はなく、V 層上部から半数以上の石器が出土している。削平は BL1・2 よりも深くまで及んでいるようで、IV 層はほとんど削られ、V 層上部についても削平が及んでいる部分が多い。そのため、V 層上部として遺物を取り上げているが、これらの一部が本来は V 層中部に属す可能性も考える必要がある。そのため、生活面は V 層上部～中部のどこかにあると考えられる。

貝殻状刃器1点、石核4点、剥片16点、碎片7点、合計28点の石器が出土した。全体的な分布は散漫で、ブロックの南側に石核や貝殻状刃器が分布している。碎片は少なく剥片剥離の痕跡はなかった。

石材は水晶が23点と多く、黒曜石主体のBL1・2と異なる。5点の黒曜石の産地はすべて蓼科冷山群と推定されている。

No.90・No.91・No.130の水晶製石核はブロックの中央南のV層上部から出土し、明瞭なインプリントが確認できた(図版7-2～8)。いずれも50g以上の重量を持つ大型品で、出土レベルが揃っているため生活面が近いと考えられる。

2. 遺物

(1) ナイフ形石器(図版8-135・103・81・14)

素材の鋭い縁辺とブランティング(blunting:刃潰し加工)による背部を持つ石器をナイフ形石器とした。

135は諏訪星ヶ台群の不純物がほとんどない良質な黒曜石を石材としており、BL2のV層上部から出土した。素材は平滑な礫面を打面とした縦長剥片で、主要剥離面と同一方向の剥離が背面に1面みられる。左側縁は急角度のブランティングにより折断されている。ブランティングは腹面側からが基本となるが、基部近くのやや厚い部分では、背面側からの剥離もわずかに認められる。「対向調整」の意識がありそうだ。右側縁基部にみられる腹面からの剥離は角度が浅く、ブランティングとは明らかに異なる。使用もしくは着柄による微細剥離であろうか。また、腹面基部付近は左側縁のブランティングを打面とする平坦な剥離により、素材のバルブ(blub:打瘤)の一部が除去されている。平面形は縦長で左右非対象、左側縁に背が、右側縁に刃部がある。欠損はほとんどなく、尖端の尖りは鈍い。

103は諏訪星ヶ台群の不純物がほとんどない良質な黒曜石を石材としている。素材打面は2次加工により除去されている。背面に主要剥離面と同一方向及び横方向の剥離がそれぞれ1面ずつ確認できる。素材打面を基部に置き、左右側縁に腹面からのブランティングを施した後に、ブランティング面を打面とする平坦な剥離を施して、素材の打面及びバルブを除去している。尖端側は大きく欠損しており、刃部は残っていない。

81は蓼科冷山群の黒曜石を石材としている。蓼科冷山群としては不純物が少なく質が良い黒曜石である。単剥離のポジティブな面を打面とした石刃を素材としており、打点には直径1mm程度の打痕が残っている。素材背面に滑らかな礫面と、主要剥離面と反対方向の剥離がみられる。また、バルブ付近の不自然なバルブスカーのあり方は、素材剥離時の同時割れを示す痕跡と考えられる。左側縁の刃部には背腹両面からの微細剥離痕がみられる。右側縁にはブランティングと趣の異なるやや鋭角で浅い剥離が腹面側から施されている。この剥離による素材の形状変形は小さく、この部分を刃部として捉え、スクレイパーとしての理解も可能だ。尖端は鈍く尖り、基部には素材打面が残されている。平面形はやや崩れた左右対称の木葉形を呈している。

14は和田鷹山群の不純物がほとんどない良質な黒曜石を石材としている。単剥離打面から剥離された石刃を素材とし、背面には礫面と主要剥離面と同一方向の剥離面がみられる。打面を基部に置き尖端側をブランティングによって折断するいわゆる「先断形」のナイフ形石器として理解できる。基部端には背面側からの槌状の剥離により、素材打点が除去されているものの、変形は少なく、バルブの大部分は残っている。欠損はなく、短冊形の平面形を持つ。

(2) 貝殻状刃器(図版9-151・129)

貝殻状剥片を素材とし、鋭く残された縁辺と加工された端部、もしくは折れ面による背部を有する石器を貝殻状刃器とした。

151は蓼科冷山群の黒曜石を石材としている。キャラメルやコーヒーキャンディーのような褐色で透明度の低い特徴的な黒曜石で、今回出土した石器に同一個体はない。複剥離面を打面とするやや大ぶりの貝殻状剥片を素材とする。素材剥離時の打点は、節理面の影響ではっきりしないが、それ以外の打痕が2か所がみられ、1か所は背面で剥離しており、もう1か所は剥離していない。素材の鋭い縁辺を刃部として上に置いた場合、素材末端側となる左側縁の端部に、腹面側からの剥離を数回、わずかに抉るように施している。素材打面も大きく残っており、背部として機能していたと考えられる。

129は天城柏峠群の黒曜石を石材としている。不純物が多く、透明度が低い漆黒部と灰色部が縞状となる特徴を持つ。長野県内で天城柏峠群が推定されたのは旧石器時代遺跡としては初めてで（谷他2013）、縄文時代遺跡でも茅野市の駒形遺跡の前期初頭から前葉とされる遺物1点のみである（長野県埋蔵文化財センター2007）。素材の鋭い縁辺を刃部として上に置くと、素材の末端となる左側縁はヒンジフラクチャー（hinge fracture：蝶番剥離）で鈍角な側縁となり、右側縁の折れ面と合わせて背部と理解できる。平面形は三角形を呈する。明瞭な加工はないが、県外産黒曜石が単独で持ち込まれる意味を考慮すると、製品として捉えるべきと判断した。

（3）石刃（図版9-138・7・4・117、図版10-154）

連続的に剥離された左右の側縁が平行する縦長剥片を石刃とした。打面調整や頭部調整が施される一般的な石刃石核と比較すると、目的的な石刃の形態の斉一性は低く、連続して剥離される数も少ない。しかし、連続して縦長剥片を剥ごうとする意図が読み取れるため、積極的に石刃として評価した。

138は蓼科冷山群の黒曜石を石材としている。石核調整、頭部調整はなく、単剥離打面から剥離されている。打面には大きな打痕が残されている。背面は主要剥離面と同一方向の剥離が2面みられる。末端は折れて欠損している。

7は蓼科冷山群の黒曜石を石材としている。滑らかな礫面を打面としており、打面には直径3mm近い大きな打痕が残されている。背面には主要剥離面と同一方向の剥離が複数みられる。

4は諏訪星ヶ台群の黒曜石を石材としている。礫面と1つの剥離面による平滑な打面から剥離されており、大きな打痕を残している。背面には主要剥離面と同一方向の剥離が2面、その他に礫面と末端付近には横方向からの剥離も確認できる。

117は蓼科冷山群の黒曜石を石材としている。単剥離打面から剥離され、発達したバルブと大きな打痕が残されている。背面には主要剥離面と同一方向の剥離が4面確認できる。末端部は欠損している。

154は蓼科冷山群の黒曜石を石材としている。やや透明度が低い、暗茶褐色で不純物が少なく、蓼科冷山群としては石質が良い。単剥離打面から剥離されているが、1回で割れなかったようで2つの打点・バルブが残されている。両方とも打痕の直径が大きく、バルブも発達している。背面には主要剥離面と同一方向の剥離面が4面残されている。

（4）石核（図版10-25、図版11-1・94・65・161、図版12-90、図版13-91、図版14-130、図版15-148）

25は蓼科冷山群の黒曜石を石材としている。最終的な剥離は左側面の大きな単剥離面から行われており、何枚かの縦長剥片が剥離されているが、有効な法量を持つ剥片は得られなかったようだ。上面図の下縁近くには剥離に至らなかった大きな打痕が残されている。

1は蓼科冷山群の黒曜石を石材としている。上面を打面として正面中央の大きな剥離を最終剥離としている。正面下端付近を打面とし、裏面側を剥離しようとした打痕がみられるが、剥離には至っていない。裏面下端付近を打面として、正面横方向からの剥離もみられる。

94は和田鷹山群の黒曜石を石材としている。不純物のない良質な黒曜石である。上面の複剥離打面から、正面を作業面として2点の石刃を剥離した痕跡が残されている。このような器形調整がほとんどなく、剥

離する石刃も数点程度となる石核が本石器群の特徴となる。裏面は大部分が礫面となっている。

65は蓼科冷山群の黒曜石を石材としている。上面の平滑な礫面を打面とし、正面を作業面として剥離を行っているが、あまり有効な剥片は得られていない。裏面は大部分が礫面となっている。

161は蓼科冷山群の黒曜石を石材としている。上面の平坦な礫面を打面、裏面を作業面として、2点以上の石刃を剥離している。石核調整はみられない。

90は水晶の石核である。下半部は水晶の結晶形の六角柱六角錐形がよく残っている。上端部に剥離を加え、打面として剥離を行おうとしているようだが、砕けやすい性質のためか有効な剥片は得られていないようだ。六角柱の稜角を利用して石刃の剥離を試みたのであろうか。

91は水晶の石核である。90同様に下半部は水晶の結晶形を残しているが、90と比較して不純物が多いためか、整った角柱状を呈さない。上端に剥離を加えて、打面としているが有効な剥片は得られていない。

130は水晶の石核である。六角柱の結晶下端部の六角錐状部分が残っている。不純物が少なく透明度が高い。しかし、節理等の影響で剥片が破碎した痕跡もみられ、有効な剥片が得られたかどうかは定かではない。

148は水晶の石核である。下半部は水晶の結晶形が残っているが、90ほど整ってはいない。上端の剥離を打面として剥離を行っているが、剥離方向が乱れていて、得られた剥片の形状はコントロールしきれていない。4点の水晶製石核の中で最も重い。

(5) 剥片 (図版 16-3・159・28・152・66・5、図版 17-174・173・140・176)

3、159、28、152は蓼科冷山群の黒曜石を石材とした縦長剥片である。連続性が低いことから石刃ではなく剥片と分類したが、目的意識は石刃と共通するものと思われる。

66、5は諏訪星ヶ台群の黒曜石を石材としている。いずれも2次加工がないため剥片としたものだが、石質が良いため、利用価値があるものとして持ち込まれたものと思われる。

174、173、140は水晶の剥片である。法量が維持されたまま剥離されたものだが、製品として加工するには不十分であったか。これ以外の水晶の剥片・碎片は細かく砕けてしまったものが目立つ。

176は頁岩の剥片である。今回発見された石器群では唯一の石材となる。2次加工は見られないが、法量があり、石器として加工する価値のあるものとして持ち込まれたのであろうか。

(6) その他の石器

その他の石器の法量等について第12表に示す。

3. 接合資料と個体別資料

石器について石材の個体分類を行い、一覧表を作成した(第11表)。なお、今回個体分類を行った黒曜石と水晶は、個体ごとの特徴の共通性が高い性質を持つことから、個体数=原石数となるまでの厳密性はない。個体分類後、石器の接合を試みたが、接合するものはなかった。

註

1) 詳細は第6章第3節参照。

2) 長い年月埋没していたことによって、土中に残される石器の雌型。imprint。

参考文献

- 谷 和隆・塚原秀之・鶴田典昭・中島 透・橋詰 潤・羽生俊郎・前田一也・村田弘之・山科 哲 2013 「中部地方の黒曜石原産地分析試料」『文化の十字路信州』日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料
- 長野県埋蔵文化財センター 2007 『駒形遺跡 県道諏訪茅野線建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書 茅野市内』 長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 82
- 矢島國雄・鈴木次郎 1976 「相模野台地における先土器時代研究の現状」『神奈川考古』第1号 神奈川考古同人会



第11表 石器個体分類表

材質	個体番号	遺物数	判別群	剥離面色調	透明度	縞・斑晶・スジ等	含有物
黒曜石	1	1	天城柏峠	黒色	不透明	灰色のスジが見られる	小さな球顆が入る
	2	1	和田鷹山	灰色	透明	なし	なし
	3	1	和田鷹山	灰色	不透明	白いスジが霧状に見られる	なし
	4	3	和田鷹山	灰色	透明	白いスジが見られる	なし
	5	5	諏訪星ヶ台	灰色	透明	黒いスジが見られる	なし
	6	5	諏訪星ヶ台	灰色	透明	黒いスジが霧状に見られる	なし
	7	3	諏訪星ヶ台	黒色	不透明	黒と茶のスジが霧状に見られる	なし
	8	1	蓼科冷山	黒に近い茶	不透明	黒いスジが霧状に見られる	砂状の球顆が入る
	9	1	蓼科冷山	茶色	不透明	なし	砂状の球顆が入る
	10	18	蓼科冷山	灰色	半透明	黒いスジが霧状に見られる	大きな砂状の球顆が入る
	11	2	蓼科冷山	黒色	不透明	なし	全体に白い小さな球顆が入る
	12	3	蓼科冷山	灰色	透明	白いスジが見られる	細かい砂状の球顆が入る
	13	14	蓼科冷山	黒色	不透明	黒いスジが霧状に見られる	砂状の球顆が入る
	14	23	蓼科冷山	茶混の灰色	不透明	薄茶～白のスジが全体に見られる	細かい砂状の球顆が入る
水晶	1	11		透明	透明	なし	なし
	2	3		白, 透明	半透明	不透明な白色部が見られる	なし
	3	4		透明	半透明	白いスジが霧状に見られる	なし

第12表 石器観察表（旧石器時代）

遺物番号	器種	石材	出土層位	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	遺構	判別群	個体番号
1	石核	黒曜石	V層上部	55.023	45.206	29.624	63.39	BL1	蓼科冷山	14
2	剥片	黒曜石	V層上部	40.06	32.33	9.12	12.39	BL1	蓼科冷山	14
3	剥片	黒曜石	V層上部	55.607	45.778	23.407	33	BL1	蓼科冷山	13
4	石刃	黒曜石	V層上部	43.346	31.83	11.481	11.11	BL1	諏訪星ヶ台	7
5	剥片	黒曜石	V層上面	24.111	24.923	6.423	2.83	BL1	諏訪星ヶ台	6
6	剥片	黒曜石	V層上面				0.65	BL1		
7	石刃	黒曜石	V層上面	46.221	34.218	12.899	14.02	BL1	蓼科冷山	13
8	剥片	黒曜石	V層上部				0.26	BL1		
9	碎片	黒曜石	V層上部				0.08	BL1		
10	剥片	黒曜石	V層上部	15.48	17.87	5.41	1.35	BL1	蓼科冷山	14
11	碎片	黒曜石	IV層下部				0.03	BL1		
12	剥片	黒曜石	かく乱				0.27	BL1		
13	剥片	黒曜石	V層上部				0.15	BL1		
14	ナイフ形石器	黒曜石	かく乱	42.807	18.59	9.27	5.78	BL1	和田鷹山	2
15	碎片	黒曜石	V層上部				0.01	BL1		
16	碎片	黒曜石	V層上部				0.17	BL1		
17	碎片	黒曜石	V層上部				0.06	BL1		
18	碎片	黒曜石	V層上部				0.05	BL1		
19	剥片	黒曜石	V層上面				0.32	BL1		
20	剥片	黒曜石	IV層上部	13.01	20.47	8.33	1.04	BL1	蓼科冷山	13
21	碎片	黒曜石	IV層中部				0.07	BL1		
22	碎片	黒曜石	V層上部				0.03	BL1		
23	剥片	黒曜石	かく乱	55.39	45.23	8.17	20.77	BL2	蓼科冷山	14
24	剥片	黒曜石	V層上部				0.1	BL1		
25	石核	黒曜石	V層上部	25.43	54.325	30.018	38.59	BL1	蓼科冷山	14
26	剥片	黒曜石	V層上部				0.14	BL1		
27	剥片	黒曜石	V層上部	14.13	11.85	2.74	0.35	BL1	諏訪星ヶ台	5
28	剥片	黒曜石	V層上部	51.12	24.409	10.458	10.32	BL1	蓼科冷山	14
29	剥片	黒曜石	V層上部				0.19	BL1		
30	碎片	黒曜石	V層上部				0.05	BL1		
31	剥片	黒曜石	V層上部				0.5	BL1		
32	碎片	黒曜石	V層上部				0.08	BL1		
33	剥片	黒曜石	V層上部				0.29	BL1		
34	剥片	黒曜石	V層上部	15.56	9.78	2.26	0.33	BL1	諏訪星ヶ台	5
35	剥片	黒曜石	V層上部	13.88	15.54	4.03	0.87	BL1	蓼科冷山	13
36	剥片	黒曜石	V層上部	23.72	18.8	9.74	4.54	BL1	蓼科冷山	14
37	碎片	黒曜石	V層上部				0.05	BL1		
38	剥片	黒曜石	V層上部	27.14	12.2	8.17	1.44	BL1	蓼科冷山	10
39	碎片	黒曜石	V層上部				0.14	BL1		
40	剥片	黒曜石	V層上部	23.24	30.66	5.48	2.61	BL1	蓼科冷山	14
41	剥片	黒曜石	V層上部				0.17	BL1		
42	剥片	黒曜石	V層上部				0.41	BL1		
43	碎片	黒曜石	V層上部				0.04	BL2		
44	剥片	黒曜石	V層上部				0.18	BL1		
45	剥片	黒曜石	V層上部				0.96	BL1		
46	碎片	黒曜石	V層上部				0.1	BL1		
47	剥片	黒曜石	V層上部	22.33	9.89	8.83	1.3	BL1	蓼科冷山	14
48	剥片	黒曜石	かく乱	31.49	21.63	7.47	2.71	BL2	蓼科冷山	13
49	剥片	黒曜石	V層上部	24.72	17.79	4.41	1.27	BL1	蓼科冷山	13
50	剥片	黒曜石	V層上部				0.75	BL1		
51	剥片	黒曜石	V層上部				0.54	BL2		
52	剥片	黒曜石	V層上部				1.21	BL1		
53	剥片	黒曜石	V層上部	53.88	24.27	14.8	12.78	BL1	蓼科冷山	10
54	剥片	黒曜石	V層中部				0.29	BL1		
55	剥片	黒曜石	V層中部				0.18	BL1		
56	剥片	黒曜石	V層中部	10.89	18.51	3.72	0.41	BL1	諏訪星ヶ台	5
57	剥片	黒曜石	IV層下部				0.26	BL1		
58	碎片	黒曜石	V層中部				0.02	BL1		
59	碎片	黒曜石	V層中部				0.06	BL1		

遺物番号	器種	石材	出土層位	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	遺構	判別群	個体番号
60	剥片	黒曜石	V層上部	46	36.11	13.55	11.93	BL1	蓼科冷山	10
61	剥片	黒曜石	V層上部	18.49	29.51	6.13	2.31	BL1	蓼科冷山	10
62	剥片	黒曜石	V層中部				0.41	BL1		
63	碎片	黒曜石	V層中部				0.04	BL1		
64	剥片	黒曜石	V層上部	22.05	11.74	2.94	0.58	BL2	蓼科冷山	13
65	石核	黒曜石	V層中部	34.501	27.169	16.16	13.69	BL1	蓼科冷山	14
66	剥片	黒曜石	V層中部	25.646	33.852	7.324	4.65	BL1	諏訪星ヶ台	7
67	碎片	黒曜石	V層中部				0.05	BL1		
68	剥片	黒曜石	V層中部				0.2	BL1		
69	剥片	黒曜石	V層中部	18.19	6.38	2.06	0.21	BL1	諏訪星ヶ台	5
70	剥片	黒曜石	V層中部	24.4	8.07	5.01	0.61	BL1	蓼科冷山	14
71	剥片	黒曜石	V層中部	10.47	17.02	6.06	1.13	BL2	蓼科冷山	14
72	碎片	黒曜石	V層中部				0.09	BL1		
73	碎片	黒曜石	V層中部				0.15	BL1		
74	剥片	黒曜石	V層中部				0.14	BL2		
75	剥片	黒曜石	V層上部	14.67	15.58	5.33	0.84	BL2	蓼科冷山	12
76	剥片	黒曜石	V層上部	20.31	12.12	5.45	1.29	BL1	蓼科冷山	10
77	剥片	黒曜石	V層中部				0.13	BL2		
78	剥片	黒曜石	V層中部	17.41	11.68	2	0.31	BL2	蓼科冷山	12
79	剥片	黒曜石	V層中部	11.93	27.95	1.69	0.44	BL1	蓼科冷山	14
80	剥片	黒曜石	V層上部	12.5	14.84	2	0.26	BL1	蓼科冷山	12
81	ナイフ形石器	黒曜石	V層中部	71.633	38.599	19.862	38.41	BL1	蓼科冷山	13
82	剥片	黒曜石	V層中部				0.11	BL1		
83	剥片	黒曜石	V層上部	14.44	15.26	3.23	0.49	BL1	蓼科冷山	10
86	剥片	黒曜石	V層中部	41.81	18.94	9.43	5.51	BL1	諏訪星ヶ台	6
87	碎片	黒曜石	かく乱				0.07	BL2		
88	剥片	黒曜石	かく乱	32.46	19.32	5.32	1.88	BL2	蓼科冷山	13
89	剥片	黒曜石	V層上部	35.64	37.75	22.46	23.61	BL2	蓼科冷山	14
90	石核	水晶	V層上部	55.44	36.578	24.668	66.29	BL3		3
91	石核	水晶	V層上部	67.957	35.567	28.069	81.54	BL3		2
92	剥片	黒曜石	V層上部	26.5	13.76	5.13	1	BL3	蓼科冷山	11
93	剥片	水晶	V層中部	16.52	21.07		0.95	BL3		
94	石核	黒曜石	V層上部	49.836	44.491	16.935	34.37	BL2	和田鷹山	3
95	剥片	黒曜石	V層上部				0.22	BL2		
96	碎片	黒曜石	V層上部				0.05	BL2		
97	剥片	黒曜石	V層上部	39.73	25.1	8.92	5.14	BL3	蓼科冷山	13
98	剥片	黒曜石	V層上部	21.08	14.09	5.15	0.85	BL1	蓼科冷山	10
99	剥片	黒曜石	V層上部	31.25	35.87	12.29	10.65	BL1	蓼科冷山	14
100	碎片	黒曜石	V層上部				0.02	BL1		
101	碎片	黒曜石	V層上部				0.07	BL1		
102	剥片	黒曜石	V層上部	13.16	20.26	4.77	0.62	BL1	蓼科冷山	13
103	ナイフ形石器	黒曜石	V層中部	20.807	15.41	7.144	1.64	BL1	諏訪星ヶ台	5
104	剥片	黒曜石	かく乱	17.65	13.01	4.27	0.59	BL1	蓼科冷山	10
105	剥片	黒曜石	V層上部	15.4	11.66	1.94	0.32	BL1	蓼科冷山	10
106	剥片	黒曜石	V層上部	20.97	9.7	3.6	0.56	BL1	蓼科冷山	10
107	剥片	黒曜石	V層上部	22.71	14.93	6.17	1.35	BL1	蓼科冷山	10
108	剥片	黒曜石	かく乱				0.13	BL1		
109	剥片	黒曜石	V層上部	14.89	14.67	3.35	0.47	BL1	蓼科冷山	10
110	碎片	黒曜石	V層中部				0.2	BL1		
111	剥片	黒曜石	V層上部	12.28	13.9	3.37	0.41	BL1	蓼科冷山	10
112	剥片	黒曜石	V層上部				0.22	BL1		
113	碎片	黒曜石	IV層下部				0.16	BL1		
114	剥片	黒曜石	V層上部	15.47	9.72	4.24	0.29	BL1	蓼科冷山	14
115	剥片	黒曜石	IV層下部	16.87	12.26	2.42	0.55	BL1	蓼科冷山	14
116	剥片	黒曜石	IV層下部	42.44	14.72	9.98	4.17	BL2	蓼科冷山	10
117	石刃	黒曜石	かく乱	28.398	20.603	9.462	4.24	BL1	蓼科冷山	10
118	剥片	黒曜石	V層上部	24.36	16.37	5.45	1.75	BL2	和田鷹山	3
119	剥片	黒曜石	V層上部				0.32	BL2		
120	剥片	黒曜石	V層上部	18.57	12.18	4.81	1.02	BL2	和田鷹山	3
121	剥片	黒曜石	IV層下部				0.1	BL2		

第3章 旧石器時代の遺構と遺物

遺物番号	器種	石材	出土層位	長さ(mm)	幅(mm)	高さ(mm)	重さ(g)	遺構	判別群	個体番号
122	碎片	黒曜石	V層上部				0.02	BL2		
123	碎片	水晶	かく乱				0.05	BL3		
124	碎片	水晶	かく乱				0.07	BL3		
125	剥片	水晶	V層上部	11.38	4.52		0.13	BL3		
126	剥片	黒曜石	V層中部				0.13	BL2		
127	剥片	黒曜石	V層上部	10.09	11.08	5.7	0.7	BL2	和田鷹山	4
128	碎片	黒曜石	V層上部				0.04	BL2		
129	貝殻状刃器	黒曜石	V層中部	36.014	32.427	9.461	7.508	BL2	天城柏峠	1
130	石核	水晶	V層上部	32.606	49.528	44.571	65.15	BL3		1
131	碎片	水晶	V層上部				0.15	BL3		
132	剥片	黒曜石	V層中部				0.25	BL2		
133	剥片	黒曜石	V層中部				0.24	BL2		
134	碎片	水晶	V層上部				0.08	BL3		
135	ナイフ形石器	黒曜石	V層上部	32.648	13.846	6.484	2.06	BL2	諏訪星ヶ台	6
136	剥片	水晶	V層中部	23.39	9.67		0.67	BL3		
137	碎片	水晶	V層中部				0.14	BL3		
138	石刃	黒曜石	IV層下部	24.813	14.771	5.686	1.33	BL2	蓼科冷山	10
139	碎片	黒曜石	V層中部				0.06	BL1		
140	剥片	水晶	V層上部	17.574	20.316	6.391	2.47	BL3		1
141	剥片	水晶	V層上部	22.35	8.56		0.83	BL3		
142	剥片	水晶	V層上部	20.7	16.72		0.66	BL3		
143	碎片	水晶	V層上部				0.16	BL3		
144	剥片	水晶	V層上部	21.27	11.54		1.33	BL3		
145	剥片	水晶	V層上部	17.02	13.54		0.94	BL3		
146	剥片	水晶	V層中部	14.15	15.73		0.66	BL3		
147	碎片	水晶	V層上部				0.06	BL3		
148	石核	水晶	V層上部	67.642	47.653	39.746	114.48	BL3		1
149	剥片	黒曜石	V層上部	46.02	50.1	19.4	38	BL3	蓼科冷山	14
150	剥片	水晶	V層上部	23.15	19.24		4.14	BL3		
151	貝殻状刃器	黒曜石	V層上部	43.178	43.379	15.709	23.05	BL3	蓼科冷山	9
152	剥片	黒曜石	かく乱	52.664	34.484	15.037	17.71	BL1	蓼科冷山	10
153	剥片	黒曜石	V層上部	28.95	22.67	5.04	1.77	BL1	諏訪星ヶ台	7
154	石刃	黒曜石	かく乱	41.716	18.323	11.608	5.65	BL1	蓼科冷山	8
155	剥片	黒曜石	かく乱	19.64	20.09	4.27	1.06	BL1	諏訪星ヶ台	6
156	剥片	黒曜石	V層上部	20.24	14.95	3.83	1.21	BL1	諏訪星ヶ台	6
157	剥片	黒曜石	かく乱				0.1	BL1		
158	碎片	黒曜石	かく乱				0.06	BL1		
159	剥片	黒曜石	V層上部	53.69	34.036	14.289	19	BL1	蓼科冷山	13
160	剥片	黒曜石	V層上部	14.7	28.88	7.73	2.29	BL1	蓼科冷山	14
161	石核	黒曜石	V層上部	61.826	32.764	22.852	42.64	BL1	蓼科冷山	10
162	剥片	黒曜石	V層上部	11.37	17.71	2.21	0.27	BL1	蓼科冷山	14
163	碎片	黒曜石	V層中部				0.09	BL1		
164	剥片	黒曜石	V層上部	17.39	9.48	3.88	0.41	BL1	蓼科冷山	14
165	碎片	黒曜石	かく乱				0.04	BL1		
166	碎片	黒曜石	V層上部				0.03	BL1		
167	碎片	黒曜石	V層中部				0.05	BL1		
168	碎片	黒曜石	V層中部				0.07	BL1		
169	剥片	黒曜石	V層上部	16.7	10.1	3.37	0.45	BL1	蓼科冷山	14
170	剥片	黒曜石	かく乱	24.5	17.63	5.19	1.93	BL1	蓼科冷山	13
171	碎片	黒曜石	V層上部				0.12	BL外		
173	剥片	水晶	かく乱	29.443	21.254	12.774	7.99	BL3		1
174	剥片	水晶	V層上部	36.348	36.921	18.98	22.79	BL3		3
175	剥片	黒曜石	V層上部	27.62	15.15	9.64	2.94	BL3	蓼科冷山	11
176	剥片	頁岩	V層上部	67.012	55.582	18.919	55.77	BL2		
177	剥片	黒曜石	V層上部				0.23	BL外		
178	剥片	黒曜石	V層上部				0.37	BL1		
179	剥片	黒曜石	V層上部				0.18	BL外		
180	剥片	黒曜石	かく乱	25.16	14.8	4.15	1.64	BL外	蓼科冷山	14

第4章 縄文時代の遺構と遺物

第1節 概要

第2章4節で記したとおり、今回の調査区の大部分で旧石器時代に堆積したⅣ層まで削平されていた状態であり、縄文時代の堆積層が失われていたことが、明らかとなった。過去の分布調査、試掘調査では縄文時代の遺物も多く採集されていることから、縄文時代の遺構の存在も想定され、掘り込みが深い遺構であれば、今回の調査区内でも残存が期待されたところだったが、遺構は検出できなかった。

遺物についてはⅡ層から出土した剥片2点と、試掘調査時に出土した石鏃1点のみである。

第2節 遺物 (図版 18-1)

181は黒曜石製の石鏃である。産地推定は実施していないが、夾雑物が少ない良質の黒曜石で、諏訪星ヶ台群の可能性が高い。器面の大部分が面的な2次加工でほぼ覆われているが、裏面の右側脚部付近にわずかに主要剥離面と考えられる面が残されている。そこに残るリング (ring: 貝殻状裂痕)、フィッシャー (fisher: 放射状裂痕) から素材剥片の打点は正面尖端右側にあったものと推定できる。尖端は鋭く尖り、脚はやや長い。右脚部は欠損しているが、左右対称になるものと思われる。2012年度の試掘トレンチ No.11 (註1) のⅣ層から出土したとの記録が残る (註2)。

84は蓼科冷山群の黒曜石製剥片である。線状の打面から面的に剥離された幅広な剥片で、石器素材となる目的剥片ではなく、製品や石核整形のための調整剥片の可能性が高い。

85は水晶製の剥片である。打点、打面は剥離時の破碎で欠損したと考えられる。

84・85は調査区南端に設定したTP1の2層、及びⅡ層 (註3) から出土している。181が出土した試掘トレンチ No.11も隣接している調査区南端付近には浅い谷が埋没しており、黒褐色土が残っていたため、縄文時代の遺物が出土した。

第13表 石器観察表 (縄文時代)

遺物番号	器種	石材	出土層位	長さ (mm)	幅 (mm)	高さ (mm)	重さ (g)	遺構	判別群	個体番号
84	剥片	黒曜石	2層	11.49	14.98	1.67	0.23	遺構外	蓼科冷山	13
85	剥片	水晶	Ⅱ層	37.53	16.95	4.71	2.55	遺構外		
181	石鏃	黒曜石	Ⅳ層	17.26	11.11	2.48	0.34	遺構外		

註

- 1) トレンチの位置は第5図 (P20) を参照。
- 2) 平成24年10月31日付で南牧村教育委員会が長野県教育委員会教育長あてに報告した矢出川遺跡群の発掘調査終了報告書 (24南牧教第32号) より。
- 3) 第7図 (P25) TP1西壁柱状図に対応する。

第5章 中世の遺構と遺物

第1節 概要

矢出川第Ⅷ遺跡は、縄文時代～中世の南牧村の遺跡地図では平沢パイロット遺跡として登録されているが、時期は縄文時代のみとなっていた。最も近い中世の遺跡は東北東約 200m に位置する三沢西遺跡（図版 2-65）であり、鉄鏃が採集されているという。

今回の調査で陥し穴 1 基が検出され、遺跡の時期に中世が加わることが明らかとなった。遺物は出土しなかった。

第2節 遺構

SK1（図版 19・20）

表土はぎ直後に調査区南端近くで SK1 の黒色埋土の落ち込みを認識した。遺構か否かを確認するために、西側半分を掘り下げたところ底面に並ぶ逆茂木痕を検出したため、陥し穴と判断した。当初は縄文時代の陥し穴と認識していたが、中世にも大型の陥し穴が存在することがわかり、いずれの時代に属すかの確認も含めて調査を進めた。

遺構の位置を第 8 図に示す。検出面はⅣ層上面。検出面の平面形は長さ 3.8m、幅 1.2m、南北に長い長楕円形を呈する。底面の大きさは長さ 3.2m、幅 0.2m の溝状となり、断面形は V 字形に近い。埋土は上から 1 層黒色腐植土、2 層・3 層は黒色腐植土とローム層がブロック状又は板状に混在し、下層はローム層の比率が高い。底面上には有機質で黒色腐植土の 4 層が堆積していた。

逆茂木痕は底面中央に 7 か所、40cm 程度の間隔で 1 列に並び、北から Pit1～7 と命名して調査を進めた。

逆茂木痕の埋土は黒色腐植土と黄褐色ローム層がブロック状に混在する。逆茂木痕の直径はおよそ 10cm、深さは底面から約 20cm で底が尖る。掘り方がないため、逆茂木は打ち込まれたものと考えられる。底面から上に伸びる逆茂木痕を Pit2～6 の 5 か所で確認することができた。底面からの高さは約 50cm で、有機質で他より黒く、締まりが悪い。図版 19-2 の棒状の黒色部及び窪んだ部分が該当する。Pit2 と 6 の底部近くから逆茂木と考えられる木材が出土した（図版 20-5）。残念ながら腐植が激しく、加工痕を確認することはできなかったが、Pit6 の逆茂木はハンノキ亜属と同定され、Pit2 の樹種も同じ可能性が高いとされた。放射性炭素年代測定で、両者とも 15 世紀中頃の値が得られた。

埋土の締まりが悪いのに対し、遺構下部の壁面外側の自然堆積層は締まりがよく硬い。埋土のみを取り除くことは容易で、掘り上げた跡の壁面には、短冊状の掘削痕が残されていた（図版 20-6）。掘削痕は幅 5～10cm、長さ 20～30cm 程度の単位が確認できる。遺物は出土しなかった。

第6章 自然科学分析

第1節 実施した自然科学分析

実施した自然科学分析を第14表に示した。その目的と成果の概要を本章で示す。なお、それぞれの委託先から納められた成果報告は、添付DVDに収録する。

第14表 実施した自然科学分析

分析の種類	分析委託先
火山灰分析	株式会社 パレオ・ラボ
黒曜石原産地推定分析	株式会社 パレオ・ラボ
放射性炭素年代測定・樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社

第2節 火山灰分析

1. 分析の目的

矢出川第Ⅷ遺跡の石器群の時期は、型式学的にA T降灰以前の可能性が考えられた。A T降灰以前の石器群は野辺山高原周辺では初めてとなる。自然科学的な分析により、A T等の広域火山灰との前後関係を探るべく、火山灰分析を実施した。

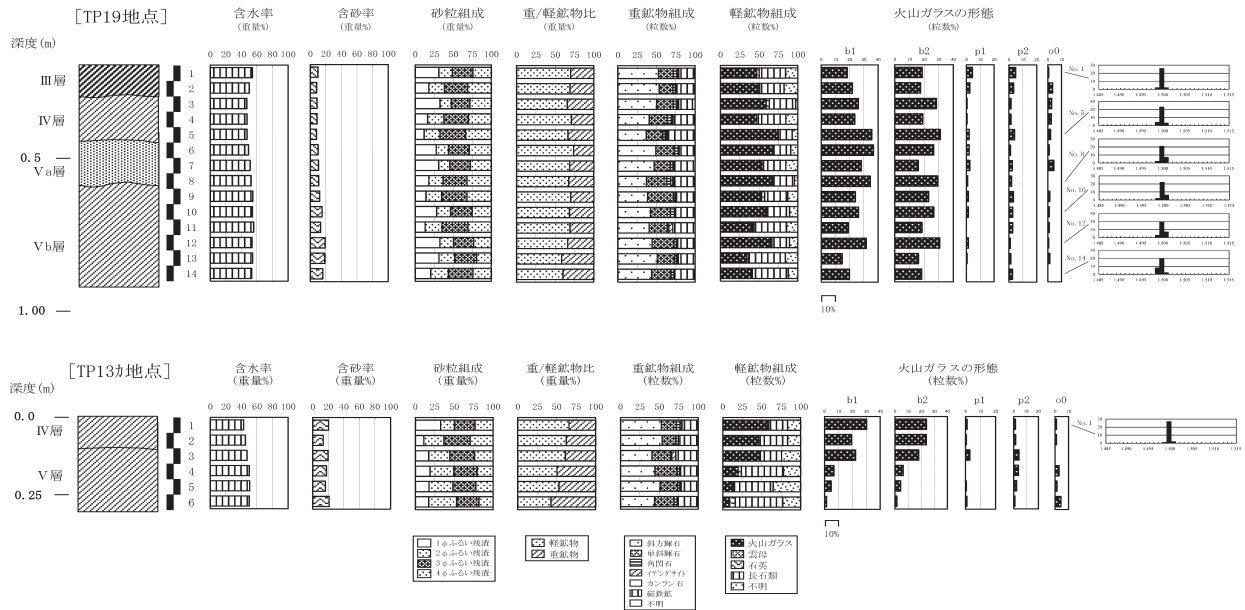
2. 分析成果の概要

第6図のTP13カ6西壁及び、TP19西壁柱状図内に示した位置から分析試料を採取した。採取した痕は図版1-5・1-7でも確認できる。採取地点TP13カ6西壁はBL2の遺物集中部にあり、石器そのものが出土している地点となる。しかし、地表からIV層の途中までが、削平され失われていた。そこで、石器検出地点から少し離れるが、地表近くからの地層が残り、堆積が厚いTP19西壁も資料採取地点として選択した。両地点で採取した土層中の鉱物組成と火山ガラスの分布を第10図に示す。

TP19西壁で分析を行ったⅢ～V b層の連続資料14点すべてから、A T起源と考えられる火山ガラスが検出された。しかし、拡散が大きく、降灰層準と考えられるピークを見出すことはできなかった。

TP13カ6西壁ではIV～V層6点の連続試料すべてから、A Tを起源とする火山ガラスが検出された。最上部のNo.1試料で最も多く検出され、降灰層準の可能性が指摘されたが、明らかなピークとは言えず断定には至らなかった。

以上が分析結果の概要となる。結論はA Tは検出されるが、上下に大きく拡散しており、当時の生活面が想定されるV層上部～中部との上下関係は特定できないこととなる。しかし、遺物出土地点であるTP13カ6西壁では、明らかとはいえないが、IV層にA Tのピークがあることは注目すべきであろう。



第10図 鈳物組成と火山ガラスの分布

第3節 黒曜石原産地推定分析

1. 分析の目的

遺跡に持ち込まれた黒曜石の原産地を知ることが、黒曜石とそれを運んだ旧石器時代の人びとの動きを探るための重要な手がかりとなる。これまで、埋文センターが発掘調査してきた遺跡の黒曜石については、積極的に原産地分析を実施し、データを積み上げてきた。本遺跡の黒曜石についても、原産地推定分析を行い人びとの動きを探るとともに、データ蓄積の一端を担うことを目的として黒曜石原産地分析を実施した。

2. 分析成果の概要

第15表に層位・器種別の産地推定結果を示した。分析可能な法量を持つ黒曜石のすべてとなる旧石器時代80点、縄文時代1点、合計81点の原産地推定を実施した。以下、推定された産地群ごとに成果を述べる。

和田鷹山群：原産地までの直線距離は和田峠が約37.5km、星糞峠が約34kmとなる。直線経路上には八ヶ岳があるので、実際の経路はさらに長い。不純物が少ない良質の黒曜石で、全5点中2点と製品の比率が高い。残渣的な碎片類がなく遺跡内で割られた痕跡がほとんどない。

第15表 層位・器種別の産地推定結果

時期	層位	器種	和田鷹山	諏訪星ヶ台	蓼科冷山	天城柏峠	計
縄文	2層	剥片	—	—	1	—	1
旧石器	IV層上部	剥片	—	—	1	—	1
		石刃	—	—	2	—	2
	IV層下部	剥片	—	—	1	—	1
		石刃	—	—	1	—	1
	V層上面	剥片	—	1	—	—	1
		ナイフ形石器	—	1	—	—	1
	V層上部	貝殻状刃器	—	—	1	—	1
		石刃	—	1	—	—	1
		石核	1	—	3	—	4
		剥片	3	4	37	—	44
	V層中部	ナイフ形石器	—	1	1	—	2
		石核	—	—	1	—	1
		貝殻状刃器	—	—	—	1	1
カクラン	剥片	—	4	4	—	8	
	ナイフ形石器	1	—	—	—	1	
	石刃	—	—	2	—	2	
		剥片	—	1	7	—	8
	計		5	13	62	1	81

諏訪星ヶ台群：原産地までの直線距離は星ヶ塔が約 36.5km、星ヶ台が約 34.5km となる。和田鷹山群の原産地へ行くのと同一方向で、距離もあまり変わらない。いずれも不純物が少ない良質の黒曜石で、13 点中ナイフ形石器 2 点、石刃 1 点と製品の比率が高い。和田鷹山群同様に残渣的な碎片類がなく、遺跡内で割られた痕跡がほとんどない。

蓼科冷山群：原産地までの直線距離は麦草峠が約 17km、冷山が約 18.5km となる。冷山へは直線経路上に八ヶ岳があるため、かなり遠回りしないと行けない。麦草峠は主な黒曜石の産地で最も近い。81 点中 62 点が蓼科冷山群で、残渣的な碎片類も多くみられ、遺跡内で蓼科冷山群の黒曜石による石器製作が行われていたと考えられる。気泡状の細かい白色部により全体が灰色に見える黒曜石が目立つ。

天城柏峠群：サンプル採取地から遺跡までの直線距離は約 120km ある。経路としては甲府盆地から富士山、愛鷹山あるいは箱根山の山麓を経て、伊豆半島にある柏峠に至る。貝殻状刃器 1 点が単独で持ち込まれており（註 1）、遺跡内に石器製作の痕跡はない。

以上のように、矢出川第Ⅷ遺跡の黒曜石原産地分析では、4 か所の産地群が推定された。中心となるのは遺跡から最も近い蓼科冷山群で、遺跡内で石器製作も行われている。和田鷹山群と諏訪星ヶ台群は製品や製品の素材となりうる石器が持ち込まれている。

1 点だけではあるが、天城柏峠群の貝殻状刃器は注目できる。天城エリアと箱根エリアの黒曜石の長野県への持ち込み事例は少ない。野辺山高原周辺の事例としては、A T 降灰以降の野辺山第Ⅱ期の三沢遺跡で箱根畑宿群 5 点、同時期で矢出川第Ⅷ遺跡の南西約 5.5km に位置する丘の公園第 2 遺跡で天城柏峠群 8 点（保坂・望月・池谷 2001）、細石刃石器群の矢出川第Ⅰ遺跡で天城柏峠群が 1 点確認されている（望月 2015）。天城・箱根エリアの原産地から直接黒曜石が持ち込まれたとすれば、もっと大量となるに違いない。数点という数の少なさから、経由地の存在が想定できる。

静岡県のア鷹山南麓、箱根山西麓の遺跡群（以下「ア鷹・箱根山麓遺跡群」という。）では、旧石器時代全般を通じて長野県産、天城・箱根エリア産、神津島産の黒曜石が伴う事例が多く知られている（谷他 2013）。ア鷹・箱根山麓遺跡群で活動していた人々は黒曜石を求めて、長野県の原産地周辺に来ていたと考えられる。今のところ、野辺山高原より長野県の西側に天城・箱根エリアの黒曜石が持ち込まれた事例はない。良質の黒曜石が入手できる長野県黒曜石原産地周辺では、質の劣る天城・箱根エリアの黒曜石は不要だったのであろう。原産地が目前に迫る野辺山高原は、天城・箱根エリアの黒曜石の要不要の判断が切り替わる場所で、不要となった質の劣る黒曜石は置き去られたと考えられる。

第4節 放射性炭素年代測定・樹種同定

1. 分析の目的

陥し穴（SK1）からは遺物が出土しなかった。形態的には中世の可能性が高いと考えたが、縄文時代に属す可能性も否定しきれなかった。逆茂木の年代を測定し時期決定の参考にするため、年代測定分析を実施した。また、逆茂木に使われた木材の樹種同定も同時に行った。

2. 分析成果の概要

陥し穴の底面に並ぶ逆茂木痕、Pit2 及び Pit6 から検出された逆茂木材 2 点を分析対象とした。第 16 表に放射性炭素年代測定の結果を示す。

Pit2 の逆茂木材（試料 No.1）から cal AD 1433 - 1446、Pit6 の逆茂木材（試料 No.2）から cal AD

第16表 放射性炭素年代測定及び暦年較正結果

試料	測定年代 (yrBP)	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正年代 (暦年較正用) (yrBP)	暦年較正結果				相対比	測定 CodeNo.
				σ	cal AD 1,433 - cal AD 1,446	cal BP 517 - 504	1.000		
試料No.1 SK1 Pit2 逆茂木	460 ± 20	-27.27 ± 0.22	457 ± 19	σ	cal AD 1,433 - cal AD 1,446	cal BP 517 - 504	1.000	IAAA- 132719	
				2σ	cal AD 1,424 - cal AD 1,452	cal BP 526 - 498	1.000		
試料No.2 SK1 Pit6 逆茂木	420 ± 20	-19.84 ± 0.22	415 ± 19	σ	cal AD 1,444 - cal AD 1,465	cal BP 506 - 485	1.000	IAAA- 132720	
				2σ	cal AD 1,438 - cal AD 1,487	cal BP 512 - 463	0.998		
					cal AD 1,605 - cal AD 1,606	cal BP 345 - 344	0.002		

1444 - 1465 の暦年較正年代値 (1σ) が得られた。共に樹皮の部分を確認して測定した訳ではないが、逆茂木は若く細い木材から切り出した可能性が高いことから、今回得られた数値は伐採年代に近い値を示していると考えられる。同じ陥し穴の逆茂木のため、分析した2点の材は同時に使用されていたと考えられる。大木を必要とせず加工も簡易なため、どこかで大量に製作して保管したり、古いものを何度も転用する可能性は低い。両者の年代値は1444年から1446年の間で重なることから、逆茂木が使用された年代、すなわち陥し穴が使用された年代はその直後の15世紀の半ば頃と考えられる。

樹種はPit6がハンノキ属ハンノキ亜属、Pit2が広葉樹と同定された。報告によるとPit2の樹種もハンノキ属の可能性があるとのこと。ハンノキ亜属は比較的硬で強度が高い。遺跡の北約200mの矢出川沿いにはハンノキの原生林が確認されている(山崎1981)。15世紀中頃の気候は、「小氷期」といわれる時期にあたり、現在より約1℃気温が低いとされているが(三上2005)、1℃であれば植生は大きく変わらないことから、矢出川沿いは最も有力な逆茂木材入手候補地と考えられる。

註

1) 分析結果を受けて、器種を剥片から貝殻状刃器に変更したため、添付DVDの報告中の器種は剥片となっている。

引用・参考文献

谷 和隆・塚原秀之・鶴田典昭・中島 透・橋詰 潤・羽生俊郎・前田一也・村田弘之・山科 哲 2013 「中部地方の黒曜石原産地分析試料」『文化の十字路信州』日本考古学協会 2013 年度長野大会研究発表資料

保坂康夫・望月明彦・池谷信之 2001 「黒曜石原産地と石材の搬入・搬出 - 丘の公園第2遺跡の原産地推定から -」『山梨県立考古学博物館・山梨県立埋蔵文化財センター 研究紀要17』

三上武彦 2005 「過去1000年間の気候変動と21世紀の気候予測」『地学雑誌』114 (1)

望月明彦 2015 「野辺山高原における細石刃石器群の産地推定」『矢出川 日本で最初に発見された細石刃石器群の研究』

山崎 惇 1981 矢出川遺跡群周辺の植生(予報) - 1980年度中間報告 - 『報告 野辺山シンポジウム1980』明治大学考古学研究室

第7章 総括

第1節 旧石器時代の石器群について

本節では今回の矢出川第Ⅷ遺跡の発掘調査で出土した石器群の時期と石材利用について検討を行う。

1. 石器群の時期について

(1) 出土層位の検討

調査前の調査区は舗装された農道として利用されていた。表土はぎをした結果、Ⅳ層以上の地層の大部分が、農道整備の整地等により削平されていた。遺跡埋没後に堆積した地層が失われた状態であり、深度等石器群の年代を探るための重要な情報が失われていたこととなる。

残された地層の最上層であるⅤ層から、3か所のブロックを検出した。遺物の検出状況から、最も遺物密度が高い地層及び大型遺物が集中する地層は残っていたものと思われる。

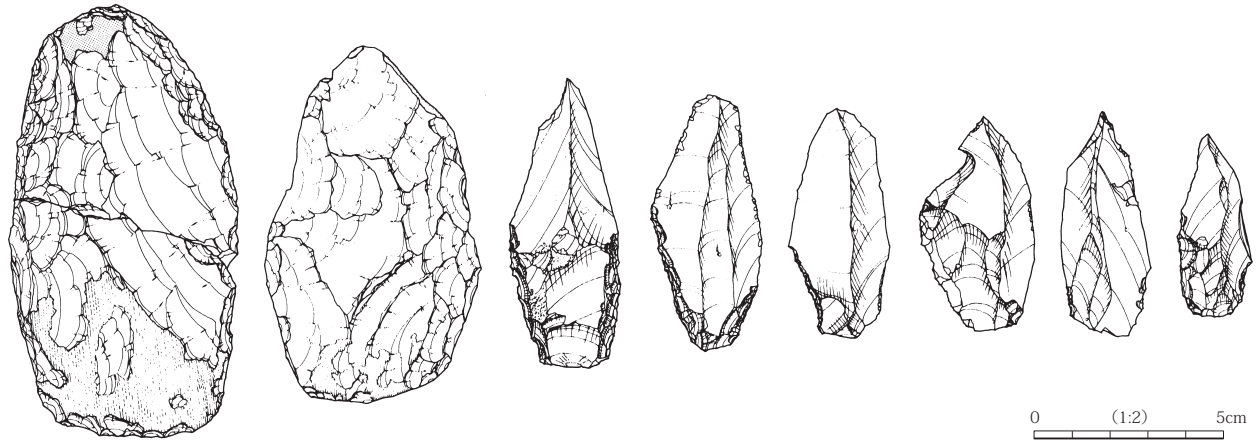
Ⅴ層上部から出土した遺物が、177点中107点で最も多かった。しかし、このⅤ層上部は残っていたⅤ層の上部という意味で、自然堆積したⅤ層の上部を示すものではない。3か所のブロック検出地点の大部分で、Ⅴ層上面は削平され、Ⅴ層上面からの正確な深度情報は失われていた。そのため、Ⅴ層上部として取り上げた遺物には、本来Ⅴ層中部や下部に包含されていたものが含まれていると考えられる。

石器群とAT降灰の前後関係を明らかにするため火山灰分析を実施したが、明確なATのピークをみつけることができず、AT降灰層準を特定することができなかった。しかし、BL2内でサンプリングしたTP13カ6西壁の分析データはⅣ層とⅤ層最上部にATが多く、Ⅴ層最上位より下はATが少なくなる結果が出た。特定はできないというが、本石器群がATより下位に包含される可能性が高いことを示しているのではないだろうか。

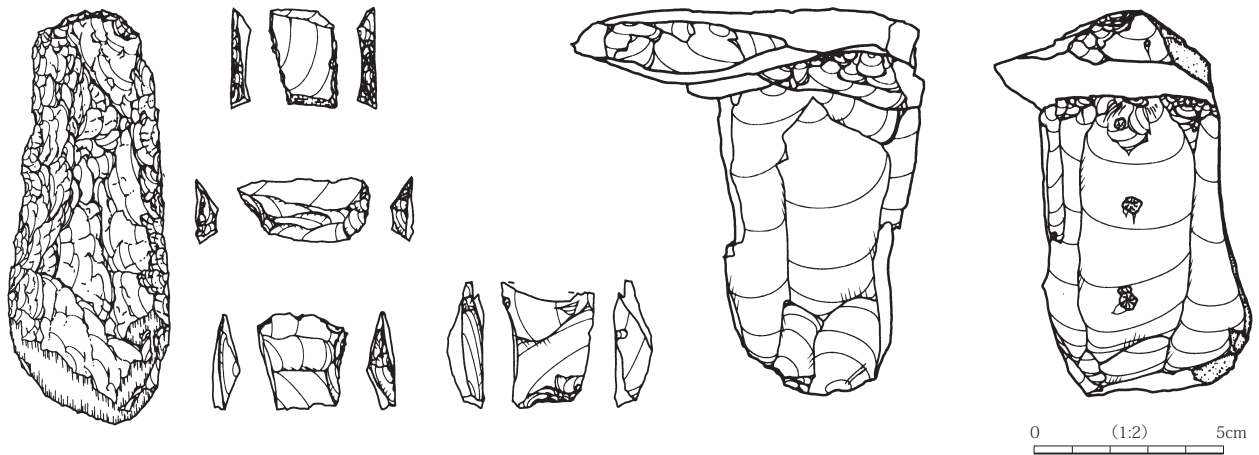
野辺山高原で調査されてきた旧石器時代の石器群の多くが漸移層(Ⅲ層)～ソフトローム層(Ⅳ層)の最上位で出土し、完全なⅣ層になると遺物が出土しなくなる(註1)。理由は、野辺山Ⅲ期以降の石器群の調査が多かったこともあるが、一般的にローム層の堆積が薄いことにもある。ローム層の主な構成要因と考えられている火山灰の給源は八ヶ岳である。遺跡群が形成された約3万年前以降に大量の火山灰を降らすような噴火はないため、ローム層の堆積は薄い。裏を返すと数十cm掘り下げるだけで、万の単位の年代を遡るということになる。そのため旧石器時代の終わりに近い野辺山Ⅲ期やⅣ期の石器群が、完全なⅣ層まで深くなることはない。完全なⅣ層以下から出土する石器群は、野辺山Ⅱ期以前のナイフ形石器群であり、本石器群も野辺山Ⅱ期以前となることは層位的に疑いない。Ⅳ層の下層であるⅤ層から出土しているため、さらに古い位置付けが必要となろう。

(2) 型式学的な検討

本石器群には「杉久保型」や「茂呂型」など型式名が付き、単独で時期を決定できるようなナイフ形石器は存在しないが、いくつか時期を考察する上で重要な要素を持つナイフ形石器がある。図版8-135は1側縁加工のナイフ形石器であるが、ブランディングにより断ち切られた左側縁は急角度で、一部に背面側



第11図 大久保南 I b 石器文化の石器



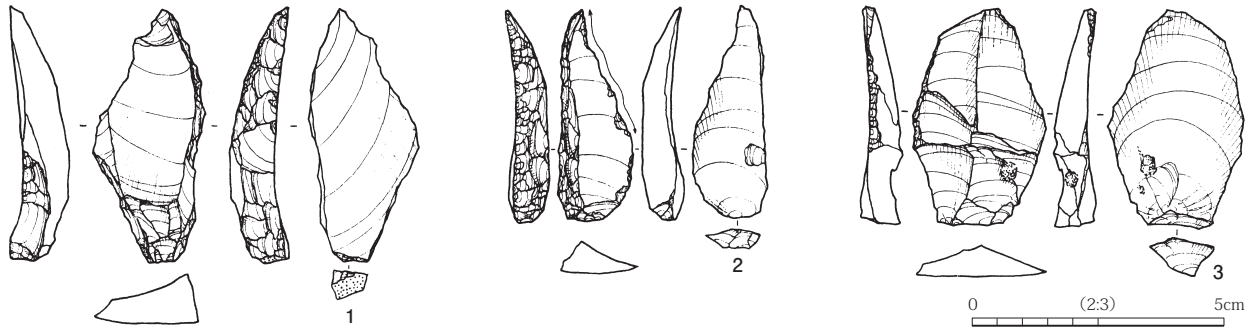
第12図 広原Ⅱ遺跡4層石器群の石器

からのブランディングが確認できる。腹面と背面両側からのブランディングにより、素材を断ち切る技術は、武蔵野台地立川ローム層Ⅶ層相当の石器群に特徴的に存在し、長野県内でも野尻湖遺跡群の第Ⅱ期に存在する（谷 2007）。立川ローム層で A T のピークはⅥ層にあり、Ⅶ層はその下の層のため、A T 降灰以前の特徴となる。

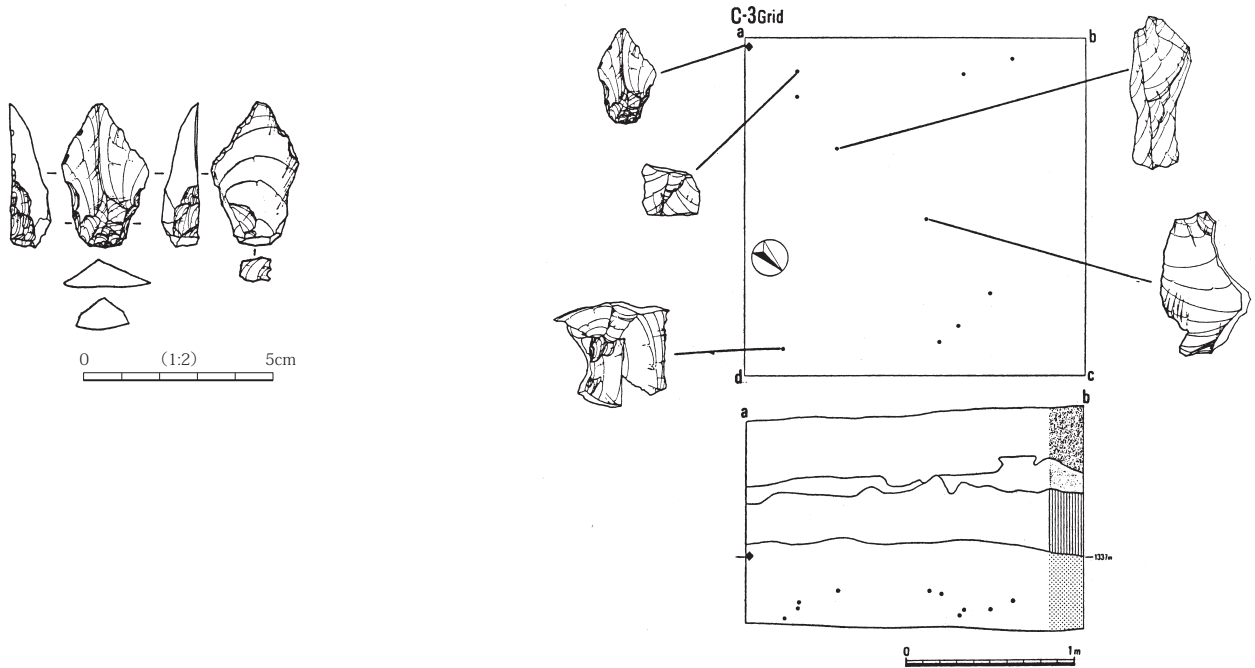
石刃石核は、規格的な石刃を連続して剥離するために、打面の形状を整える打面調整や、作業面の形状を整える頭部調整などの石核調整が施される場合が多い。ところが、本石器群の石刃石核には石核調整がほとんどみられない。そのためか、連続して剥離される石刃数は少なく、規格性も低い。剥離された石刃には大きな打面と発達したバルブが目立つ。打面には径の大きな打撃痕が残る石刃が多い。図版 17-2 に打面に残された打撃痕の例を示す。このような簡易で粗い石刃剥離は A T 降灰以前にみられる技術で、県内の類例として、野尻湖遺跡群の大久保南 I b 石器文化（長野県埋蔵文化財センター 2000）と黒曜石原産地にある広原Ⅱ遺跡（小野・島田他編 2016）があげられる。両者とも黒曜石を主体とし、打面調整や頭部調整がない石核から、打面を広く残し、発達したバルブを持つ石刃を剥離している。斧形石器が共伴することから、両石器群の時期は立川ローム層Ⅸ・Ⅹ層相当段階に位置づけられる（谷 2007、島田 2016）。

（3）既存資料の再検討

過去の矢出川第Ⅷ遺跡の採集資料中に A T 降灰以前の可能性が考えられるナイフ形石器がある（矢島 1981、第 13 図 1・3）。1・2 は腹面と背面の両側からのブランディングが確認できる。前記したように、野尻湖第Ⅱ期に特徴的に存在するナイフ形石器の調整である。3 は典型的なナイフ形石器とはいいがたいが、



第13図 A T降灰以前の可能性が考えられる矢出川第Ⅷ遺跡採集のナイフ形石器



第14図 矢出川第Ⅰ遺跡C-3グリッドのナイフ形石器と遺物分布

広く残った素材打面と発達したバルブは今回出土した石器群との共通性が高い。

矢出川第Ⅰ遺跡にもA T降灰以前の可能性が考えられる石器群が存在する（米村他 1982）。1981年に調査されたC-3グリッドから出土したナイフ形石器（第14図左）は寸詰まりの縦長剥片を素材とし、基部両側縁にブランディングを施している。先端は尖り平面形はペン先形を呈する。いわゆるA T降灰以前の「ペン先形ナイフ形石器」として評価できる。斧形石器や台形石器と並び、野尻湖第Ⅰ期を代表する形態のナイフ形石器である。同グリッドからは11点の遺物が出土しており、いずれもⅢ下層から出土している。細石刃石器群を主体とする他のグリッドの出土層位はⅡ～Ⅲ上層であるのに対し、このグリッドだけ突出して深い。このⅢ下層はハードローム層で、深度や層序から矢出川第Ⅷ遺跡のⅤ層と同一層準と考えられる。石材は黒曜石はなく、ナイフ形石器を含む確認できた5点の石材は頁岩であった。

（4） 時期の検討のまとめ

以上のように今回の石器群が出土したⅤ層の位置は深く、A T降灰を遡る可能性が高い。また、打面を広く残し、打撃痕が目立つ石器製作技術もまた、A T降灰以前の可能性が高い。これまでA T降灰以前として認識されていなかったが、既存資料の一部にA T降灰以前の資料が存在する可能性が高いこともわかった。よって、今回検出された矢出川第Ⅷ遺跡の時期はA T降灰以前の野尻湖第Ⅰ～Ⅱ期に並行する可能性が高いと考えられる。

2. 石器の石材について

黒曜石は原産地分析の結果、原産地では最も近くに位置する、蓼科冷山群の黒曜石が持ち込まれ、遺跡内で石器製作が行われたことが明らかとなった。質の良い諏訪星ヶ台群と和田鷹山群の黒曜石は、遺跡内の石器製作の痕跡はなく、製品や製品に近い素材が持ち込まれている。

黒曜石の他に水晶の存在も注目される。野辺山高原での水晶製の石器は珍しいものではなく、普通に存在する。しかし、水晶が主体となる石器群は確認されてなく、いずれも黒曜石が主要石材となっている。長野・山梨県境に位置する金峰山は水晶の産地として知られている。金峰山麓や隣村の川上村千曲川北側の男山や天狗山には水晶の産地がある（白倉 1987）。遺跡からの距離は 10～15km 程度であり、黒曜石の産地より近い。

水晶の主成分は黒曜石と同じ SiO_2 （二酸化ケイ素）であり、ガラスの主成分とも同じである。ガラスのように割れ口が鋭いため、鋭利な刃を必要とする石器の材料となる。しかし、旧石器時代から縄文時代の水晶の石材としての利用は黒曜石と比べると圧倒的に少ない。その理由は硬くて砕けやすいため、狙った形状に打ち割るのが難しいことにある。本石器群でも水晶は石核として利用されているものの、利器の製品はなく、製品の素材となりうる大きさの剥片も得られた痕跡がない。無色透明で美しいことから現代では宝石に利用される石材だが、旧石器時代人にとっては、黒曜石より扱いにくい石だったのであろう。野辺山高原は産地が近いので、黒曜石を補完する石材として水晶が利用されていたのではないだろうか。

第2節 中世の陥し穴について

矢出川第Ⅷ遺跡から検出された陥し穴 SK1 は検出された逆茂木材の放射性炭素年代測定から 15 世紀半ば頃に使用されていたと考えられる。同様の陥し穴の事例は桜井秀雄によって集成が行われ、八ヶ岳南麓地域の 11 遺跡 43 の事例が挙げられている（桜井 2006）。

1. 陥し穴の特徴

以下、桜井が指摘した中世陥し穴の特徴と、本遺跡の陥し穴を比較検討する。

平面プラン：「長楕円形を呈し長軸方向に比べて短軸方向が極めて狭いことが最大の特徴である。規模で見ると、長軸方向では 272cm～406cm、また、短軸方向では、40cm～160cm までの範囲にみられている。」とされるが、形態・規模ともこの特徴に合致している。

壁の立ち上がり：「短軸方向では、坑底から中途まで垂直に立ち上がり、上中位付近で屈曲し外側に開くもの」「ほぼ垂直に立ち上がるもの」との 2 者の存在が指摘されており、本遺跡は前者の特徴と一致している。

鉄製工具痕：「壁面に鉄製工具による掘削痕が認められている」とされる。本遺跡では幅 5～10cm、長さ 20～30cm の短冊状の掘削痕が確認されている。掘削痕の重複が多いため、工具痕の 1 単位を見出すことはできなかった。しかし、丘の公園第 5 遺跡で想定された刃幅 13～14cm の工具であれば、本遺跡と同様の掘削痕が残るものと思われる。深い部分の地山は固く締まっているため、工具の材質は鉄の可能性が高いのだろうか。

底面：「非常に坑底が狭く、長方形というよりも『溝状』との表現がふさわしい事例もあるが」とされ、本遺跡はこの「溝状」との表現がふさわしい事例である。

坑底ピット：「4～10 基認められており、このうち 5～6 基である事例が大半を占めている。」本遺跡

の坑底ピットは7基であり、特徴の範疇に収まる。

逆茂木の埋設方法：「先端を角錐状に極めて鋭く尖らせた逆茂木を打ち込んだ痕跡が確認できるもの」とされている。断ち割りは行わなかったが、掘り方はなく坑底は尖るため、「打ち込み型」と判断できる。

以上のように、桜井の指摘する中世陥し穴の特徴に矛盾する部分はなく、典型的な中世の陥し穴の特徴を有すると評価できる。

2. 放射性炭素年代測定値と陥し穴の年代について

Pit2の逆茂木材（試料No.1）から cal AD 1433 - 1446、Pit6の逆茂木材（試料No.2）から cal AD 1444 - 1465の暦年較正年代値（1 σ ）が得られている。諏訪郡原村の南平遺跡の陥し穴では小竪穴135の逆茂木材がAD1435 - 1470、小竪穴372の逆茂木材からAD1450 - 1525・AD1560 - 1630の暦年較正年代値（1 σ ）が得られている（原村教育委員会1998a）。また、原村の關蘆沢遺跡の逆茂木材からは16世紀という結果が導き出されているという（原村教育委員会1998b）。矢出川第Ⅷ遺跡の2つの値は同じ陥し穴の中の2つの逆茂木材からの値であり、2つの逆茂木は同時に使用されていた可能性が極めて高く、値も近い。南平遺跡の2つの値は別々の遺構からの値であるため、使用期間が異なる可能性があり、値も前後しているようだ。矢出川第Ⅷ遺跡の年代値が最も古く、遅くとも15世紀には中世陥し穴の利用が南八ヶ岳地域で始まっていたことを示す事例と位置づけられる。南平遺跡小竪穴372と關蘆沢遺跡の事例は16世紀にも陥し穴が存在していたことを示し、17世紀まで下るか否かが今後の課題となろう。

3. 中世の陥し穴とは何か

埋文センターで調査した茅野市馬捨場遺跡でも同様の陥し穴が検出されており、河西克造はその報告書において「中世的」な陥し穴と諏訪神社との関連を指摘している（河西2002）。延文3年（1356年）に諏訪円忠が著した『諏訪大明神画詞』に「神野（御狩野）」・「鹿穴」という言葉が登場する。「神野（御狩野）」は諏訪社の祭礼に先だって行われるシカ狩りの狩猟域であり、『諏訪郡諸村並旧蹟年代記』に記載された「神野」の範囲と、「中世的」陥し穴の分布範囲がほぼ一致するという。桜井秀雄も河西の指摘を概ね指示しており、中世陥し穴の狩猟対象動物をシカとしている（桜井2006）。

今回発見された陥し穴は1基だけだったが、遺構の性格上単独で存在することは考えにくく、東西の調査区外に複数の中世陥し穴が存在するはずである。野辺山高原には矢出川第Ⅷ遺跡とよく似た地形も多いため、その広い範囲に中世陥し穴が存在する可能性は高いと思われる。八ヶ岳南麓の中世陥し穴の分布は、これまでの最東端であった、丘の公園第5遺跡から、野辺山高原までその分布域が広がったこととなる。信濃・甲斐の国境であった野辺山高原に「神野」があったか否か興味深いところである。

註

1) Ⅲ層とⅣ層の境は波状の凹凸があるので、完全なⅣ層とはⅣ層上面から10cm程度掘り下げた状態を指す。

引用・参考文献

- 小野 昭・島田和高・橋詰 潤・吉田明弘・公文富士夫編 2016 『長野県中部高地における先史時代人類誌 広原遺跡群第1次～第3次調査報告書』明治大学黒耀石研究センター資料・報告集1
- 河西克造 2002 「陥し穴について」『広域営農団地農道整備事業八ヶ岳地区埋蔵文化財発掘調査報告書－茅野市内－馬捨場遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 58
- 桜井秀雄 2006 「八ヶ岳南麓の中世陥し穴」『金沢大学考古学紀要』28
- 白倉盛男 1987 「三沢遺跡附近の自然環境（主として地形・地質）」『三沢遺跡』三沢遺跡発掘調査団編
- 島田和高 2016 「広原Ⅱ遺跡の後期旧石器時代」『長野県中部高地における先史時代人類誌 広原遺跡群第1次～第3次調査報告書』明治大学黒耀石研究センター資料・報告集1
- 谷 和隆 2007 「野尻湖遺跡群における先土器時代石器群の変遷」『長野県立歴史館研究紀要』第13号
- 長野県埋蔵文化財センター 2000 『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書15－信濃町内その1－裏ノ山遺跡・東裏遺跡・大久保南遺跡・上ノ原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 48
- 原村教育委員会 1998a 『南平遺跡発掘調査概報』原村の埋蔵文化財 44
- 原村教育委員会 1998b 『家下・關蘆沢遺跡（第2次発掘調査）』原村の埋蔵文化財 46
- 矢島國雄 1981 「矢出川遺跡群の分布調査」『報告・野辺山シンポジウム1980』明治大学考古学研究室
- 米村 衛・高杉尚宏・池谷信之・大竹憲昭・須藤隆司 1982 「矢出川第Ⅰ遺跡の発掘調査」『報告・野辺山シンポジウム1981』明治大学考古学研究室



陥し穴にはまったシカの真似をする子供たち

図版



図版 1 遺跡遠景・層序



1 遺跡遠景 八ヶ岳牧場から野辺山原を望む



2 TP1 西壁



3 TP6 東壁



4 TP11 西壁



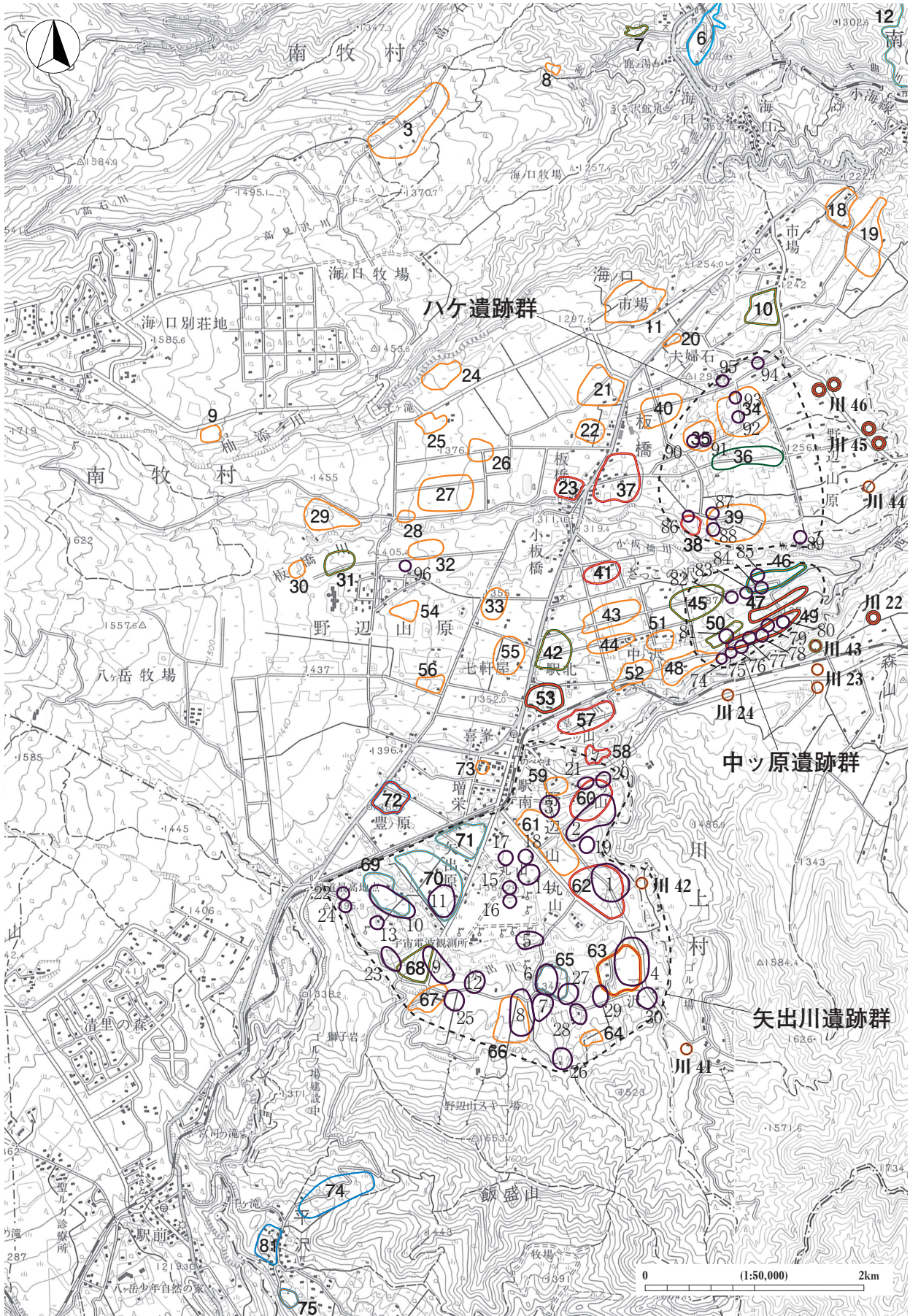
5 TP13 カ 6 西壁



6 TP16 カ 2 西壁



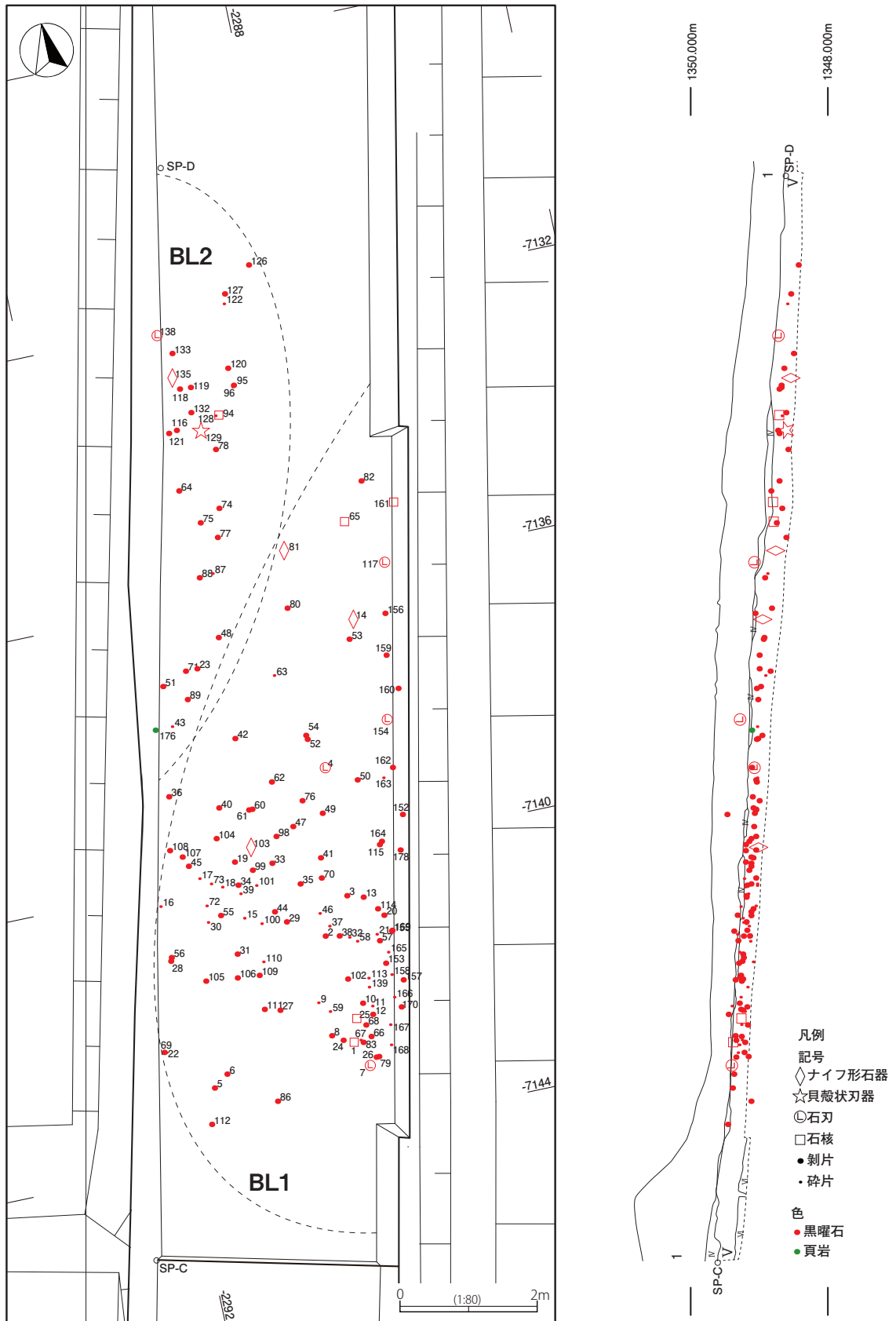
7 TP19 西壁



旧石器
 縄文
 弥生
 古墳
 古代
 中世

(長野県南佐久郡南牧村教育委員会 1993・長野県南牧村教育委員会 2004 を抜粋・統合)

図版3 BL1・2 遺物分布図



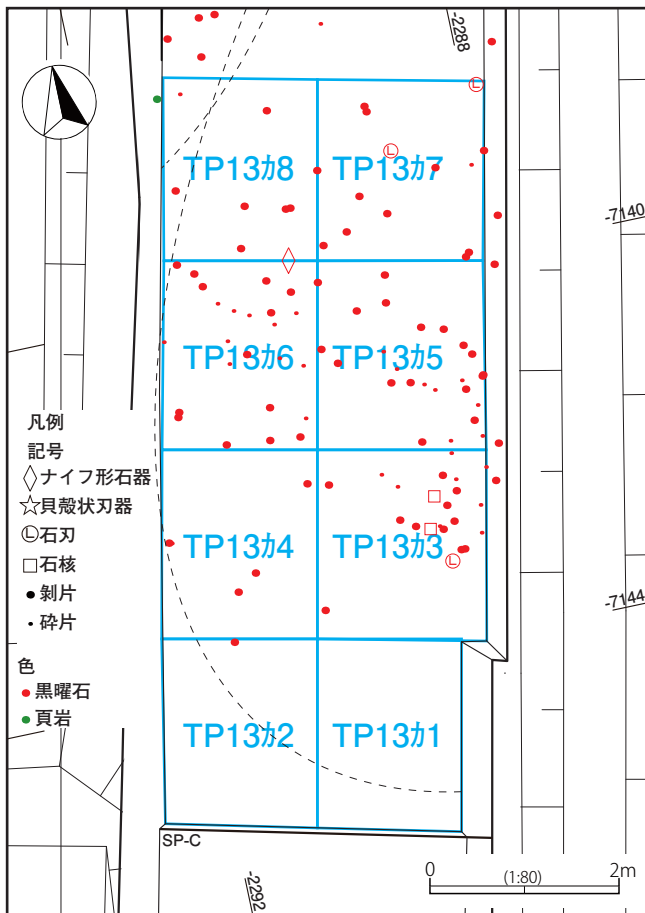


BL1

BL2



1 BL1・2 出土石器



2 BL1 水洗選別土壌サンプリング位置図



3 BL1・2 掘削風景 (北より)

図版5 BL1・2 遺物出土状況



1 BL1・2 遺物分布状況 (南より)



2 BL1 No.1 石核検出状況 (西より)



3 BL1 No.4 石刃検出状況 (東より)



4 BL1 No.81 ナイフ形石器とインプリント (西より)



5 BL1 No.25 石核出土状況 (南より)



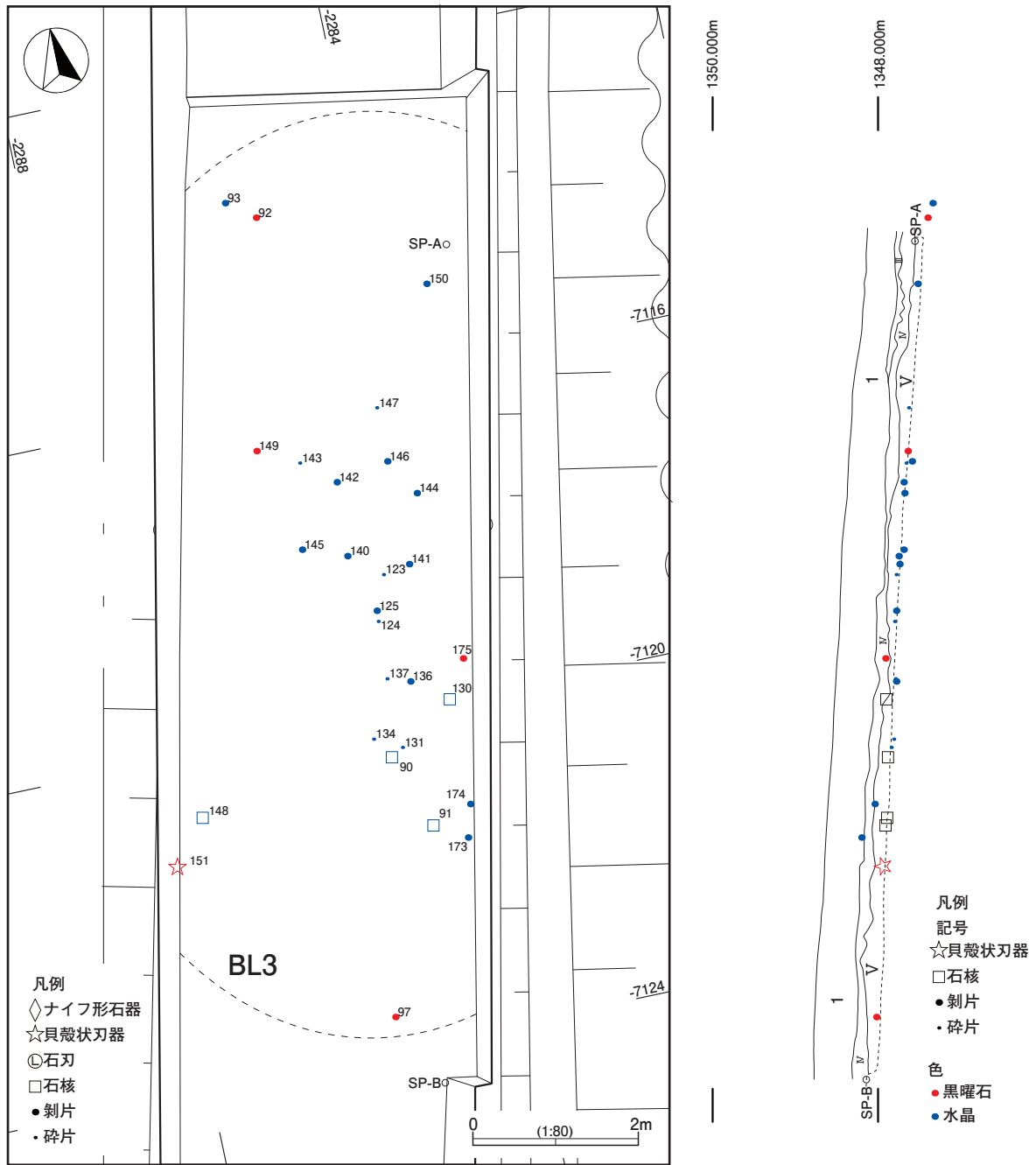
6 BL1 No.25 石核インプリント (南より)



7 BL2 No.135 ナイフ形石器出土状況 (東より)



8 BL2 No.135 ナイフ形石器インプリント (東より)



1 BL3 遺物分布図

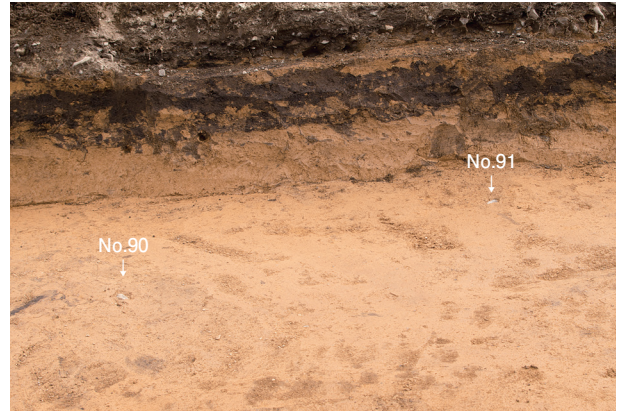


2 BL3 出土遺物

図版7 BL3 遺物出土状況



1 BL3 遺物分布状況 (南より)



2 BL3No.90・91 石核検出状況 (西より)



3 BL3No.90 石核検出状況 (西より)



4 BL3No.90 石核インプリント (西より)



5 BL3No.91 石核検出状況 (西より)



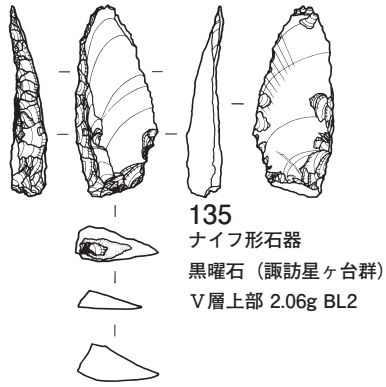
6 BL3No.91 石核インプリント (西より)



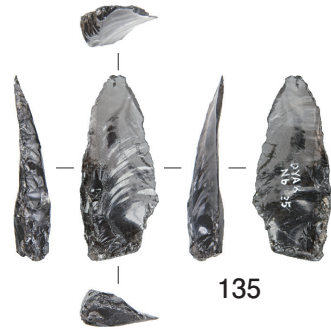
7 BL3No.130 石核検出状況 (西より)



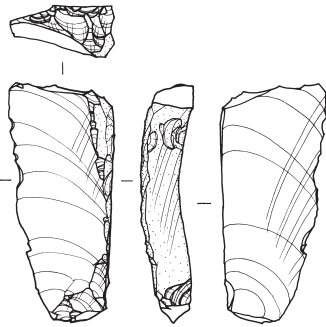
8 BL3No.130 石核インプリント (西より)



135
ナイフ形石器
黒曜石 (諏訪星ヶ台群)
V層上部 2.06g BL2



135



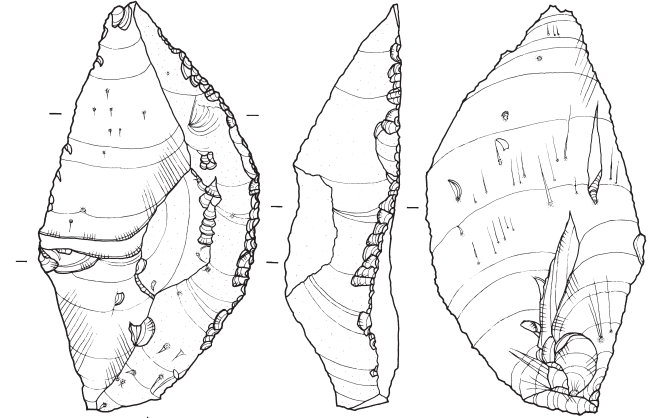
14
ナイフ形石器
黒曜石 (和田鷹山群)
かく乱 5.78g BL1



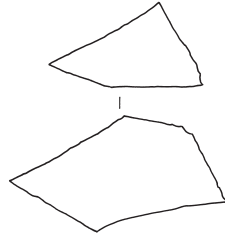
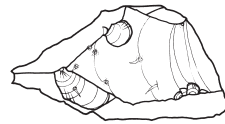
14



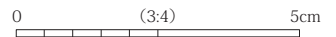
103
ナイフ形石器
黒曜石 (諏訪星ヶ台群)
V層中部 1.64g BL1



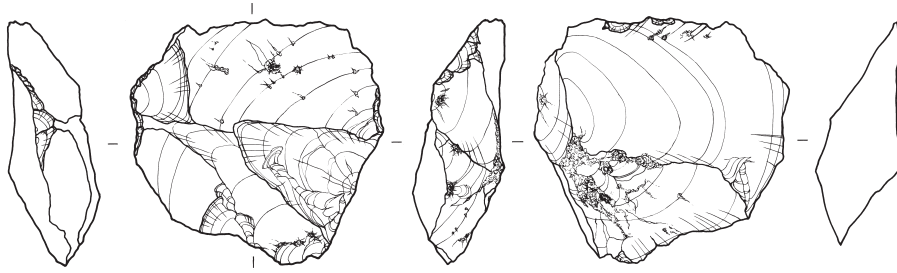
81
ナイフ形石器
黒曜石 (蓼科冷山群)
V層中部 38.41g BL1



81



図版9 旧石器時代の遺物2 (貝殻状刃器・石刃)



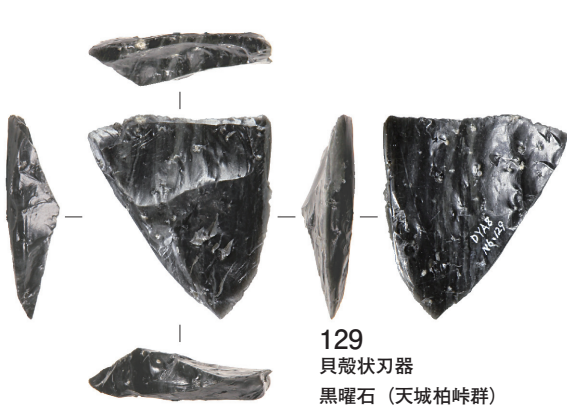
151
貝殻状刃器
黒曜石 (蓼科冷山群)
V層上部 23.05g BL3



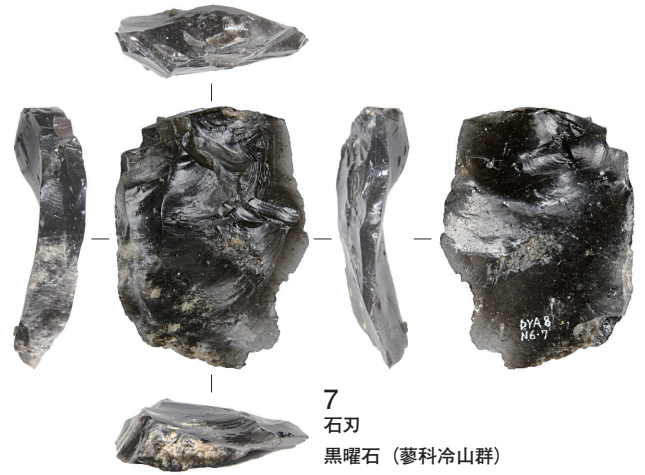
151



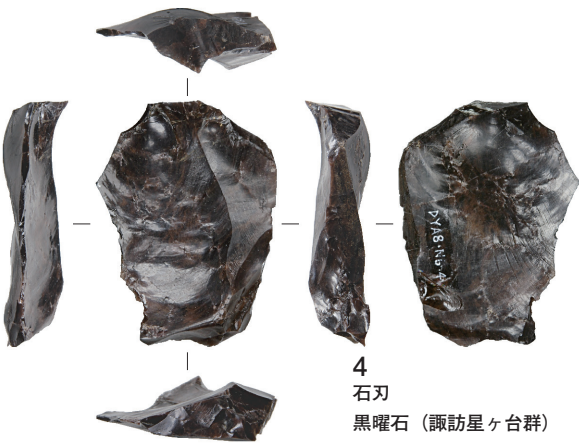
138
石刃
黒曜石 (蓼科冷山群)
IV層下部 1.33g BL2



129
貝殻状刃器
黒曜石 (天城柏峠群)
V層中部 7.508g BL2



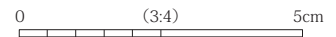
7
石刃
黒曜石 (蓼科冷山群)
V層上面 14.02g BL1

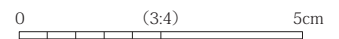
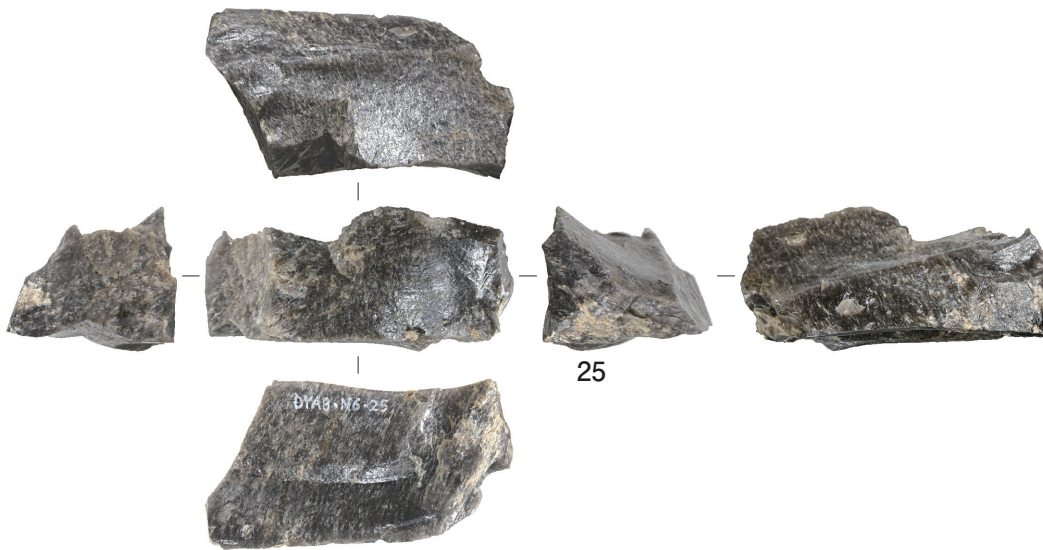
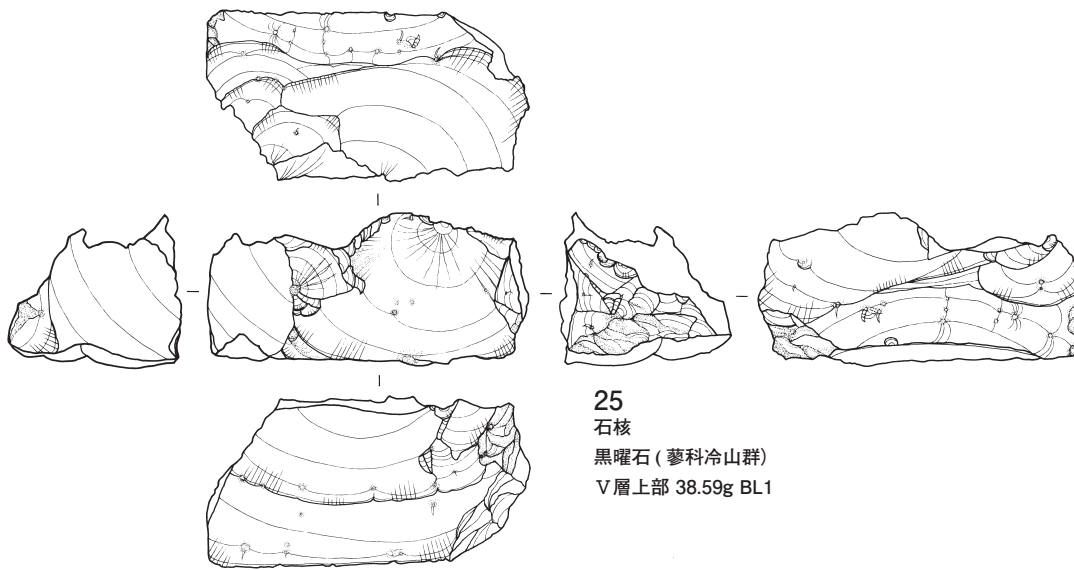


4
石刃
黒曜石 (諏訪星ヶ台群)
V層上部 11.11g BL1



117
石刃
黒曜石 (蓼科冷山群)
かく乱 4.24g BL1





図版 11 旧石器時代の遺物 4 (石核)



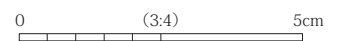
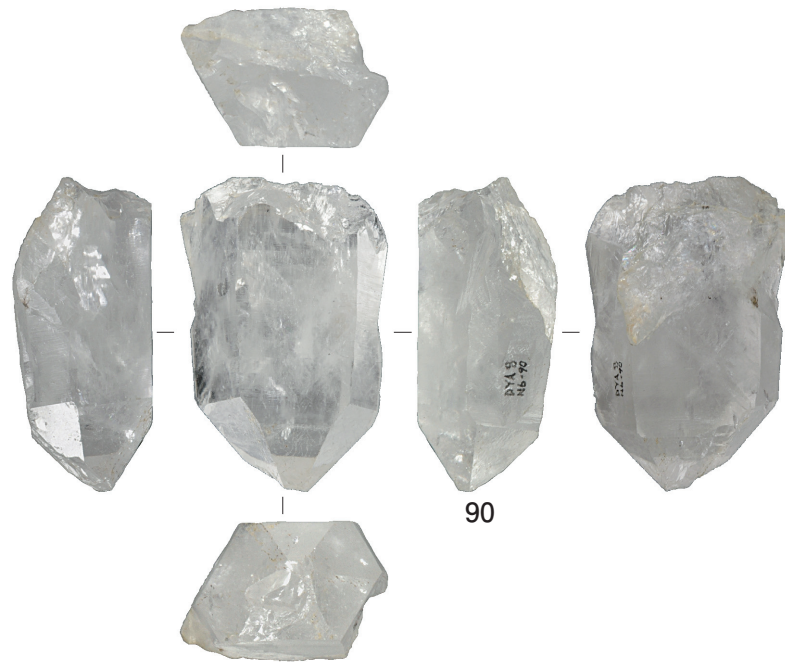
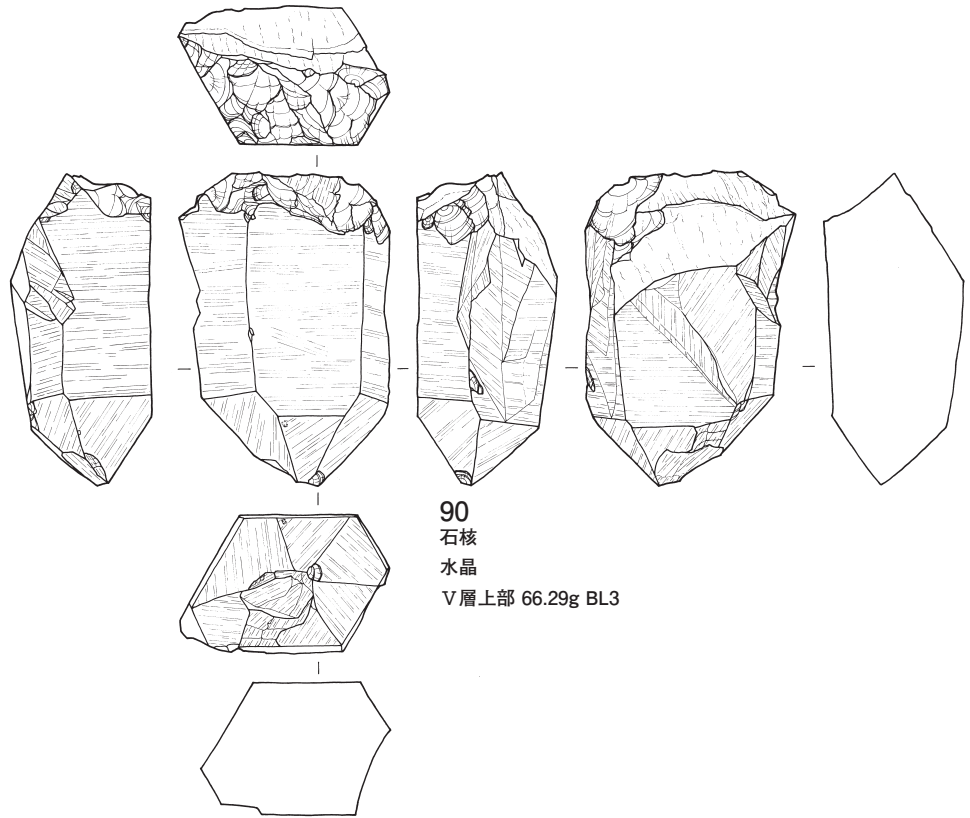
1
石核
黒曜石 (蓼科冷山群)
V層上部 63.39g BL1

94
石核
黒曜石 (和田鷹山群)
V層上部 34.37g BL2

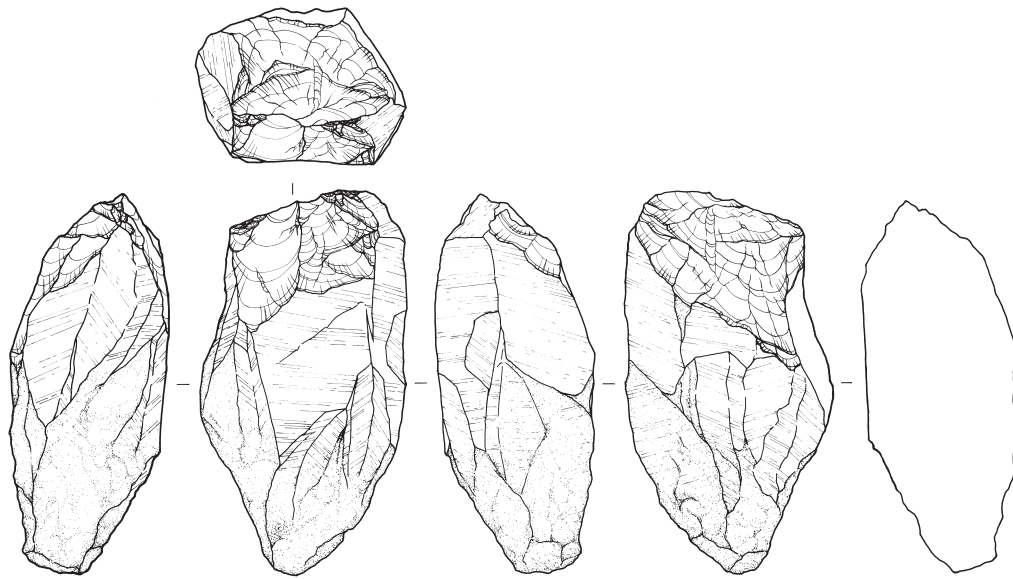
65
石核
黒曜石 (蓼科冷山群)
V層中部 13.69g BL1

161
石核
黒曜石 (蓼科冷山群)
V層上部 42.64g BL1

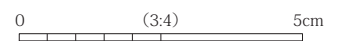
0 (3:4) 5cm

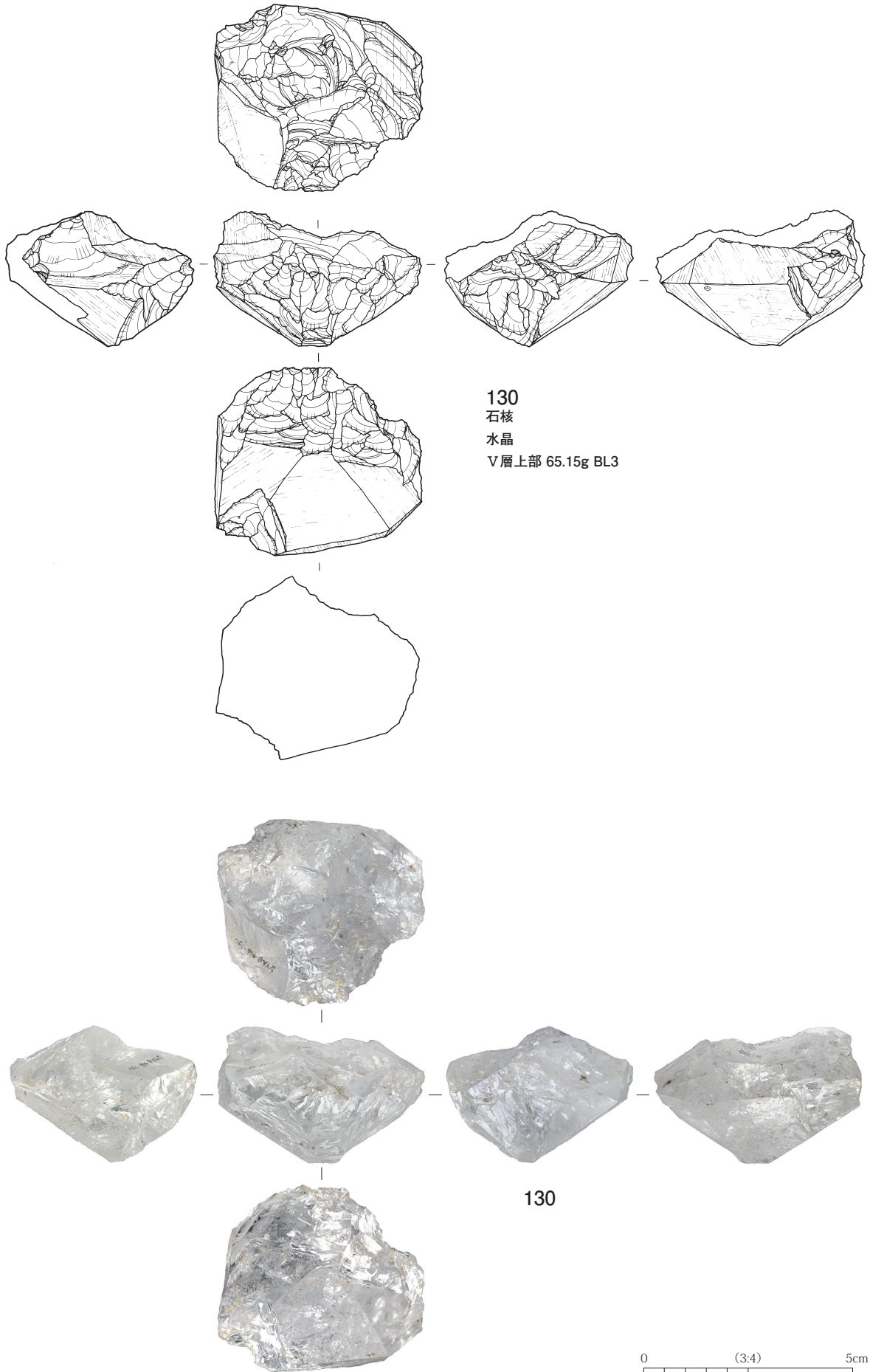


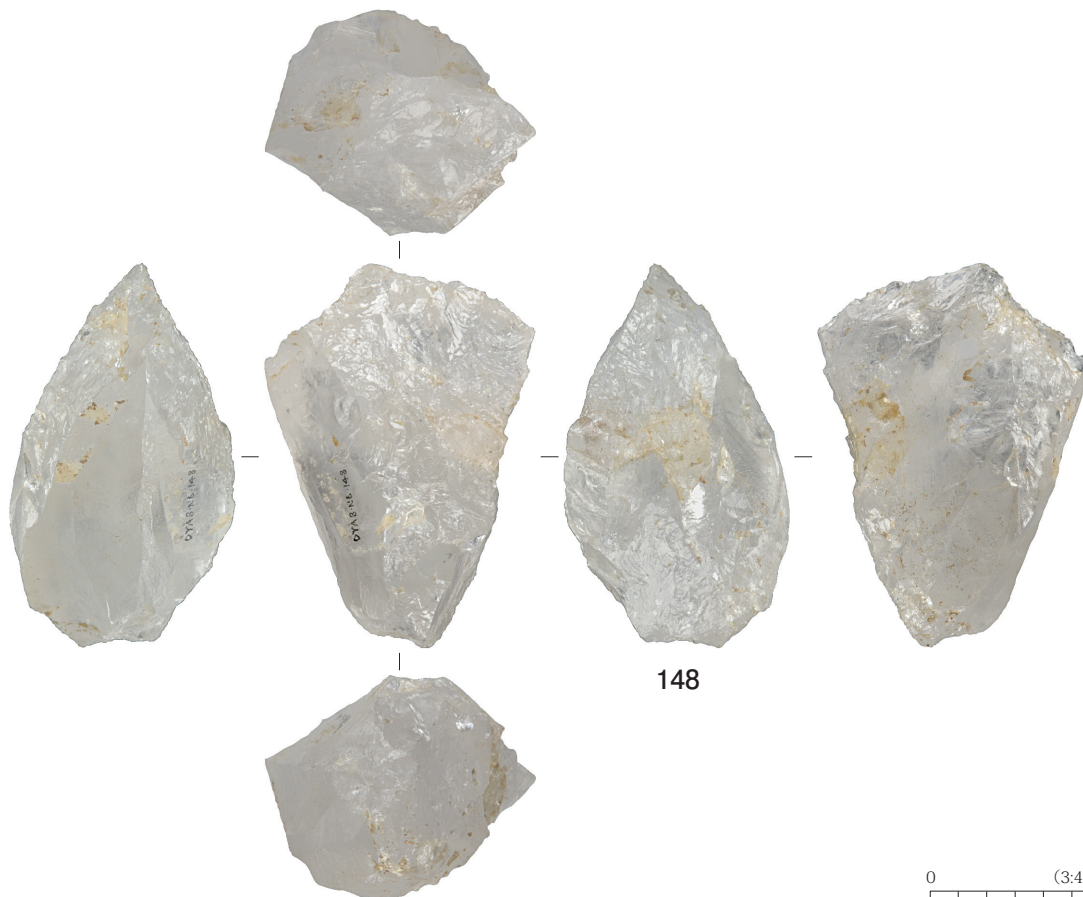
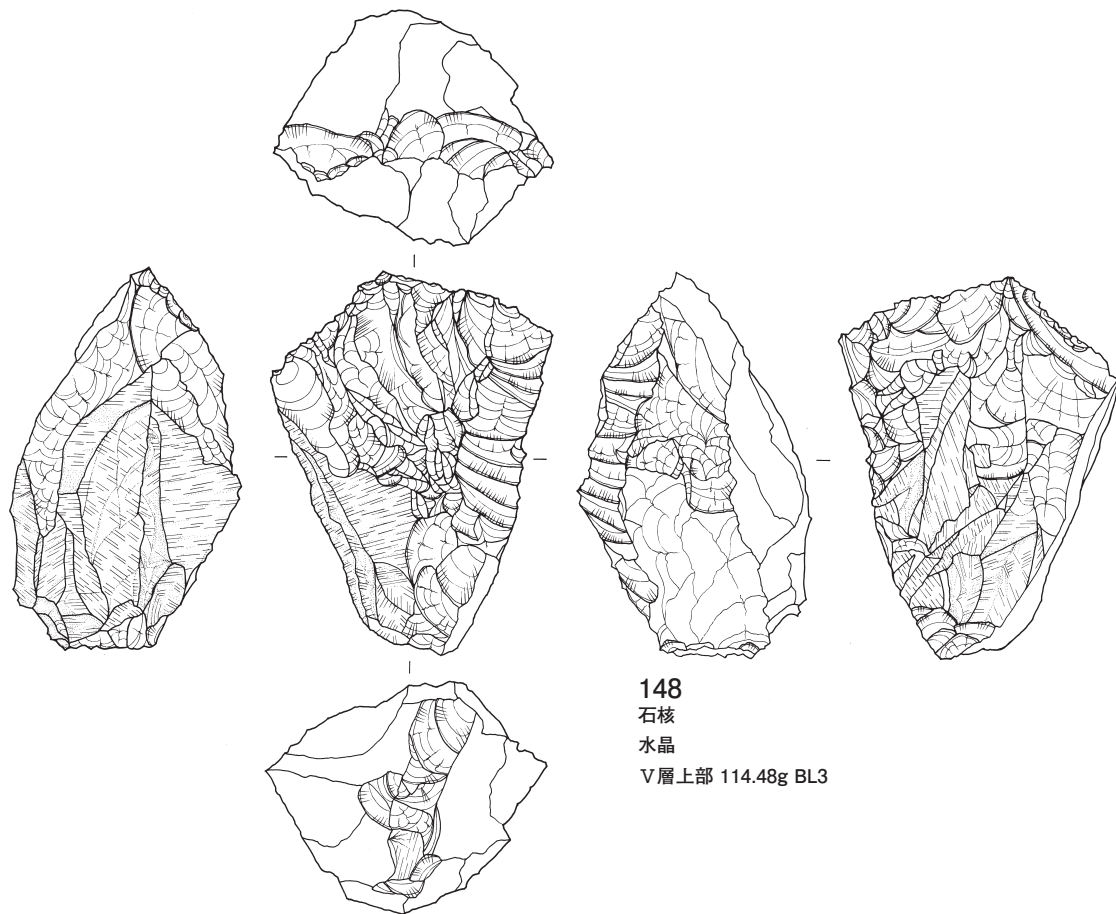
図版 13 旧石器時代の遺物 6 (石核)



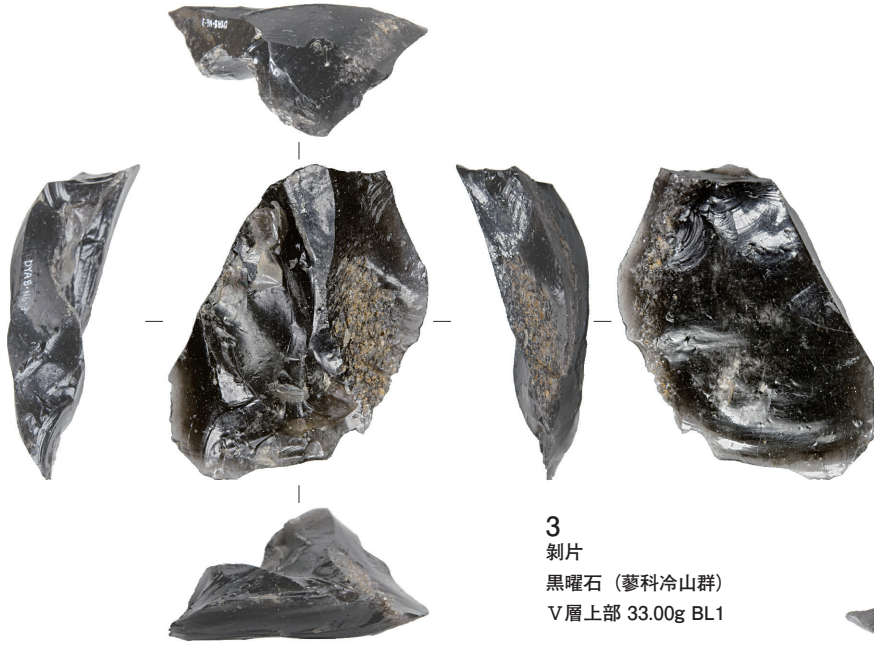
91
石核
水晶
V層上部 81.54g BL3







0 (3.4) 5cm



3
剥片
黒曜石（蓼科冷山群）
V層上部 33.00g BL1



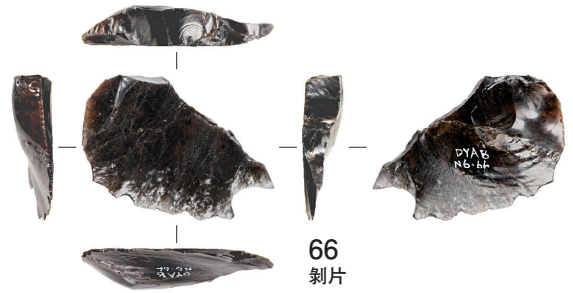
159
剥片
黒曜石（蓼科冷山群）
V層上部 19.00g BL1



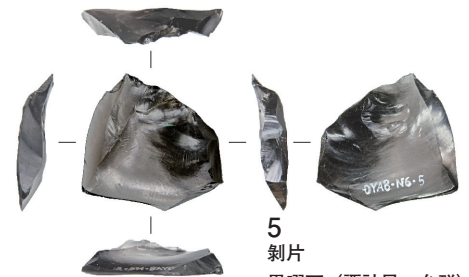
152
剥片
黒曜石（蓼科冷山群）
かく乱 17.71g BL1



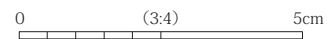
28
剥片
黒曜石（蓼科冷山群）
V層上部 10.32g BL1



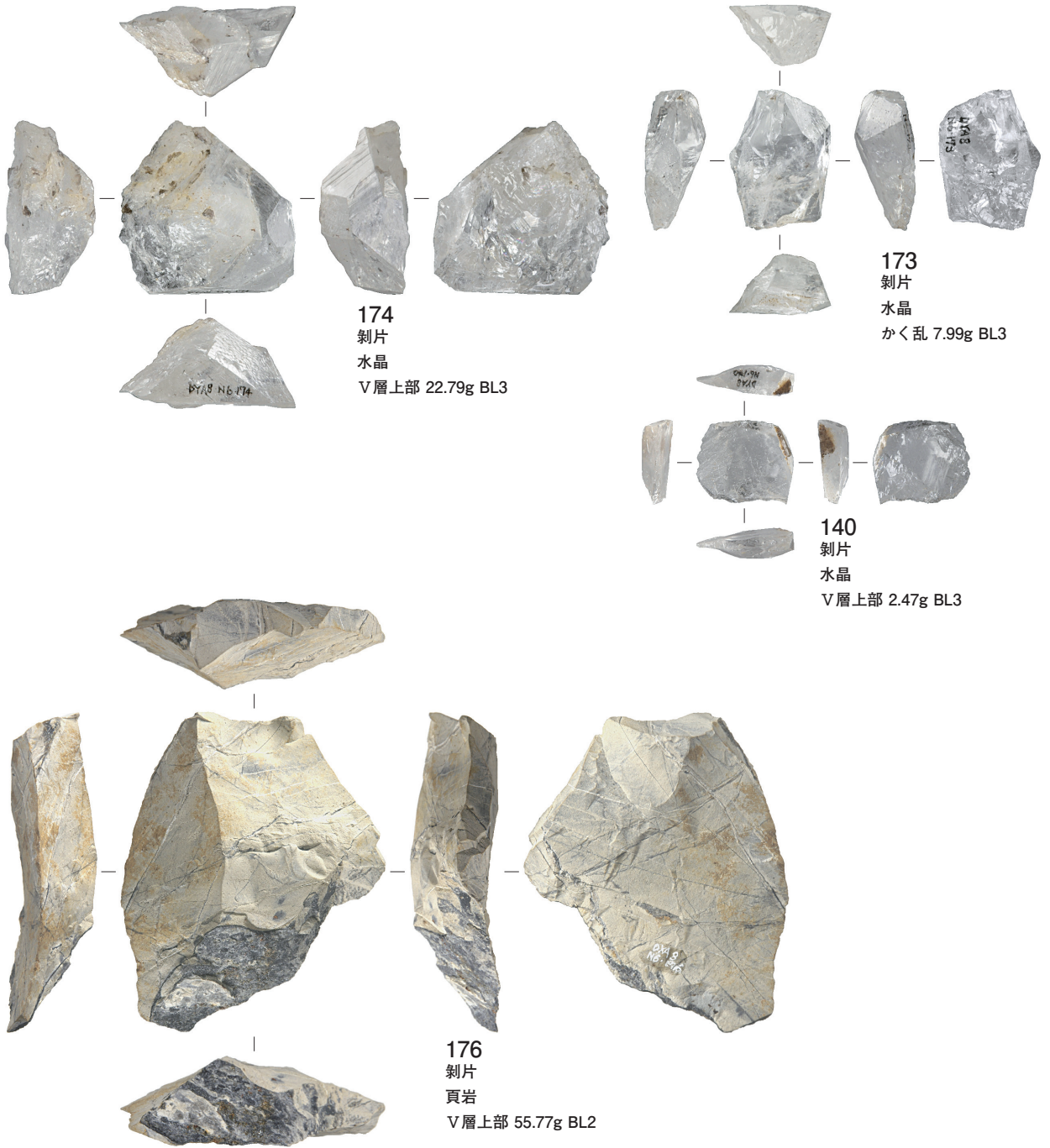
66
剥片
黒曜石（諏訪星ヶ台群）
V層中部 4.65g BL1



5
剥片
黒曜石（諏訪星ヶ台群）
V層上面 2.83g BL1

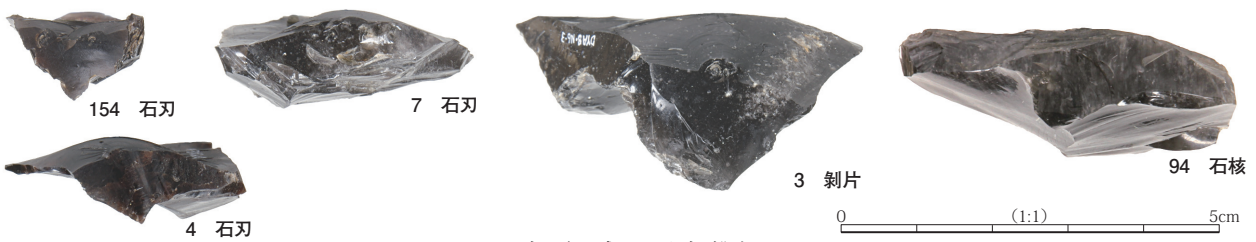


図版 17 旧石器時代の遺物 10 (剥片)・打面に残された打撃痕



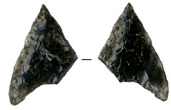
1 旧石器時代の遺物 10 (剥片)

0 (3:4) 5cm

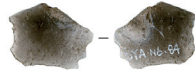


2 打面に残された打撃痕

0 (1:1) 5cm



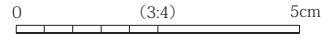
181
石鏃
黒曜石
IV層 0.34g 遺構外



84
剥片
黒曜石 (蓼科冷山群)
2層 0.23g 遺構外



85
剥片
水晶
II層 2.55g 遺構外



1 縄文時代の遺物



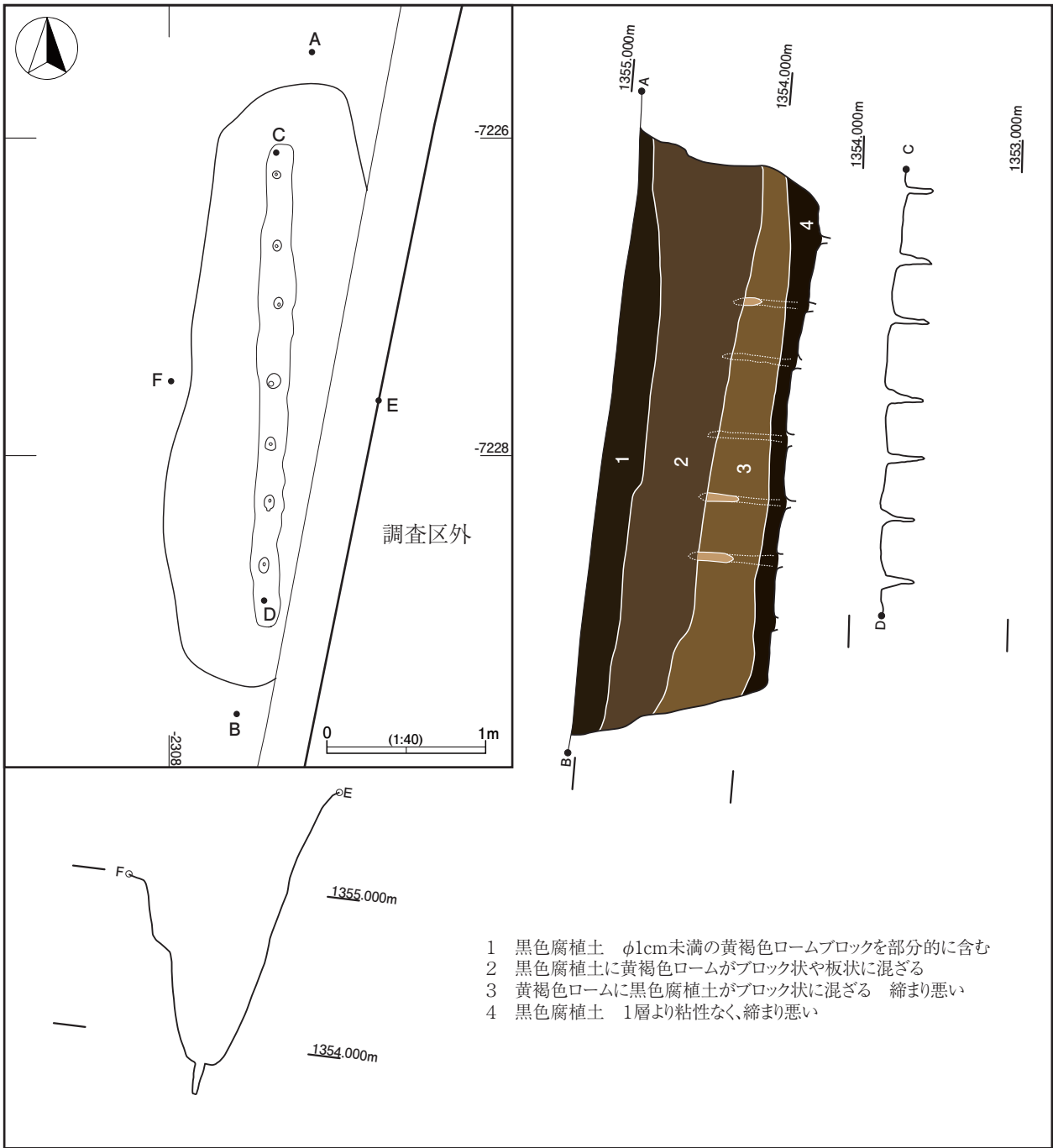
2 85剥片検出状況 (東より)



3 85剥片検出状況 (東より)



4 181石鏃検出状況



1 SK1 図面



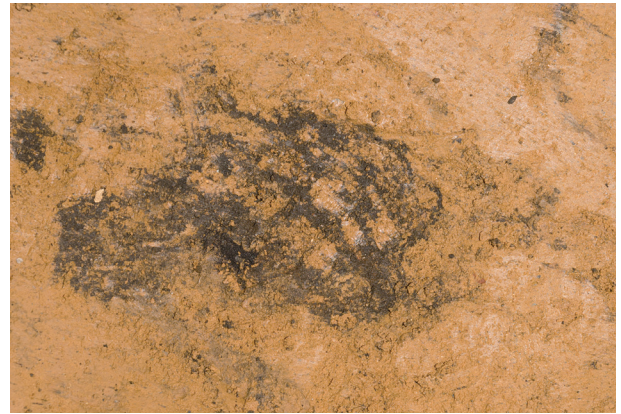
2 SK1 セクション中央 (西より)



1 SK1 逆茂木痕検出状況 (北より)



2 SK1 Pit2 検出状況 (南より)



3 SK1 Pit6 検出状況 (南より)



4 SK1 完掘状況 (北より)



5 SK1 Pit6 逆茂木



6 SK1 東壁掘削痕 (西より)

報告書抄録

ふりがな	やでがわいせきぐん やでがわだいはちいせき							
書名	矢出川遺跡群 矢出川第Ⅷ遺跡							
副書名	県営畑地帯総合土地改良事業南牧地区農道6号改修工事埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	115							
著作者名	谷 和隆							
編集機関	(一財)長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センター							
所在地	〒388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田963-4 TEL 026-293-5926							
発行年月日	2017年3月3日							
所収遺跡名	所在地	コ ー ド		北 緯	東 経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
		市 町 村	遺跡番号					
やでがわだいはちいせき 矢出川第Ⅷ遺跡 (平沢パイロット遺跡)	ながのけん 長野県 みなみさくぐん 南佐久郡 みなまきむら 南牧村 おおあざのべやま 大字野辺山 あごふたつやま 字二ツ山	20305	野辺山 旧石器8 (縄文～ 中世66)	35° 56' 08"	138° 28' 29"	20131001～ 20131204	600m ²	県営畑地帯総合土地改良事業南牧地区農道6号改修工事
要約	<p>旧石器時代の石器177点が出土した。器種組成はナイフ形石器4点、貝殻状刃器2点、石刃5点、石核9点、剥片114点、碎片43点、石材組成は黒曜石153点、水晶23点、頁岩1点であった。ナイフ形石器にみられる対向調整、打面調整や頭部調整がほとんど施されない石核、大きな打点と打瘤が残る石刃の特徴から、野辺山高原では確認されていなかったAT降灰以前の石器群と考えられる。</p> <p>中世では陥し穴の逆茂木材の放射性炭素年代測定により15世紀中頃の年代値が明らかとなった。陥し穴の規模や形状、打ち込み式の逆茂木等の特徴は、これまで八ヶ岳南麓地域で確認されていた中世の陥し穴と共通しており、その分布域は北東に拡大することが明らかとなった。</p>							

平成 29 (2017) 年 3 月 3 日 発 行

センター発掘調査報告書 115

矢出川遺跡群 矢出川第Ⅷ遺跡

県営畑地帯総合土地改良事業南牧地区農道 6 号改修工事埋蔵文化財発掘調査報告書

発行者 長野県佐久地方事務所
(一財) 長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
〒 388-8007 長野県長野市篠ノ井布施高田 963-4
Tel 026-293-5926 Fax 026-293-8157
E-Mail info@naganomaibun.or.jp

印刷者 信毎書籍印刷株式会社
〒 381-0037 長野県長野市西和田 1-30- 3
Tel 026-243-2105 Fax 026-243-3494

